能登名跡志

石川縣図書館協会

604
539

604-539
1200501531865

能登名跡志

石川縣圖書館協會

能登名跡志

昭和六・一・一
帝國圖書

一、裝幀は玉井敬泉氏の手に成るもの、圖案は國幣中社白山比咩神社藏の國寶螺鈿鞍文樣を資料として作圖せられた。

一、校訂は末尾の解說と共に石川縣史編纂係の二置謙氏を煩はした。

一、校正は太田南圃氏が主としてその勞をとられた。

604-139

能登名跡志序

それ能登の國は、北海に出ることゝ行程遙に五十餘里におよべり。横程は總に五里をすぎず。山ひろく地せまりて山海わかたず。只壁岩の嶮路曲折たるに、怪岩奇石浪をくだきて蒼海眼前に有。故に山水の勝地にして、佳景の秀雅一州にあり。加之皇社靈閣郡に滿ち、廓跡舊典は所々に盈り。嘆敷哉邊鄙の遠境なればしる人なきをうらむ。すべて此國の風土古代のこりて、人柔愞也。予いさゝか公務にかられてこの北濱を巡ることひさし。折にふれ邑人のものがたり、あるひは雜見するにまかせて、文蒙のをかしきをもしらず、たゞ其儘に書記して集めたるをふゞころにするのみ。

安永六酉立春日　　加陽金府　太田賴資

能登名跡志卷上

金澤御城下より能登國へ行くには、津幡の驛を經て能州境高松の驛迄凡六里半あり、本馬二百文也。又津幡驛中に越中・能州へ行く追分あり。越中へ行くには、竹橋にて馬次、倶利伽羅峠を越、越中今石動へ出る也。能州へ行くには高松の驛にて馬次、能州今濱の驛へ出る也。津幡より高松の間に七窪ゝて、二里の程廣き入濱ありて、砂山を越へ道もさだかならず。漸人馬の足跡をしるべに行き歩む也。是も風雪のあれの時は吹埋み、前後を忘じ難所也。近年は砂山の頂きに、大石の地藏尊建立して、是を見當にするゆゑ、往來少し易し。又金澤より高松への間道あり。是は金澤北の町端七ッ屋といふより、粟崎往來一里行けば北間村といふ。洲崎より向粟崎といふへ舟賃一人四文宛にて舟にて渡り、黑津舟權現の森の後磯際へ出で、白尾・木津抔經て高松へ出る也。是にも七ッ塚なゞゝて二里餘人家もなく、至極の難義なる往來也。されども津幡通りよりは一里近し。

又北間村より潟上を二里半舟にのり、大崎村といふへ渡し、外日角村へ出で、高松へ出るもよし。

◎高松　加州河北郡也。津幡より三里、本馬百二文、輕尻六十四文、人足五十一文、家數二百軒計、過半獵師にて蛤の名物也。よき驛なり。此驛はつばた・のせ・指江・狩鹿野・宇野氣・木津と此宿に來る。金澤より六里半、本馬二百十文也。間に七くほと云て、二里程のはまにて高下の所あり。又金澤よりの間道は、粟ヶ崎に出れば濱傳ひにて一里計も近し。此間に七ッ塚抔とて人家を隔し所あり。又加賀のさかひは、山手は松の一本あり、是を境とすと云り。濱手は貝がら塚とてあり、是を境じるしとす。先年此塚にて今濱村の長三郎と云者金子を拾ひし事あり。

又此山の東の道を宮島越と云、加州・能州の浦方、越中今石動の往來也。上河合村と云より東へのぼれば、加越能三州の境山あり。是を三國峠といふ。坂の上に一里塚のごとくの小山ありて境とす。南は加州吉倉山、東は越中宮島山也。西は能州河合山也。諺に云、三尺の綱につなげる牛は三國の草をはむとは此所也。

但越中の宮島村は二里の間の散村也。宮島とは惣名にて、中にも能登近き所を小名に栗栖（クルス）と云。此村の入口に俊寛僧都の古塚あり。惣じてのこの國は、往古羽咋潟より能登部街道を經て、内浦田鶴濱・曾濱・石崎抔、所口海つゞきて島國なりしと云り。日本の北島の陰國にして鬼門たり。始は越中の内にて、鬼界が島というて人も住ずと聞えり。是等私の別書に出す。寔に鬼國と云程の國成によつて、化鳥大蛇も住み人を取喰ふ。是は魔王我國を取んと天くだりて、神力降魔に通力失せ、行所なき外魔の集り所成しを、氣多の御神此變化を退治ありしより、次第に人家出來て今のごとくに成れり。今も山田の龍大明神・鷲嶽八幡宮等の緣起にのこれり。亦俊寛僧都・丹波少將・平判官三人の配所もこの能登にて、所々に其舊跡あり。中にも富木の鉈打山と云に、俊寛三十三所の觀音を移して順禮有しとてあり。又成經・康頼歸洛祈りの爲、三熊野の權現を勸請ありて毎日社參ありしとて、熊野方と云に權現の大社あり。又兩人歸洛ありて、内府平重盛公此事聞給ひ、元來三熊野は平家信仰の御神なれば、御神体を越中の關野の神社眞津の宮へ

移し給ふと緣起等にあり。又俊寛の塚宮島にある事、元暦の頃木曾義仲越中小矢部川に陣取ありしを聞き尋來り、平家の運傾く迄此所にありしとて平家調伏の爲行法の瀧難行の岩屋抔とてあり。此瀧の不動尊今も靈驗いちじるく、諸人歩みを運ぶ也。其後無程爰にて卒しられしとあり。此外にも鵜茅葺不合尊鵜殿の御産所も、能登の諸橋の鄕とて委く御舊跡あり。是等の事、今筑紫薩摩方なゞうたひ物等に書傳る事不審し。しかし是等にもかぎらず、所々に此類ひ多し。案ずるに邊鄙の物事しれがたきまゝ、作者の未熟にしてしりやすき方に作れる物なるべし。然ば根元をわきざまにして、すたれる事甚遺憾のこと成べし。去ながら古をひきかへ今を改るにはあらね共、彼を聞き是を見て書しるさんと思ふにより、爰にしるすもの也。

又高松より今濱迄の半途に大海川尻川とてあり。此川より能州路也。和漢三才圖繪にも川尻より金澤へ六里と有。昔は此濱邊に有て驛なりしに、水難に退轉して、川尻村は今山の手にありて小村也。此川尻川は常は歩渉り也。出水抔には海際洲入て危く誤りありて、すいりとは俗言にして、まことは砂落入て踏所さだまらず、歩む内に足深く砂に入りて死する者あり。能州第一の六ケしき川也。尤出水には、川上に二ッ屋村とてあり、其向に渡り瀬あり。今濱より南の里人は、高松との往來の道の川也。不案内の者は必行懸りわたるべからず。馬或は人の渡るをみて渉るべし。源は寶達の牛首村山より一筋、同瓜生村山より一筋流れて、上河合村にて落合ながるゝ也。この川筋にて取雜魚は、銀ごりとて少細長くて名物也。又二ッ屋村に弘法大師の名號石とて、石ごとに文字すわりたる石畑中にあり。

けふしも快晴なるまゝに、浦半の網びきもめざましくて眺にあかず、やう〳〵と高松の驛になれば、早や秋の日のならひとて、西の方のあか〳〵とするに。

しなてるや蜩來なく庄屋が軒

又寶達山は國の南にあり。まことに三ケ國へ跨れる大山にて、過半能登也。此山は藥草・金銀其外産物多きなれば寶達の名あり。寶達村は西平にあり、家數八十軒計、町作りたる村也。中頃金をほりし節所々より來り集りし故、人々の出所を家名によぶ家有。中にも谷内屋とよぶ者は根元の

者にて、今用ふる所の大釜は末森城のかまなりしと云り。その外此者の家に武器の類取傳ふる也。銀をほりし頃は繁昌して家數も多く有し由。其時金を堀し所は谷内にあり。金山敷潰れし時人多く死する故、今も雨の夜は人多くなく聲す也。是をなき谷と云。惣じて人多く死せし古戰場などはまゝある物也。魂魄殘りて天曇に、陰陽の氣せまり蒸して聲あり、野火・燐火などのふしぎある事也。又寶達の御前と云は、村より一里登る也。手速姫ノ神社立玉ふ、式内の社也。權現本地は釋迦と云。祭禮は毎年八月廿六日・廿七日也。高山の絶頂にあれば、常に風あらきゆゑに、社の廻り土手を築き窪みにあり。又此御前の北に當て、陰陽の瀧と云てふしぎ成瀧あり。瀧口二つに成てあり。雄瀧と云は銚子口より水落て、一月の中上十五日水落て越中氷見庄小米川等の源也。雌瀧は下十五日洞口より水落て、能州子浦川の源也。誠希代不思議のたき也。其上此邊は、山深く清淨の地にして、折々天女あま下り遊ぶ事ありと昔より云傳へり。亦此邊によき髪剃砥出る所あり。御留め山にて切出す事ならず。春の頃は、猿が馬場又は朝日姫が谷などゝ

て有て、面白き所々數多あり。蕨・獨活・ぜんまいの名物也。此寶達續を、押水大海の庄・押水北の庄・押水中の庄とて村々多し。是を押水三郷と云り。此所を押水と云るは、紺屋町村と云に昔弘法大師與へ給ふ水あり。杖にて岩を押給へば水出しより、押水の井といへり。是を以押水の名有。又此村に岡部六彌太が城跡とてあり、誤りにや。しかし此村に、六彌太の子孫とて百姓にあり。又河原村といふに長兵衛とてよき百姓あり。昔は長者とよばれし也。其外古き百姓に、武器杯持傳へたる者此郷に多し。川尻川より今濱迄に、米出川・相見川とて二筋あり。是は常に水少し流る。川上に相見ノ神社立給ふ。近郷の宗社也、式内也。

◎今濱　高松より一里三十四町、本馬七十八文、輕尻四十一文、人足三十八文、人家二百軒餘あり。此宿は昔は荒地のすて濱なりしに、上は川尻村は水難に退轉し、下は宿村とて末森の城下にて驛有しに、是も兵火に中絶して有しに、其後子浦或は一宮より高松迄驛なくして、往來便りあしきにより、御僉議ありて近里細見村・新保村・鍋坂村の三ヶ村を、此所へ合せて新宿に被仰付しより今濱の名あり。今は

内外の追分の驛なれば、次第に繁昌して獵師商家數多出來、内浦へ行は子浦にて馬次也。外浦に行には一宮に而馬次也。又此村に、法華堂の五兵衛とて古き百姓あり。此者の先祖細見村にありし時、日蓮上人の弟子日像と云僧、北國に法華弘通の爲下向せし時此者の家に滯留し、近郷の者共に妙典をとききかせる折から、近里麥生村今の妙法輪寺は此頃は教院の地なりしが、其時の院主日像と度々法論せしに、院主打負日像の弟子となり、即改宗ありて、今も本尊阿彌陀と釋迦と左右に安置あり。兩尊共に行基の作也。其外佛具等も、今に不殘其時分の佛器也。又今濱法華堂五兵衛方に、日像の遺物の日蓮の眞筆のまんだらの一軸あり。御收納藏二筋、其外御家中の米藏宿あり。此今濱より子浦へは一里十五町あり。本馬四十六文也。さて此上卷の分は、是より三崎の郷狼煙村まで外通りの事を書のせり。末森・子浦の分は近里なれ共下卷の末にあり。

今濱より一宮へ行二里に羽咋川尻川有。當國第一の大河也。常に往來に舟渡あり。此川は羽くひの潟尻に而、則羽咋村は川の南にあり。能登一の高所にて二千石餘の村也。民屋三百軒餘あり。本念寺とて、東方の一向宗の觸頭也。此御坊の法恩講の時、毎年八月廿五日唐戸山と云所にて、角力あり、群集賑敷事也。又當國觀音三十三所札所の内、十五番の觀音松岡寺と云は、村の東端に有。今は寺なし。御收納藏數戸前あり。塵濱村とあれ共無高の所也。獵師迄也。又羽咋の潟は村の東北寄にあり。長一里餘幅二十二三町あり。潟緣に村々多し、名所も多し。是は子浦川・飯山川其外南東の谷水流入也。鯉・鱣・鮒の名物也。往古は入海にて、内浦所々へつゞきて有しに、次第に陸地となり、おのづから潟となりしと云り。昔島國成し時は、魔王惡鳥と化して人を取喰ふ。氣多大神宮平け給ひしより羽くひの名あり。萬葉。

しをぢからたゞ越くれば羽咋の海朝凪したり船梶もがも

此潟緣は大町村・金丸村・千路村抔とて村數多し。千路潟共いへり。中にも太田村・四町村は、江戸土方氏何某ごのゝ領地也。四町村の庄屋に勝田永三と云あり。又堀替新村には彦助と云大百姓あり。四町村の内に、若松屋とて抱の女

有て繁昌也。

如月のはじめつかた、此湖上を小船に棹さして金丸あたりへ漕出せるに、千里の眺四方山の風景目がれせぬ折から、岸に今様をうたふ聲聞ゆるを見れば、やんごとなき姫達の礒菜なごつめる粧ひ、此邊には思ひもよらざる人と舟人にとへば、あれこそ四町の里の名におふ若松屋のよね達といふを。

傾城は誰が爲につむ若菜哉

又四町村勝田永三は退役して平百姓也。此者先祖は畠山家より二百石給はり有しが、天正年中畠山亡びし後百姓に成る。于今墨付等持傳へり。菅原合戰の時の感狀なごあり。

◎一宮　今濱より二里十五町、本馬八十八文、輕尻五十四文、人足四十四文也。高松より是までは平砂みち也。此一ノ宮は宿と寺家と、一所ながらも二ヶ村になりて、宿の分は家數百軒餘有て、商家抔あり。又寺家村は氣多社の門前にあり。神主・百姓入交て百五十軒計あり。此一村は氣多の社地にして、火を齋む事正し。或は女の月の穢なごは家々の後に別家有て籠る也。又懷胎の女は、其產月になれば山に出小屋あり、是に出て產す。若背かば家にたゝりあり。當社は他の社と違ひ、格式色々有て嚴重也。若愼まざる時は必ず忽に其祟にあたる也。惣じて昔は一國當社の守地なれば、如此火を齋しに依て、能登に限り產して新齋(アライミ)の內を小屋の內と云。

又氣多の一ノ宮は大社にして、延喜式抔に委し。本社は大己貴命、奧社は素戔嗚命・稻田姫命也。則御夫婦の御神、此所にて神かくれ給ふと云へり。頂(ウナジ)の社は大穴持命の御像石也。神代よりの御鎭座にして北國の大社也。又諸神記の中卷に曰く、氣多の神社は祟神天皇の御宇御勸請とあり。又類聚國史神祇の部に、文德天皇齊衡二年五月辛亥詔ありて、能登國氣多の太神宮寺に常住僧を置と也。其頃は社人・禰宜・社僧多くありて、今に六萬坊なごゝ云所あり。社領その頃は羽咋郡三萬石也。中頃畠山國主の時は三千石也。其後は兵亂に太神宮寺多くの社人衆徒も絕轉して、御當代になり御元祖大納言樣社領三百五十石御寄附、又利常樣になり、大宮司櫻井の外に社僧四ヶ寺御建立あり、社頭諸堂御再建あつて、御膳調進の濱十町網船一艘御寄附。大宮司

大監物は六十五石、社人廿人と神子一人は七石充、別當長福院は六十石、地藏院・藥師院・正覺院三ヶ寺共に十石あて也。御社領三百五十石の內何も配分す。櫻井大宮司は一國の神主の觸頭の錄所也。長福院は四ヶ寺の首領也。此寺の露地は、利常公御逗留ありて作らせられしとて見事也。又當社の寶物數多ある中にも滿汐珠あり。是は種々奇瑞有し靈珠也。賴朝公奉納の太刀一振、梶原の太刀一振あり。其外寶物多し。わけて祟神天皇より代々勅使有て、綸旨・院旨數通あり。是は大宮司鍵預り也、賴みて拜見あるべし。

昔泰澄大師川越の堂に籠りて、天照太神宮を拜み奉んと誓ひありしに、或夜夢想の御歌に。

戀布ク者尋天毛見與能ク登ル一ツノ宮ノ奧之社江

かく御告あるによつて、大師此社へ詣給ふに、御神体山伏姿に現はれ、即誓て曰く、天照太神を信ずべくば先我を信ずべしとて神がくれ給ふ。其古禮今にのこりて、色々其古式あり。每年三月四日より石動山衆徒六人來りて、中門殿において七日の別齋あり。神前に斧まさかり抔を持ち舞曲をなし、護摩を焚て奧の社へかける也。是を採燈の護摩と云、是を俗に男祓と云。御社の煤拂と云事にや。又祭禮には石動山の衆徒來り、隣村柳田村に岩窟あり、此所に暫く籠り神輿を待請、山伏姿にて螺貝を吹也。此穴を俗に山伏穴と云。是等に古禮あり。是によつて昔より石動山は、北陸道の內六ヶ國、每歲大宮一度、火宮一度、此の一宮分一度、知識米とて勸進す。往古より石動山とは有緣の事也。其外祭禮年中數多あり。中にも大祭は、每歲二月初午の日御出輿ありて御歸座ある也。此道すがら色々古例あり。福田村の七郎兵衛と云百姓、小き籾俵二つ備ふ、是を投俵と云。又八幡村の內捨子後(シリ)と云所にて、其昔御子をすて給ひし因緣にて、神輿の鈴ならず。其捨給ふ姉宮は上曾根村の氏神、弟宮は下曾根村の氏神也。又昔は道筋遠くて、甘田村の保へかゝり、宿女村の宮に御一宿有し也。依て宿女の名あり。此宿女の御神体は椎葉圓(シヒハマル)ノ神社と號して、石動山天漢石三つの一にて、山御同体の御神にて、御神体は石也。誠に此旅祭の行粧は、多くの禰宜神主美々しく馬上にて神輿を供奉し、長途の行啓の壯觀也。又每年十一月中の巳の日は鵜祭とて、昔は代々の帝より勅使有て、四方にかく

れなき祭禮也。同國鹿島郡中山の郷鵜浦村より鵜を取て捧ぐ。一宮まで十一里道の程あり、道すがら勸進す。所口本宮にて卯の日新嘗(ニイナメ)の祭禮とてあり。夫より良川村の宮にて一宿し、己午の日一宮にて清の祓あり、丑の刻に神前へ鵜をはなつ。鵜自ら本社の階を登る。戸帳の前にて羽叩して跪く所をとらへて海へ放つ。此鵜極めて越後國中山の神社能生權現の磯に寄る。其時能生權現の祭禮也。此謂は近き浦にもあるべきに、遠き鵜浦より鵜を捧る事、或時北島の女神此鵜の浦の磯邊へ寄給ひて、一宮の御神と夫婦になり給ふ。其後御中あしく成給ひ、女神又越後の能生へ飛給ひて、ある社地をかり跡を垂れ給ふ。能生權現も中山の郷中山の神社、又鵜浦も中山の郷也。今も鵜田とて神田ありて、當屋の者此田を作て鵜を取て捧る也。則利家公御墨付あり。

予十月の末つかたこの玉垣に詣でて

ぬぎやすき笠も惠や小六月

又一宮の上野に十三塚とてあり。何れも古塚にて、中にも甲塚とて折々兵具を掘出せり。又石塚と云は、方二十間計に積たる石毎に梵字彫りてあり。是はいづれも一宮社領三萬石の時は、一きはの所にて衆徒多く有し、其時のあとなるべし。今に衆徒の住し所とて、羽咋村境六萬坊と云所あり。又一宮と柳田村境に粟生の七郎と云し人の城跡とてあり。此人は越後謙信方とたゝかひて討死せしとて、其塚は羽咋村境猫橋の邊にあり。

又一宮宿村の一向坊に、聖德太子の靈像あり。色々奇瑞あり。是は瀧村の寺ヶ崎と云よりほり出せしと云へり。一宮と瀧村境に瀧あり。昔は山茂り大木ありて、餘程の瀧也しと也。依て瀧村の名あり。此瀧の不動尊は泰澄大師の作にて靈驗あり。今は瀧村の氏神となり社あり。瀧石とて眞石の水晶の帶あり。礎などによき名石也。瀧村は海へさし出る所にて、昔瀧の津とて繁昌なる所にて此邊の津なりしと。一宮の勅使の御宿抔せし者の筋とて、四位と云者あり。今は一村釣を業としてあさまなる事也。釣鯛の名物也。昔一宮勅使に中納言家持卿御下りのときの歌とて。

越路野をさし出みれば邑知潟氣高くみゆる瀧津瀬の宿

越路野は千路の潟の北平にあり。潟の南東の方を大路の里と云、七十五ヶ村をさして云也。是は飯山の所に書記して

あり。又家持卿の歌に。

都より思ひ越路の竹の津に一夜のうちに雪はふりつゝ

竹の津と云は、今の野村邊は、昔大竹藪にてありしといへり。

芝垣村は一ノ宮より十四五町にあり。茶屋助左衛門とて古き百姓あり。昔芝原將監と云し郷士ありしとて、廓跡は南の山にあり。舘中將監とも云り。至て富貴にして佛神信仰の人也。色々奇特ありて、常は山水の風景をこのみ、領内に近江八景を移し、又は内外の伊勢の神垣勸請せし所とて、東の山中に所々にあり。此磯三町計り沖に、長手島とて風景の島ありて、今は七面明神の堂あり。江州のうきみ堂の風景の由。本尊七面の御神体、此海に上り給ふ石像にて奇瑞あり。即ち村に本成寺とて日蓮宗の寺あり。此寺の支配也。又芝原將監は瀧谷妙成寺開基日那にて、法名法光日惠大居士と號して、瀧谷開山堂に位牌等あり。則ち妙成寺開山日乘上人の伯父にてあり。日乘も此家にて出生の由。但瀧谷は此芝垣村より山手へ入る也。十町餘あり。一ノ宮より二十五町餘あり。瀧谷村はのこらず妙成寺の寺領地也。

金榮山妙成寺は羽咋郡土田庄瀧谷村にあり。日蓮宗にて永仁年中僧日像の開基の郷寺にして、北陸道第一の法華の道場也。寺領百二十石餘。中興黄門利常公御母君壽福院殿御菩提所にして、諸堂御建立ありて、組物・彫物等手を盡し、七堂伽藍づくり也。中にも番匠の名人山上何某の作れる五重の塔あり。境内に七坊あり。其外末院所々にあり。又寶物あまたあり。中にも日蓮・日朗・日像三幅の對のまんだら、傳教大師眞筆の心經一卷水晶の塔に入てあり。弘法大師吼木櫻にて彫給ふ法華經の板木六部あり。是は吼木山法住寺の什物成しに、此寺にあること謂れあり。兆典司のゑがける涅槃繪一幅、是一ノ宮の什物の由。菅相丞公の御筆の一軸、利家公御眞筆の當寺境内御陣取の繪圖の一軸、其外寶物多し。畧す。何も常は寶藏に入、開帳あたはず。又鎌倉の時奉行青砥左衛門尉寺法の定書、客殿に懸てあり。又開山日乘、此寺繁榮たらば芽張べしとて、平生用ひられし槐の杖をさゝれしに大木となり、今開山堂の後に杖塚とて、槐の木の古木あり。さて釋迦堂の本尊は丈六の大佛也。此御首は芝垣の磯に奇瑞ありて寄り給ふ尊像也。此外靈像多し。

昔此寺は瀧谷寺とて、石動山門流の敎院の大地なりしに、時の住持を乘微阿闍利とて尊き行者なりしに、或時佐渡國への渡りの船中にて、日蓮の弟子日像と行力くらべありしに、乘微負けて弟子となり、日乘と改名し、則此寺を日像に渡し法華の道場となし玉へり。永仁二年四月のこと也。此事石動山の衆徒聞て、色々仇をなすといへども不叶して、終に日像草創ありて開山となられたり。毎年六月廿六日日乘忌の講會あり。諸商人外より多く集り、參詣の人多くして繁昌也。此忌講會は、諸國の末院僧徒集り、常住の官主を輿にのせ、客殿より開山堂まで音樂歌舞にて行列あり。僧徒供奉し、中にも山伏の姿にて螺貝など吹て供奉するもあり。是等は則昔の乘微阿闍利の古式也。近邊よりも遠方よりも參詣ありて賑敷事也。又向の山に蚊寄の八幡とてあり。是は此忌講の日の夜、乘師蚊を封じ給ひしことありて、寺中の蚊不殘此八幡の拜殿に行て寺にをらず。依て蚊よせの八幡宮と云。此忌講に町村の武右衛門・千路村の柳屋と云者は、古き百姓にて由緒有て拜禮に出る也。宗旨は一向宗也。又二ノ宮村に北左衛門・加賀左衛門とてあり。是は石動山より仇なせし時、一命に懸御味方せし者とて、是も拜禮に出る也。七八町奥に瀧谷と云所に乘師屋敷とてあり。隱居所の跡也といへり。元より此日乘は瑞德甚敷僧にて、今に瀧谷村に產婦のあやまちなし、厄神崇りなし。又七面の社は向の山四五町にあり、靈驗あらたなり。亦一里山奥に大森と云おそろしき所に白山宮あり。是日乘の石動山より仇をなせし時、御伯父芝原將監此所に隱し置參らせられしとて、御神体は上人の守護神御長三寸の白山妙理大權現の黃金の尊像也。至而奇瑞あり。日乘は行年百十四歳、六月廿六日に遷化也。瑞德不思議なる上人と云り。

又此日乘の弟子の内に、石動山と一味して却りて上人に仇せし僧もありしに、不叶して夜中寺の什寶道具を舟にて運び、今に越前國敦賀郡に瀧谷寺とて有る由。又聞、昔は瀧谷寺は眞言宗にて、鳳至郡大屋庄吼木村の山中にありて、吼木の根本にて、弘法大師の開基の寺成しとて、今に瀧谷と地名に呼ぶ所に大寺の跡あり。大木の槻木二本あり。今に礎まであり。寺二ヶ寺の跡あり。山中にて盜賊の難ありて、芝原將監と乘微阿闍梨心を合して、今の羽咋郡へ移り

給ふとも云り。又一ヶ寺も內浦へ替地して吼木山法住寺也と云傳へり。是信じがたし。法住寺にも弘法大師の舊跡數多あり。只吼木村といふより云る事なるべし。今の妙成寺は、其頃は法住寺の法類にてかの地に有しや、吼木の板木あり、又芝原家の事抔のこと、所替ありて程なく乘微阿闍梨改宗有しにや。又吼木村隣村別所谷村と云に、成隆寺とて日蓮宗一ヶ寺あり。日乘の此寺も德をしたひ改宗ありしと云。誠に此妙成寺は邊鄙なれども可一見所也とぞ。

蓮池やわが泥足もいかにせん

此瀧谷へ芝垣村より參詣して、大嶋村へ出るに往來纔に五町計の廻り也。裏門より出れば元の磯邊の往來也。大嶋村は芝垣村より一里餘あり。よき村にて御鹽藏あり。町藏宿もあり。此村の宮は、海際の山茂りてみゆる松森也。本地聖觀音にて、諸願所の宮と云也。毎年石動山衆徒僧正廻りに出る時、此宮にて祈念を初て、是より諸國へ出る也。又此村に境兵衛とて百姓あり。利家公肥前國那古屋御陣中御用に立し者にて、御帷子・御墨付など持傳へり。又小川あり、菱根川と云て名所にて古歌も有由。

大念寺新村は往來にて、大嶋村より一里あり。此村は近鄕の大村にて賣買人ありて繁昌成所也。昔此所は捨濱にてありしを、近鄕出屋して次第に大村となりて、今は出村と呼也。大念寺村近き故大念寺新村と本名す。今以諸役御免除にて無高所也。依て御收納藏數戸前あれ共、是は川尻村の支配也。神代川尻村の湊にて、川の南は出村北は川尻也。間に三十六間の橋有て境とす。川口は餘程の舟出入して、兩村共ににぎはしき也。此川の源は、佛木村の奥山より一筋、直海村山谷水等流て、福野の潟を經て、此湊まで六里餘流るゝ也。此川上に赤目の淵とて横穴ありて奥しれず。惣じて此川筋又は潟絲等村々多し。又堀松村は川尻村より十八町あり。本馬廿一文。是より內浦大津村へ越る往還にて二里半あり。本馬八十文也。內浦より金澤への往來也。又末吉村は出村より十町あり。手筒何某の廓跡あり。今城主の筋目ありて、盆中は灯籠の手向金澤御家中［　］よりある由。又此村中の橋爪に自然石の地藏あり。又百沼比古神社立玉ふ。此村の源助と云者は、昔義經の宿參らせて給はりしとて、太刀の小柄を取傳へあり。いかにも古き物

の由。又堀松村は國田何某とて十村役あり此村は此邊の驛にて能き村也。

又山手に阿津見村とてあり。公領にて親右衛門とて古き百姓あり。則ち奈豆美比咩神社立給ふ。又二所宮村潟の此方也。諸岡彦神社立給ふ。昔大社にて、兩部にて神主・社僧あり。社領二千石なりし由。境内廣し。此森茂りて近郷より見えし故、元は森村と云し由。中頃城地の事もありしとて、馬場等もあり。或時社僧と社人元朝に神前にて口論仕出し、及傷に及びて人死すること多く、此時宮退轉す。其時の社人の子孫とて、天神左近・森兵衛などゝてあり。今にふしぎあるは、正月十五日まで松の中に、小豆又着類やうなる物にも赤き物を用ゆること、家内中血になるのみか凶事あり。依て堅く忌む也。其時の社僧は二里脇なる德田村と云に退き、則森山とて眞言宗六坊あり。惣名安養寺と云。是も寺領十二石餘也。是は利常公の御母堂壽福院殿、此所の御出生故寺領ありし由。此德田村に德田佐渡守とて城主有し也。又二所宮村は御預地と御私領とにてあり。御私領の中屋と云者の方に、昔利家公御滯留ありしとて、其折戴きし御脇刺など持傳へり。此村の晦日川の淵に、その時の宮にありし鐘ありて、水乾の折は見ゆると云へり。又梨谷小山村に阿良加志比古神社立給ふ。御神体大石にていづれの御像石にやしれず。又釋迦堂村の氏宮は、御神体丈六の釋迦如來也。則社地は大寺の跡なりしとて、礎等のこりあり。又直海村と云には瀬戸比古神社立給ふ。又佛木村は山中にあり。元は佛切村と云り。是は峨山和尚の弟子梅山禪師、此所にて盗賊に逢給ひし時、守り佛の觀世音身代りに立給ひし故也。越前國松尾の瀧澤寺は梅山和尚の開基也。おさゝと云女大蛇になりし事緣起に委くあり。

福野の潟は昔は一里に二里餘の潟成しに、今は所々開き所出來て少し芦原になりてあり。此潟通り舘村・舘開村などゝて村多くあり。舘村に廓跡有。城主土田何某の由。福野干瓢とて多く此邊にて出來して所々へ出る。

彌生の頃此潟邊を風來せしに、逍遙もすべき所なく、唯

渺々たる芦原のみにて。

　　礫打て雲雀たゝせる芦邊哉

惣じて此能登國は、昔は今濱村より三崎迄内外の浦傳ひ往

來もなく、山の中道往來せし也。其時は此福野抔通りしもの也。是を今中道通りと云り。諺に云、のとはやさしや土までもと云は、此中道のこと也。果實・菜根迄浦半とは違ひ、やはらかにて味よし。

◎神代川尻　一宮より二里廿五町、本馬九十一文、輕尻五十五文、人足四十五文也。家數三十軒餘あり。此村川の湊に有て、侍の米藏宿あり。其外商家あり。小船なゞ出入してにぎはしき所也。驛馬にて富木へこゆる往來二筋あり。一筋は五里峠とて、二里餘は人家なし、難所也。併是は本道也。又一筋は福浦村を經て行也。是は道よし、浦邊の眺あり。然れゞも福浦の高に石山あり、道せまく駄荷物は通りがたし。又神代(カクミ)村も此川尻より川上十町計にあり。神代の神社立玉ふ。此村は三神代とて、加賀に神代(カミヨ)村、越中に神代(カウジロ)村、能登に神代(カクミ)村とて同じ文字也。惣じて此邊を四家と云也。

恐しき谷は隱して霞かな

又福浦通りは安部屋村を經て行也。川尻と安部屋の間に町村とてあり。廓跡あり。城主の筋目に武右衛門と云百姓あり。安部屋村は舟の懸間あり。洲崎に辨天の社抔あり、風景也。此村に津兵衛と云者あり。先祖は尾州の住人服部土佐守とて、太閤秀吉公の時一萬石給りし御朱印等持傳へり。其外小酒屋抔とて船持あり。町端にかん〳〵石とて鐘の如く鳴る石あり。又福浦村は川尻より三里あり。間に百浦村・松戸村・赤住とてあり。船の懸り間なゞあり。

又福浦村は北國の間所、夏中數百艘の船不絶、家數百軒有て船問屋抔繁昌たり。大間の外に水の間とてあり。何れも間の緣に家居してあり。一向宗の坊二ヶ寺あり。又間の上崎に篝火堂あり、此邊面白き所なり。又水の間とてあり。是は不見の間と書由、あらはにみえぬゆゑ也。高に盜人穴とてあり。又少し行ば鷹巢山とてあり、岨敷小嶋也。磯に瀧あり。鷹巢の不動とて靈像あり。此所は昔目納(ナウ)左衛門とて鄕士住し跡ありしに、岸崩れて名のみのこれり。此濱を錦の濱とて、小貝なゞ交りて美しき砂あり。壁なゞに塗りてよし。又牛下村もつゞき也。磯に機具岩とてあり、そのかたちさながら織機具に似たり。わざ〳〵石工の作るとも、是程にはあるべからず。其上浪の寄るありさま、此邊り言

語にも斷えたる所也。

織姫の立しや磯のはたご岩あやおりかくる浪のかず〳〵

又少し行ば產神村こてあり。此村に產神の宮・產神の池こてあり。昔此所にて源九郎義經の妻の難產ありしに、行末產婦を守らんこ誓ひありしより、此一村產婦腹帶せず產するに昔より危きことなし。本地不動明王也。前なる川にて石を拾ひ、池へ代りに入て、池の石を取揚懷中あれば、產に一向あやまちなし。

祈りつゝめぐみぞあふぐ產神の守の石をひろふ人々

此村の肝煎久右衛門こ云者、氣質淸直にして親に至孝の者にて、安永年中御聽に達、三人扶持下され、永代諸役御免にて、近鄕の者是を見習ふべしこて御觸あり。かゝる邊土なれ共、かやう成志者希代成事也。

又富木の上の入口に、七海の荒木こて山岨へて海へさし出たる所あり。此風景山のかたち、海邊の岩組、砂川のあさせ、岩間を潛る有さま、怪石異石自然のながめ、言葉にも盡しがたき絕景也。去に依て、露地を作るには此所の風景を移すこ云り。寶永の頃淺香何某此所にて。

今更に心もなぎぬ浪風も荒木の浦の名はたゝずして

久　敬

され共此所浪あらき時には往來成がたきこともあり。上の山へ上り四五町も廻る也。又加州金澤より宮腰往來にある龜石は、此所よりあがりしこ云傳ふ。其石の雌石なりこて龜形の石あり、さながら也。又昔此所を義經通り給ひし時、狂歌ありしこて所に云傳ふ。

義經の身のさび刀こぎにきてあらきの鞘に入ぞかなしき

◎富木　神代川尻より四里廿五町、本馬百六十七文、輕尻百四文、人足五十二文、一こ五この日には市場立つなり。富木こは惣名にて、此邊の鄕名也。町中に富木川こて流る。川の東は地頭町村、西は領家町村也。其外町七海浦・町本鄕村なごゝて、入交り家數五百軒計あり。不殘商家にて、八兵衛膏藥・歌仙貝なごあり。繁昌成所也。御收納藏諸士の藏宿等あり。林氏十村役也。

又富木の城跡は、東の山城ヶ根尾こ云所にあり。又富木川は貝田川共、河内川共云り。源は鳳至郡河内村奥山より流れて、川筋七里餘にて海へ入る也。此川緣を上り內浦熊木へ出る道あり。此富木院內こて山廣く、橫幅は能登第一の廣さ也。熊野方の鄕・鉈打の鄕こて村々多し。鉈打山こて近鄕の高山あり。昔俊寬僧都・康賴・成經三人の配所此邊にて、俊寬此山に三十三所の觀音を建順禮ありし觀音の堂あり。今も無志ヶ峰こて當國廿四番の札所也。元は那谷內こ書し也。則僧都那智山こ谷汲寺をかたごり付られし由。加州那谷寺觀音は此所の本尊成しを、利常公移し給ふこ所に云り。又熊野方の鄕に熊野權現の大社あり。近鄕の惣社にて神主尾崎氏也。是は昔平判官康賴・丹波少將成經兩人の歸洛祈の爲、三熊野權現を勸請して日參在し也。其頃の宮跡は谷神村こてあり。其御神体を移し奉りしこ云り。其外三人の配所の舊跡地名なご殘りあり。何も山中に有村也。鉈打山は羽咋・鹿島・鳳至三郡の境山にて、絕頂に大石ありて境こす。高山にして風景たぐひなし。內浦は曾福村より近し。

岩角に打波おそろしく山彥して。

けんそ成山の姿や雉子の聲

又富木の西の方濱手は、藤懸の鄕こて、赤崎・千浦・風戸・風無・小窪・笹波・前濱こてあり。是を富木の七浦こ云。此灘傳ひ風景にして、松ヶ下こ云所は船の懸間あり。犬戻り・駒返しなごゝて面白き所あり。又尼崎こて大に西へ指出たる所也。此國の西のはて也。上野を尼野こ云也。此所自然こ蕪菜多く生ずる也。又昔義經の辨慶に鮑をこらせられし所こて風景あり。又前濱村の中に、關野こて義經の暫く住給へる所こてふしぎなる岩窟あり。七八町海へさし出たる岩屋之內に種々の所ありて、廣き事不案內にては元入し口へ出ることならず。前濱村より案內者を連て見物あるべし。希代の岩窟也。

武士のたけき心の程しるし名こそ岩屋の今にくちせぬ

又笹波村に玉藏寺こ云眞言寺あり。十五社權現の社あり。向に人影の淸水こてあり。但三ヶ國に一ヶ所あてあり。加州石川郡日御子村宮森の內に人影の水あり。越中射水郡立野村田の中にあり。人音せず靜成時は水わき上り、人音するこ止む。

又富木より劒地村へ行には、三町計に中濱とて入濱あり。秋末は風荒く難所也。相神村へ近し。上嶋彌五郎とて、利家公より御扶持頂戴せし十村役なりしに、近年退役せし也。又酒見村近し。龍護寺とて禪宗あり。五百羅漢の木像安置也。又境内に龍護水とて冷水あり。此水にて作れる美酒村にあり。

富木より二里の間八百比丘尼の植しとて椿原あり。通るごとに花の咲ぬれば。

十かへりや八千代をかけてさく椿

案ずるに、若狹の白比丘尼の舊跡所々にあり。是は伊勢國白子驛の產なるにより白比丘尼とも云ひ、又八百比丘尼とも云り。亦越中黑部の庄玉椿と云處の產共云り。いかにも長生して八百年のことをしれり。何れにも廻國して、常は若狹國白椿山に在しとて今に繪像あり。手に椿の枝を持てあり。其外緣起等あり。出生慥ならず、又たしかならざることあれども所に云傳へるを爰にしるす也。昔越中黑部川湊に、玉椿の里とて今に幽なる處あり。其頃は玉椿の千軒とて繁昌なる湊也。此所の長なる人或時上京せしに、獨の士と連立ぬ。ふしぎありて又戻りにも連立、往來の宿の名染も重り、別れになりて彼侍の云へるは、我は越後の明光山の麓に住み三越左衛門と云千年經る狐也。今よりは其許へ折々參り語るべしと約して別れぬ、其後は三越度々來る。睦く語りけるに、後には心安き友達一兩人も寄りて咄合ぬ。或時三越云やう、民家は物さはがしければ、我等眷屬に云ひ付、此家の後に一亭建て語るべしとて、程なう亭を成就せしふるまひとて、三越山海の珍味こしらへ、友にふるまひけるに、其中にこざかしき友、眷族の料理物を覗きみれば人の形也。此ことを外の友に告ければ、各々この肉を喰はず。三越出で、分けて此肉を食し給へと進むによつて、密に懷中してかへるさにすてぬ。一人酒に醉て此肉を忘れて歸りけるに、一人の娘ありて土產と思ひ喰ひけり。三越其後來て云樣は、人間は短命なればともに長生して語らんと思ひ、日外人魚を出せしに喰給はず。人間は疑ひ深きものとて、其後ふたゝび不來。此人魚を喰し娘長生して八百比丘尼と云し由。又能登國鳳至郡繩又村の產共所に云り。是も玉椿村と同じ說也。いかにや。

又富木より二里に大福寺村の大福寺とて眞言宗あり。寺領二十石。諸堂御建立也。金陵山と云。又本社は六社權現也。高爪・氣多・三崎・石動・白山・八幡宮の六社也。昔は七堂伽藍なり。大寶年中泰澄大師開基の大地にて、富木院内は不殘社領なりしと云り。其時鳥居在し處を今も大鳥居村と云。中頃迄五十餘坊在しとて、今も百姓に學泉坊・寶泉坊などゝてあり。何れも兵亂に退轉せし由。中興北の坊とて奇妙なる法印ありて、利家公・利常公御歸依在て御祈禱被仰付に、相神村彌五郎先祖上島彌六と申者取次仕りし由。諸堂御建立、社領等御寄附在し也。此法印は色々怪異ある僧にて、大福寺の紙袋米とて取れども〳〵米盡ることなし。其外不思議多き法印也と云り。利家公御自筆の御書今にあり。又高爪山とて高山あり、觀音堂あり。村より一里登る也。絕頂に社あり。脇に藥師の石体あり。是荒木の海より上り給ふ大佛也。重さ限なきに、其頃六十歲餘の里人に告在りて背負て山上せしとあり。杉の大木あり。每年六月十八日祭禮也。同十七日の夜龍燈上る也。此山楠多し。山岨しきこと限なし。加州・越前の浦方より北の海中にみゆる山は是也。又此山の東十町計に注連原(シメノハラ)村とてあり。家四五軒あり。此村より往來の峠へ出る也。

又富木より大福寺迄平地也。是より劒地までは峠也。此峠の谷内に在る村を深谷村と云。是まで羽咋郡富木の境也。是より鳳至郡仁岸の鄕也。

紅葉ばを分つゝ行は錦きてと云古歌を思へば、我も家に歸らんと此峠を通る折。

錦なら家土產にせんもみぢかな

◎鳳至郡劒地　富木より三里廿五町、本馬百廿文、輕尻七十七文、人足三十八文。此驛より駄賃違あり。家數二百軒計あり。鐵の針金出來して日本一の名物也。此始りは、昔此村に何方の者ともしれざる若き男來て入聟となる。此者劒をよく打出せり。しかし此者細工所を人に堅く見せず。妻ふしぎに思ひ、或時物のすき間より覗きみれば、其形鬼となり、口より焰を吹懸、鐵をのばし刀にせり。此有さまを妻にみられたるを耻て、數百の打たる劒を持て波の上を走行・妻別れを慕ひしを筐にや、一振の劒を投與へけり。其銘に鬼神大王波平行安とあり。殘りの劒を投込しとて、ふ

ごの七ッ岩と云所の深き海あり。今に其不思議あり。又其屋敷跡は、西野清兵衛と云者の家に井戸あり。その時より替らざるとて、此水にて穢れたる物あらへばたゝりあり。又此家にて產する事今にならず。此者より鐵をのばす事傳はりしと也。又劍地の名も是より始れり。

又繞石川とて日本名所記又は方角抄抔にのするは、劍地村の南の入口にある川也。今誤て錦川と云り。源は馬場村の奥山より流て、東より西へながるゝ川也。歩渉りの川也。萬葉に。

妹にあはず久しく成ぬ繞石川清き瀨毎にみなうらはへてな

此邊を繞石の郷と云故也。今は仁岸郷と書り。宗祇方角抄に展轉して書寫の誤にて、おゐし川と假名付あり。又錦川と云も誤り也。

紅葉ちる川下水は染まぜの錦川とぞ見えわたりける

此歌にてしるべし。聞の似かよひたる言葉成べし。繞石川と云へごもにしき川と見ゆるとよめる歌也。又或人此川を尋ねわびてよめる歌に。

今も猶妹にぞうとき繞石川流れの末を尋ね詫つゝ

所口勒文

此川上によき鮎あり。又馬場村近し。伊藤氏の十村役あり。又本誓寺とて東方一向宗鳳至郡一郡の觸頭錄所あり。此寺昔は石動山門派の密院なりしとて、泰澄大師抔の什寶數多あり。東の山に仁岸石見守と云し人の城跡あり。又黑岩村に大なる堤あり。又劍地より一里計りに阿岸川と云川あり。此邊を阿岸の郷と云故也。北野川共云へり。常は歩渉り也。小池村の奥山より流て、腰細村の西にて海へ入る也。二里ばかりの流れ也。此邊は仁岸・阿岸とて兩庄にて村々有。

又小山村と云に、高左近と云て利家公の御墨付御扶持戴きし百姓あり。又黑島村は、劍地村より往來にて一里半ある公領也。よき村也。番匠屋抔とて船持あり。御預所にて繁昌也。是より道下村へ十二三町あり。少し山手へ入る也。鹿磯村は濱つゞきにて、黑島と間の濱より道下へ登る也。先年黑島と鹿磯と此濱地論ありて、公方の役人立合にて改り、今は濱に定杭あり。又此鹿磯村より輪島迄西海七浦の郷とて村々多し。西海鯖とて刺鯖・鹽辛類の名物也。深見・大澤・五十洲・皆月・鵜入・光浦・下山などゝて、御進物鹽辛等は此浦傳ひの灘より上る也。磯傳ひは鹿磯村・深見村へ三十町あり。半途に磯の觀音とてあり。此深見村に御瀧と云て名瀧あり。村より東の谷内へ八町登る也。數百丈の山上より五段に落て、次第に幅廣くなり、二丈計簾を垂たるごとくに成りおつる也。麓の岩窟なる所に權現社あり。本地不動尊也。脇に此磯へ浪に寄玉ふ大佛の像あり。しやれ木にて印相見へず。瀧二ヶ所あり。右を雌瀧と云、左を雄瀧とす。此瀧のふしぎは、雨中にも旱魃にも水の增減なし。往古より同じ流れ也と云り。誠に山の姿、瀧津瀨の有さま、長山四方に續き、松柏生茂り、哀猿叫ぶ聲、清淵河岸靜心をすまし、言語にも絕たる處也。とかく邊鄙なるにや、かゝる秀佳の瀧成るに、昔の人もながめもらせしこと おしきこと也。寶永の頃淺香何某此所にて。

染出す色もふかみの山陰のくる人もなき瀧の白糸

久敬

しかし今は漸に聞知りてや、權現社内に連俳詩歌の樂書抔色々風詠ありといへども、いとまなく記さず。病ある者は此瀧にうたれに來るとて、切たる本結夥し。靈驗あらたなるよし。

山深み分入る瀧の清ければ我心まですみまさりけり

又道下村より此瀧見物あるには、向うの山を越え、六郎木村と云を經て行がよし。六郎木村は道下村より三十町餘あり。山中に大唐竹の御藪あり。小杉村と云を經て磯邊へ出れば五十洲村也。六郎木村より三十二町あり、道難所也。此所に矢德の蛇沼とて、昔女の身をなげ死し靈蛇になり住してあり。又泪の池とも云由。

池の名のあはれに夏草をわけ入しに、池は水草に埋れて。

今更に泪の池のわかぬ水草

十五町磯傳ひ行ば、皆月村餘程よき村にして、夏中破船奉行滯留あり。長田彦とて、利家公より御扶持頂戴せる山廻り役あり。御收納藏あり。此七浦の獻上鹽辛は此所にて出來、則鹽辛御藏あり。又此沖に動鳴とて雌雄の二つの浮島あり。折々交合するとて、一集に成て島一つにみゆる也。海あれる夜は此嶋動鳴也。又茂りの浦面白き所に義經の碁

盤石とてあり。又此所の氏神御神体辛鮭（カラサケ）の木像也。辛鮭の宮とて色々怪異ありしは、飯田の郷上戸村の一ノ宮也とあり。いかにや。又皆月より上大澤へ行は山坂の難所あり。樽見村とて山中にあり。皆月より三十町餘也。昔は磯邊にありしに、其頃はがせ作りの大船沖にて難風にあひ此磯に寄しを、此村の者共情なき者共にて、船中の者共よはりありしを不殘打殺し、荷物をうばひ取しむくひにて、大浪打て一村のこらず家居を打崩せり。其後も度々なる故此山中へ家居せしに、家立揃ふと地崩れて、家一軒もなくなること數百年の間同じ。近年も明和年中、一村地の深さ三丈計り落入、家不殘崩せり。又半道餘今の所へ一村移りしに、是も又々崩れかゝるにより、此頃は五十洲・皆月の地をかり家居作りたき由あれども、兩村共に又々地のあるゝ事もあらんとゆるさず。其初大浪打つ時海底より浮み出しとて、其時のはがせ船のかたちなる島あり。はがせ岩とも云り。此島に海あれの時は舟幽靈多くあらはれ、なく聲なごすることおびたゞし。又上大澤へ樽見より八九町、四十九曲坂とて難所を下る也。

如月の末峯吹風に袖ひぢて。

春寒みわらびも山のふゞころ手

上大澤より大澤村まで廿四町餘あり。内記とて利家公より御扶持戴く十村役あり、筒井氏也。先祖は此邊の郷士の由。亦上大澤より寺口へ出るはよき往來也。七瀬八瀧とて名所あり。末に記す。邊土には稀なる家居立揃ひてよき村也。後山に埋み林とて栗の御林あり。是を廻りて上黒川村・長井村へ出る道あり。

又赤崎村大澤より十九町あり。千右衛門とてよき百姓あり。にんじんの名物なり。又下山村廿五町餘あり。鹿島明神あり。要石とてあり。此所いかなる地震にも動くことなし。又磯邊に達磨石とて、さながらなる大石あり。淺香氏通りて狂歌に。

往古より立すくみつる達磨石九年面壁ものゝ數かは。

久敬

鵜入村は下山より十九町餘あり。彌十郎とてよき百姓あり。此村に象頭の端とて海へ出たる崎あり、風景なる所也。洞あり、奥深きことかぎりなし。七八町計りは行人もありしと云へり。奥しれず。寺口の象尾山へつゞきある由。

又光浦村は鵜入村より廿九町あり。光浦と云は、昔時國の岩倉山の觀音此磯に夜々光を放ち、漁父の網に揚り給ふに依て云り。又此村は石動山智識米を不出。此謂は此村の七海川と云に、昔鮭の多くあがり、一村是を取て業とせしに、或時石動山の僧行暮れ食に飢て、此鮭取小屋にて無是非外の食物なきゆゑに鮭の焚たるを喰ひ、夜明て此事を悔て、石に眞言を書てあまた沈めければ、其後此川へ鮭あからず、村の業なくなり、漸堀田なごして口すぎにせし所に、夫より石動山家並三升充の米、今も此村は出さず。此村より浦傳ひ輪島へ十町あり。袖の濱とて風景にして、五色石とて名石あり。五石の小石にて、盆盞抔に用ひて名物也。其外小貝の名物也。此そでの濱より輪島崎へ濱傳を鴨浦とて絶景也。猫の地獄なごと云て面白所ありて、輪島より遊山所也。此浦傳ひ鹿磯よりわじままで五里計の間、難處と云共風景也。

谷内の清水に口の濁を濡し、峯吹越る青嵐に袂の汗を乾し、戸渡舟の絶間なく眺ありて。

冬は嘸何と鳴らん呼子鳥

◎道下　劒地より一里三十町餘、本馬八十八文、輕尻五十三文、人足廿七文、家數二百軒計、商家交りあり、よき處也。御收納藏數戸前あり。此村は寺口へ近くて、一山の用達し、繁昌に家居もよき所なりしに、近年は燒失にて家立惡しくなりし也。田谷孫三郎とて、利家公より御扶持戴きし山廻役あり。和田理左衛門と云山廻役もあり。氏神住吉宮は南の岡にあり。神主四柳氏にて、多く持宮支配あり。九十三ヶ村の近郷は殘らず支配なり。櫛比惣持寺大工棟梁櫛比源兵衛と云は、此所の住居なり。又近きに銕（カナ）川の護摩堂とてあり。櫻尾山寶泉寺と云、寺領拾石也。此寺昔は櫛比の庄今の惣持寺の地に有て、弘法大師再興の密院成しに、中興院主定賢律師夢の告ありて寺地を瑩山和尚にあたへ、此所に來り一宇をむすび住給へり。本尊不動明王の二尊安置也。一体は脇見の不動とて白山權現の御作の由。一体は弘法大師の作也。其外惠心僧都作の不動、運慶作の本尊彌陀、弘法作の不動尊像板木裏表に彫てあり。同作の大黒天の板木あり。其外寶物あり略す。委くは緣起にあり。中頃賢覺

律師は道德の人にて、毎日護摩修行ありければ、護摩堂の御坊と人々呼り。則利家公寺領御墨付にも護摩堂とあり。又あたりに寺跡あり、新善光寺と云し由。この寺の本尊彌勒菩薩は惠心僧都の作にて、則寶泉寺にあり。

新善光寺のこと名のみ殘りて。
古寺や古葉交りの蔦かづら

又鎌川大明神の社あり、近鄕九十三ヶ村の宗社也。昔大社にて、別當寶泉寺、神主は道下村四柳氏也。則かな川とて前へながるゝを云。

又道下川は一筋は荒屋村山より流、又一筋は浦上村山より流て、高根尾村の下にて合流て、黑島と鹿磯との間にて海へ入る也。又寺口は門前村と云て二百軒計家數あり。惣持寺の門前也。宿屋商家諸職人あり、家並能繁昌成る所也。道下村より廿四町、浦上・本市へ行く半途にあり。

諸嶽山惣持寺は鳳至郡櫛比の庄にありて、曹洞派日本一宗の大惣錄にして、寺領四百石、地方一里四方拜領にて都合七百石とあり。境内に鬼屋村・日野屋村なゞゝてあり。寺代官兩人、日野氏三十石、江尻氏二十五石、寺領の内配分也。寶物は品々あり。後醍醐天皇勅願所にして、代々の綸旨・院宣數通あり。備中の永禪寺より、萬治二年に謂在て寄附ありし菅天神眞筆の金剛經あり。弘法大師を始め諸宗開山の眞筆あり。其外數多什寶筆に盡しがたし。常は開帳ならず、毎年七月虫干の時拜見あるべし。又行房卿書給ふ後醍醐天皇の勅額惣持寺と書たるあり。又五院塔司にも色々寶物靈像あり。普藏院に井戸より上り玉ふ靈像の荒神あり。覺王院に大鐵和尙へ龍神より捧し袈裟あり。永禪寺本尊觀音はかな川の御神体のよし。其外什寶多し。

本山開基螢山和尙、二世峨山和尙。亦五院は普藏院開山は大源和尙、妙高庵開山は通幻和尙、洞川庵開山は無端和尙、傳法庵開山は大徹和尙、如意庵開山は實峰和尙也。此五院の開山血脉の法類より一院、毎年八月十五日に輪番に一ヶ年當り住職ある也。十二ヶ月割合を以本山へ方丈入室ある也。此日諸方より人集り賑敷也。開山螢山和尙は、諱は紹瑾と申て、御出生は越前國多禰の郡にて、御姓は藤原氏、御母夢に日光を呑て孕体ありしより御誕生也。十三歳にて同國永平寺にて祝髮あり。夫より加州大乘寺において、義

介徹通和尙に隨ひ法の御弟子となり、大悟あり。正中二年八月十五日五十八歳にて當寺に於て遷化あり。佛慈禪師と謚あり。其後安永六年光德圓明國師と勅宣あり。此寺昔は行基菩薩の開基の敎院なりしに、其頃螢山和尙は同國酒井の永光寺に在しに、夢の告ありて此所へ來り給ふに、其時の院主定賢律師と云るにも、又夢の告ありて符節を合せて、即此寺を禪師に明渡し、其身は邊近き道下村に庵をむすび住給へり。今の寶泉寺是也。其後螢山和尙奇瑞四方に響き、勅願所となり參内在しより、曹洞宗轉衣は此寺より始れり。依て一宗禁裡官此惣持寺に在て大錄所たり。委き事は開山瑞夢記にあり。其後大納言利家公御室芳春院殿御菩提の爲に諸堂御再興あり。山門・廻廊・五院・諸堂いらかをかざり、三十宇の塔司棟をならべ類無き行粧也。依て塔司の内にも芳春院は首領にて、寺領三十石也。其外塔司は五石充、其外官金割符役義次第配當あり。又境内廣く門前に唐金の勅使橋あり。一切經藏の輪藏あり。組物・彫物手を盡せる也。毎年開山の忌日に龍燈の松あり。又右の山を龜山とて、龜の形の山にて開山墓所あり。二世峨山和尙の母御の墓、其外横山家元祖の墓、津田氏の墓、諸武士の墓あり。又峨山和尙の塚は寺中永壽院にあり。又左の山を鶴山と云、秋葉の社・鎭守神明宮の大社あり。是より十五町奥に高尾山とて、當國觀音の札所十九番の靈地あり。御瀧とてあり、此瀧に打るゝ人諸病を治る也。其外祈願あるに成就あり。道の坂岨しくて餘程のぼる也。道々西國三十三所觀音の順禮所あり。又金毘羅權現の大社あり。又後の山を秀山とて風景也。開山御茶の井とて冷水あり。向の山を獅子山とて、海上を見おろし秀景類ひなし。又尾の山を象尾山とて、閑靜の佳景に開山の座禪石あり。其外境内廣く、筆にも盡しがたし。誠に靈地にして、諸堂美々敷事言葉にものべがたき大伽藍也。但し山門は芳春院樣御存命の内の御建立也。

棟札の表に、奉行越前住三輪藤兵衛尉藤原朝臣吉宗、同越前住大井久兵衛尉源直泰、下奉行田中仁兵衛尉重政・五十嵐角兵衛尉吉連、棟梁藤原朝臣森五郎左衛門尉淸定、脇棟梁藤原朝臣櫛比源兵衛尉重次・藤原朝臣名村甚左衛門尉正藤、以下番匠數壹萬三千七百六十人。

棟札上文寫

當山門 加賀大納言利家卿御内所東之御方芳春院殿被成建立者也

仰冀。以觀音慈眼。壽福增延。子孫繁榮。成就佛法僧之功德。依羅漢聖應。除災與樂。百事吉祥。修證過現當之菩提。

皆慶長十五庚戌年暮春如意吉辰

この門前村を過るとき。

寺町や尼の種蒔く垣の内

亦此寺口より内浦穴水・乙崎への往來は、上使道にて往還也。道下より本市村にて馬次也、本馬一里一町餘。本市より荒屋村にて馬次也、二里廿六町。荒屋より小又村へ一里七町。小又より穴水へ一里也。本市と荒屋の間内保村とてあり。散村に毛屋と云所あり。氣耶大王權現あり。此御神天竺摩伽陀國より、我朝丹波國に飛來り給ふ御神なりしに、鑿山和尚の瑞德によつて此所へ跡を垂給ふ。昔の社地は道脇の田の中にあり。色々奇瑞ありて今の社地へ移し奉るとあり。其時の宮守の子孫とて、百姓に丹波と云者あり。惣持寺より五俵あて扶持ありて、今も宮の裁許する也。惣持寺鎮守の宮也。又二又村とてあり。此氏神は仁王尊也。則小名に仁王堂と云。脇に願正寺とて一向宗あり。是も昔は天台宗にて、色々古佛安置あり。又荒屋村に人隱しとて奥深き谷あり。原村に本郷三郎左衛門とて利家公より御扶持戴し山廻り役の一軒百姓あり。小又村に和泉と云て長家へ由緒ある百姓あり。

里人床しき折から遥向に。

畑中や種蒔人か袋さげて

又寺口より大澤へ行には、小町村と云へ出行也。走出村寺口續にて十村役あり。諸岡氏也。小町村より大澤村の間に七瀬の瀧とて名所あり、言葉にも絶したる所也。

◎浦上　道下より一里廿町、本馬七十四文、輕尻四十八文、人足廿四文。此村は一里四方へ別れて所々に小名あり。輪島へ行には此村の散村にわかさと云所あり。峠にて難所也。此村八幡宮は浦上の宗社、宮の脇と云所にあり。散村廿七ヶ所の宮々へ、祭禮八月十五日は神輿廻り給うてにぎはしき也。又宮古場と云所に石動山五社權現の社あり。昔石動山門派の大寺ありし由。夜盗の爲退轉せしと也。此村に兵右衛門とて山廻り役あり、泉氏也。惣じて此邊を八家と云。

◎圓山　浦上より一里十四町、本馬六十七文、輕尻四十文、人足廿文、家數廿軒餘あり、山里也。此村より長井村へ直に出る間道あり、道少近し。さびやの水とてあり、冷水也。又蛇池とてあり、じゆんさい生てあり。惣じて此邊に蛇池とて九ヶ所あり。委きことは稲舟村の所にあり。

又此村の東の方山奥村々多し。吼木村と云に、瀧谷と云地名に大寺の跡、堀・礎等其儘あり。大木の槻の古木あり。吼木山の根元にして、口郡の瀧谷の妙成寺は眞言宗にて此所にありしに、盗賊の難をいとひ所替ありしと云り。別所谷村近し。

◎縄又　圓山より三十四町、本馬四十五文、輕尻廿七文、人足十三文。此村九ヶ所へ別れ、家數九十軒計。此村も山里にありて、秋の末は長井・縄又とて泥道にて難所也。堂坂とてあり、坂のおりとにごふ坂橋とて長七間の橋あり。此邊よりは輪島の海上を見下し、春は櫻秋は紅葉を見、難所と云共眺にあかぬ所也。此川上半道計に別所谷村とてあり。此川縁に神明宮あり。川中にまな板石とてあり。此石の上へ、祭禮十一月十五日に鮭の魚あがりて死て流る。此魚を喰へば癩病に成るといへり。此事は山田龍大明神にもあり。不思議にも奇特なる事也。又此村に成隆寺とて日蓮宗あり。此村つゞき吼木村・荒屋村・貝吹村抔へ出、中居・穴水へ出る也。亦瀧又村・別所谷村つゞき也。專照寺とて一向宗の大寺あり。

此山道を越る折から、歩行のまゝならざるを思へば、我もはや初老のしるしにや。

身にぞしる草木の老や初紅葉

◎長井　縄又より一里餘あり。本馬四十八文、輕尻廿九文、人足十九文。是より輪島へ平地也。家數百軒計所々に散てあり、よき村也。此村に勘十郎とて古き百姓あり。利家公より七石五斗の御墨付ありといへども御扶持せず。是は利家公御樣子有て、輪島の御旅館を俄に御立にて、此長井へ御越遊ばされて、此勘十郎が家に御泊り有し時戴し御墨付也。又輪島迄半途に小伊勢村・中段村境領の長十八間の橋あり。此川源は浦上山東平の谷水流て、別所谷川と合流して、黑川村を經、輪島川と合流す。長井川とも云り。又鳳至川とも云り。中段村に毘沙門の社あり。昔は大社にて七堂伽

藍の兩部の宮にてありし由。今も鳳至町住吉祭禮御旅所にて、祭には賑しき也。又小伊勢村氏神廣田大明神にて、祭禮毎年九月十五日也。昔は伊勢の内外の御神勸請して諸人歩みを運ぶ故、右伊勢の名ある由。又此村に坂東氏あり。先祖は長家の催促請け、穴水谷内一の坂と云所にて討死す。塚今に一坂村にあり。今も此村に御舘抔とてあり。是はいせの御師の舘跡共云り。又稲屋村とてあり。西行見佛上人に逢ひ玉へるは、此所と名に寄りて云へども、實は布浦と云所に舊跡あり。

又水守村に桃の林あり、花の頃は見物也。又東の山手に常田と云所に藥師堂あり、則常田寺と云。寺中境内風景類ひなき地にて、其上靈驗あらたにて、毎月八日・十二日には人々歩みを運て賑敷也。寺中佳景いはんかたなし。又輪島の上の入口にある橋をおがせ橋と云、則川を纏川と云。堀村山より流、鳳至川へ至る也。此堀村山は袖の濱へ續き佳景也。靈泉寺とて禪宗の小庵あり、是又佳景也。

◎輪島　長井より一里一町、本馬四十文、輕尻廿四文、人足十二文、道平地也。わじまは惣名也。登りには鳳至町にて馬次也。下りには河井町にて馬次也。鳳至・河井・海士町・輪島崎にて家數千軒餘あり。是四ヶ所を輪島と云。昔鷲の惡鳥住しより鷲魔の名あり。順和名集などにある大屋の庄小屋の湊とは此處也。又東鑑に能登國大屋の庄へ長谷部信連を遣すとあり。又源平盛衰記にも能登國大屋の庄を信連に賜るとあり。何れにも其頃は此輪島は信連の領地にて、則爰に卒去有し也。廟所は河井町川向の山岸村の、中頃十村役せし遠藤氏田地の中にあり。盆中は長家より代參燈籠の手向等あり。則城跡は同つゞき宅田村と云にあり。今も地名に一番町抔とてありて、城下の時氏神住吉宮抔あり。其後に城地を穴水へ移せしと也。

親の湊へ漂ひ來て。
うき草や水によるべの咲ごころ

鳳至町は大屋の庄にて、川の西にありて家數三百軒餘あり。河井町は河原田の郷にあり、川の東也。家五百軒餘あり。間に長四十八間の橋ありて町の境とす。此川源は市坂村奥山より一筋流、其外所々谷水落入て、熊野川共河原田川共云り。鳳至川と合流して、湊は數百艘の夏中船不絶。小屋の湊とて繁昌也。此輪島は國府同事の處にて、諸商に便よく四九の日市あり。中頃まで郡奉行在住あり。今も御鹽代官三人、山廻り役一人在住あり。御武具土藏・御收納藏は河井にあり。御高札は鳳至にあり。兩町に肝煎あり。町に畠中・山形・久保などゝて古き船持の者あり。河井町に若恩屋とて、利家公御腰懸られし筋目あり。鳳至町に御印物頂戴せし鍛冶十三軒あり。輪島庖丁・小刀の始也。其外名物多し。輪島索麪・堅地漆器・慰斗鮑類・海草の產名物也。中にも白髮索麪は御獻上の上品也。

此湊こそ名にあふ輪島ぞうめんとて、家毎門毎女子の手業に、引やらふるやらでこ臼、出尻を隱すは前垂、手曲の本ゆひはねたり諷ふたり。おつそれそれさの拍子に、出る船入る船せはしき中にも戀は曲もの。

尻目してまねくや河岸の初尾花

兩町に神社佛閣多し。禪宗蓮江寺は河井にあり、寺領十五石。開山象山和尚にて、利家公畫像安置あり。同町に妙相寺とて日蓮宗あり。鳳至町に寶藏寺とて淨土宗あり。一向宗兩町にて六ヶ寺。中にも淨明寺は山岸と云にありて、東方の院家にて大寺也。鳳至町氏神は住吉大明神とて町中にあり。一鄕の宗社にて神主淺井氏也。祭禮三月六日。中段村多門天宮へ御幸あり。河井町に住吉宮あり。是は山岸村の長家氏宮を移せしとあり。鳳至町に觀音堂あり、本尊泰澄大師御作、當國三十番順禮札所也。

又重藏宮は河井町端にあり。一郡の大社にして近鄕の惣社也。鳳至比古神社とあり。神主能登氏也。此大宮の御神体は天冬衣命にして、大穴持命の異名にて御同体也。本地十輪地藏の由。往古此處は、鷲魔とて惡鳥住て人を取、大穴持命平げ給ひし鷲の骸を納しより鷲藏宮と云由。又重藏嶋より御神体あがり給ふより重藏と云もあり。又十輪地藏の垂跡により輪島と云由。中頃迄兩部習合の社にて、諸堂建並び七堂伽藍にて、其頃國主畠山氏より社領田地七町八段寄附、社頭修理あり。社人社僧多くありて、神林寺・西國寺・佛体寺・觀音寺とてありしに、天正の頃石動山衆徒と與せしにより、利家公不殘四ヶ寺共に燒拂ひ給ふより、今は地名のみ殘りあり。漸神主能登氏下社家の筋目、神人とて河井町に四十八人神子一人殘りあり。其後も長家より手傳

ありて社頭修理あり。又々繁榮して時々の神事不絶。又社地の廻り數百間高石垣也。是は笠原氏寄進にて、今も修理あり。當社寶物あり。御璽（ミシルシ）の明鏡とてあり、唐鞍とてあり、鬼神大王行安の大太刀、弘法大師の大般若、同作の佛像多し。兆典子畫る十三佛一軸、其外色々あり。略す。淺香久敬書る所の緣起あり。當社祭年中七十餘度あり。中にも大祭兩度あり。每歲二月七日は神人四十八人の當屋あり。町氏子にも一人あて五十歲に成し者、百姓分次第に當屋を勤る事也。扨二月朔日より海山の珍物百味調へ神前に備へ、氏子中へ美を盡し配る事也。七日の夜は、餅酒は云におよばず珍味調へ、當屋より振舞通夜して歌舞を色々成せる也。此當屋の造用莫大也。亦神供には色々社人中調へ備る也。御神水とて半道計山にあり。此水を以御供人の重さ程焚き櫃に入、上に肩衣一具・數珠一連のせて、丑刻に神前に備る由。是は昔の犧人御供の粧ひと云傳へり。神秘の事なればあら〳〵敷しるす。其外古式多し。又七月廿三日より廿六日は、每歲御採とて輪島中の祭禮にて、近鄕隣國より諸商人等群集して、賑しきこと限なし。廿三日は河井祭禮にて、重藏宮の御神輿濱傳ひ川尻の御假屋へ御幸あり。御宿座にて其行粧夥敷也。先濱の左右に柱篝松明とて、長三四間の柱の先きに大松明を結び付、四方へ太き控へ綱付、神輿御通の時に燒切るやうにすると也。扨町中思ひ〳〵に大灯籠立供奉する事也。此有樣夥敷見物也。又神馬數多ひき、禰宜達の競馬抔あり。此粧ひは御採とは催馬樂と云略言にや。翌日町中御幸ありて御歸座ある也。廿四日は鳳至町祭禮にて、住吉宮町中御幸あり。是も其夜町中大灯籠有て、美々敷事同樣也。廿五日は輪島崎祭禮にて、天滿宮鳳至の住吉宮へ御幸ありて御宿座あり。其夜輪島崎大灯籠賑敷事同樣也。是も翌日御歸座ある也。元は何れも重藏宮の祭禮也。昔冬衣命邪神退治の爲、當國一ノ宮より廿三日夜御着船あり。此湊へまし〳〵て惡鳥を平け給ふよりの祭禮といへり。しかし此祭禮河井町中舊式色々ありて言傳るは、神代の事とも信じがたし。往古此沖廿里に重藏（ヘクラ）島とてあり。此島の御神蛇身に化し、破れ船にのり此浦にあがり給ふに、俄に御產の氣あり。御輿宿の九左衞門と云者の前にて御產ありし故、今此假屋の躰其時の有樣、藁なごしきさながら

產屋の躰也。其時火を藤內の者より貰ひ玉ふとて、今も祭禮の篝松明は川尻の藤內勤る也。又其時紙をば畠中のおもやと云より貰給ふとて、今祭禮の九字切紙幣紙は畠中といふより出せり。又此祭の齋み竹抔は善龍寺と云淨土宗の寺より出せり。此寺始は敎院にて、奧の道場と云て有りし時の事にて、產所の竹を貰ひ給ふよりといへり。九字切繩・ひかへ綱等は時の役人中なへり。其時用ひし水は御手洗の井とて今町中にあり。又腰懸給ふ石とて馬場と云にあり。夫より鷲藏宮の社地をかり、跡を垂給ふより重藏宮と云由。此舊式由來の事いかにや。此外祭禮七十度餘あり。又濱の藥師とてあり。此尊像此社內に有しを、近頃社外へ移しけり。春日の作にて靈驗あらた也。境內に比丘尼杉とて古木あり。若狹の白比丘尼の植し杉也。又大鳥居の向に見ゆるは諏訪山とて明神の社あり。此松山つゞき風景類ひなし。惣じて河井町は、住吉・諏訪・彌勒とて氏子三つにわかれて小祭禮あり。

又海士町は鳳至町の西、輪島崎の間にあり。昔は筑前國より夏每に來て、此沖をかせぎしに、中頃より此所に在住を被仰付しより今も諸役御免也。初めはかすかなる住居にてありしに、次第に榮えて家居よく並び立て百軒餘あり。肝煎一人役人一人あり。夏中は番頭の者留主居一人殘し、不殘十八里沖なる重藏島と云に渡り、あたりの小島又七里此方の七ツ島抔を拵きて、多く鮑類海草を取て九月になれば戻り來る也。此も昔はあさまなる小屋を立て有しに、今は島にはよき家居立てあり。重倉明神社ありて、美々敷神輿なごありて御幸の祭禮あり。神主は鳳至町淺井氏、寺は同所寶藏寺日那にて、神主も寺も夏中は引越ある由。此島共は昔は輪島の領なりしに、中頃爭論有て少し近き故名舟村の領分に成し也。海士は今も渡り拵也。御上へ運上は白銀十三枚上納する也。往古より此輪島に鮑を取と見えて、中納言家持卿の長歌に。

すゞの海人の、おき津みかみにいわたりて、かつぎとるといふ、鮑たま、いほちもがも、云々。

七ツ島・舳倉島の委きことは名舟村の所に記す。

又輪島崎は海士町の末少し放れてあり。家數五十軒餘あり。誠に此浦の崎にて船の間ありて、高の山に夏中燈明堂あり。船間屋沖崎・刀禰・あさふづや抔とてありて、夏中數百艘の舟不絶繁昌也。氏神天滿宮也。神主は湊氏也。此宮に日

本初て鑄造所の明鏡あり。祭禮毎歳九月九日也。一説は御神体少彦命の由。又聖光寺とて禪宗あり。此寺始は七堂伽藍の大寺にて、天台宗なりしと云り。今に境内廣し。寶物多し、佛舍利あり。是は和州龍田の法薩寺と此寺にばかり傳はる由。其外釋迦如來金像衣のきれあり。其外略す。又此尾崎に岩井堂とて秀景の所に蛭子の社あり。又町家の後に、昔此所に信田小太郎と云人のさまよひ來りて、刀禰と云者の方に仕へありしとて、其時の腰懸石也とて埒結廻しあり。脇によき清水あり。

案ずるに信田の三郎事にや。夫は六條の判官爲義の三男にして、父に與力し朝敵となり、方々流浪ありて後に、元暦年中に義仲と同意して伊勢の國にて誅せられし共、又伊賀國にて自害ありしともあり。夫なれば信田の三郎先生義廣とあり。又後には義範共いへる由。保元の頃此所へ來りけるにや。又此子息の中にもありや。

又此沖の島を少し廻れば鴨浦とて面白き所あり。少行けば袖の濱也。是より光浦へつづき、名物の五色石盆盞抔にうちて名石也。歌仙の小貝もあり。此そでの濱の風景は、向は沖に七島とて風により色々に變化し、誠に喜見城をなせり。堀村・釜屋谷村の山つゞきの岡抔あり。海上見おろし、右は輪島沖のさき、左は鵜入・光浦、秀景筆にも書つくしがたし。依て輪島より遊山、春は老若男女の隔なく袖をあらそひけり。錦の濱とは此所を云。

春の頃袖の濱に遊びて。
五色石ひろふや袖のはまちどり

則光浦は、七浦庄の所に記せし岩倉の觀音の光を放ち揚り給ふは此所也。委は岩倉寺緣起にあり。

又輪島河井町の後、河原田川の緣に彌勒堂とてあり。昔は能き社にてありしとて、今も九月七日・八日祭禮也。此宮森の内に酒塚とてあり。昔此塚より美酒涌出し事あり。色々の物語あり。略す。又久手川村に池田の松とて名木あり。又此川緣一里上に粉川と云所あり。紀州粉川寺の本尊同木作の觀音の靈像あり。當國順禮三十三番の札所にて、堂の中に大像の仁王尊の古佛あり。其外古佛多し。今も靈驗あらた也。毎年元朝には糟の占とて、酒の糟を苞にして此川の淵へ流す也。とまれるを吉とし、流るゝを凶とするの

占也。元此觀音は、是より二里奥七村山と云に、泰澄大師御再興ありし七堂伽藍の大寺ありて、石動山門徒にて、衆徒多くありて近郷寺領地成しに、兵亂に退轉し、今本尊を此所に移せし也。今も近郷に仁王堂・釋迦堂の外に大泉坊・常學坊・上蓮坊などゝてあり。

又熊野村本江村領に、跡繼山とて不思議なる風景の名山あり。此山に跡目草とて、久き家の中絶したるも、此草を所持すれば再び家起るゝ云へり。川の流れ山の姿、類ひなき風景也。其上紅葉の名所にて、秋の末は見物也。

ながめこし花も綠も色かへて跡繼山の木々の紅葉ば

又此向に姫の坂とて峠あり。惣じて是を輪島にては河井谷内とて、村々多く穴水・中居への往來也。小泉村にて穴水へ行には一ノ坂村へ行也。中居へ行には洲衞村へ行也。何れも輪島より五里半道程あり。輪島より一ノ瀨村・小泉村と馬次也。又姫の城とてあり。城主三井の何某と云て、長家の類葉成しよし。是より三井郷と云也。城は興德寺村の領也。又本郷村近し。神杉伊豆牟姫神社立給ふ。一郷の宗社にて、三井の大幡祭とて三月廿一日・廿二日也。本江村・渡合村・中村・仁行村四ヶ村に當屋ありて、賑しき祭禮也。神主は山崎氏にて興德寺村にあり。又興德寺村に大寺の跡あり。興德寺坂とて往來にあり。此寺は梅山和尙開基、惣持寺近門の寺なりしに、禪宗より中頃改宗あり。今所口へ移り、一向宗興德寺則是也。西方院家にて一國の觸頭の錄所也。しかし所口興德寺は金澤より引越の寺といへり。いかにや。又本江村に九兵衞とて百姓あり、古き印物等傳へり。長家抔よりの書物あり。又往來より少し山手に石休場村と云に、昔泰澄大師七村山粉川寺へ山上の時石に休み給ふ腰懸石あり。今も小名にわけて石休場と云也。亦此村領の內に神田山(シンタ)と云あり。黑瀧とてあり。川中に俎板岩・俎箸岩・岩庖丁と云あり。山神此所にて鮭太郎と云物を料理するといへり。其外此神田山は昔長者ありて寶を納しとて、金の鷄のうたふ事あり。此聲を聞ば仕合よしと云り。惣じて此邊は鄕士の筋目とて數多あり。

又此往來穴水近きに、一ノ坂村領の內に小伊勢坂東氏墓所とて石牌あり。是は長家催促をうけ、越後勢に出合討死せしと也。則小伊勢村に子孫あり。又輪島より宇出津へ越ゆるは

道幾筋もあり。河内越・金藏越、本道は町野越也。何も八里餘あり。中にも近きは六里半あり、當目越とて當目村より神和住村・曾又村・宇出津と出る也。此當目村方々へ散村に成りて、蓮花坊と云が往來也。千毒と云川中に岩井戸と云不思議の洞あり。海邊より三四里の山奥なれども汐のさしひきあり。烏賊抔吹出せし事あり。昔此洞に猿鬼と云物住て人を取る。是を大穴持命退治ありて、其靈を祭て今猿鬼の宮とてあり。案ずるに是は狒々の類なるべし。其外此猿鬼退治ありし時の舊跡色々あり。略す。又大箱村近し。此村に笠岩谷と云にさながら傘に似たる岩あり、見物也。

粧ひ並びて田を植るをみれば。
早乙女や嘸わが笠は黑からん

又輪島より惣領へ行く本道に、磯傳ひ七町計塚田村領往來に長十一間の橋あり。源は當目山より流るゝ也。又磯邊に歌波の地藏と云あり。泰澄大師の作厄神除の本尊にて利益あり。又輪島より十町に稲舟村とてあり。往來より山手にある也。此村に藤太とて十村役あり、笠原氏也。先祖は由緒ありて數千年の百姓也。昔は輪島にありて、或時旱魃にて田畠多くわれ入けるに、其頃の主是をなげき、何卒此田へ水あて呉る者に獨の娘を得させんと誓ひせしに、或時一人の若き男來りて一夜の内に田毎に水をあてけり。其後娘を連行んと云共主ゆるさず。其男は此輪島川の淵に住ける大蛇也。或夜其家を七卷まこひ、既に戸口より潜り入らんとせしに、内に大なる蟹ありて、此蛇身を九つにはさみ切る。其骸九ヶ所へとび、おつる處池となり、其池毎にすむ。今に蛇池とて九ヶ所近郷にあり。中にも惣領村の内深見と云處一頭飛て、是を親池と云ておそろしき池に靈魂住みて、此笠原の家へ祟りをなす。其頃泰澄大師此家に旅泊りありて此事を聞玉ひ、法力を以退散せられしより無事になる。其例を以今も五月八日には此家に、石動山の衆徒僧正廻りの節一宿あり。翌日は深見の親池にて加持あり。此因縁にて笠原の家に蟹を吉事として殺す事なし。又家に潜りと云を用ひず、尤此家數千年傳り、利家公御發駕の節御扶持等も頂戴あるべきなれども、此謂に而石動山へ由緒有て、其節御沙汰なきと云り。

又輪島より東に當て、大野嶽とて近郷の高山あり。輪島より登り二里にあり半途に大野村あり。別當高泉寺とてあり。本尊高洲(カウヽス)藥師とて靈像あり。御前は村より一里あり、五社權現の社あり。少彦命の垂跡也。神主三上氏也。惣じて今高洲山と云ども實は高淵山也。洲と淵との誤り也。夫木抄抔にある中納言家持卿の歌に。

狩人の來ぬ日ありとも高淵の山の雉子はのどけからじな

家持卿假に暫く住給ふ所とて、今公家の谷内とて村の内にあり。此嶽は高山にして、色々おそろしき處あり。賽の川原・はむの池などゝてあり。併絶頂は近國を見おろし絶景也。社のわきに大木の杉あり。別當高泉寺は眞言宗にて、元は八坊ありしとて寺跡そのまゝあり。其頃の寺代官の筋目とて、谷内村に仙右衛門と云者あり。昔は此山の一乘と云所にありしより、一乘(ヒトノリ)仙右衛門と云。先祖は主馬判官盛久の子信吉と云人の子孫也といへり。又同村の打越の與兵衛と云百姓も、鎌倉權五郎景政の子孫のよし。

◎惣領　輪島より一里十町、本馬六十一文、輕尻三十六文、人足十八文、家數六十軒計處々に散てある村也。此邊は河原田の郷也。此散村に深見と云處に、親池とておそろしき池あり。昔蛇神住て人を取る。此事前にしるす。毎年五月九日此池にて石動山の僧勤行あり。其昔は此池より風雨おこりてなんぎ有けり。今も雨の宮・風の宮とて田の中に小社あり。

又少し行は鷲嶽と云あり。是は谷内村の内也。海際の磯山に茂りたる大森あり。櫟原彦神社立給ふ、則鷲嶽八幡宮と號す。本地大日如來。昔は兩部の大社なりしに、兵亂に今は神主までにて、四柳氏也。鷲嶽と云は、往古此所にて鳳至比古御神鷲の悪鳥を矢にて退散ありしに、其羽に八幡の文字あり、是を勸請せし社也と。又此骸を納しより輪島の鷲藏宮と云由。委は緣起にあり。中比利家公御通りの時、此宮の衆徒の内石動山に與力せし者ありて、長刀にて御成敗ありしとて、往來に其處を長刀坂とてあり。又少し行ば、あさみの水とて冷水あり。往來の者夏は此水にて渴を凌く也。又道脇にある御鹽藏は白米村也。

又名舟村、南志見の郷也。惣領より一里廿八町あり。此村は川西より上りの馬次也。小田屋へは八町あり。沖なる七

ッ島・舳倉島は此村の領也。七ッ島へは七里あり。舳倉島は七ッ島より十三里、中比輪島と論ありて此村の領に成し也。七ッ島の大島は、海士の小屋島とて假小屋懸て夏中は居るなり。輪島より午の方に當り、六里半あり。名舟村より五里半餘あり。長百九十間餘、幅五十間計あり。雁股島は海士は矢筈島と云。長五十間幅二十間計。龍島は長百間計はゞ八十間計。赤島は長七十間餘はゞ三十間計、あかきしまなり。荒神子島は長百五十間幅五十間、隼の巣あり。高さ四十間計、岨しきしま也。こしき島は、海士は烏帽子島と云、長五十間はゞ二十間計。御廚屋島は高さ三十間計長百間餘はゞ百間餘計、是にも隼の巣あり。其外邊りに小島多し。嶋より島迄五町より八町計充あり。大島より御廚屋島までは端より端にて廿三町あり。氣色により島の形さまゞに變じてみゆる。誠に喜見城のごとし。又舳倉島は名舟より十八里といへども十七里あり。亥子の方に當り、輪島より二十里といへ共十八里あり。子の方に當る。島の高さ七八間あり。長さ九百間幅二百五十間程あり。廻り一里餘、水池三ヶ所あり。老木の松八本。島權現瀬織津姫神社南の方にあり。祭禮七月十五日・十六日、御神輿御幸あり。神主淺井氏懸所あり。御神体明神宮と云ども辨財天也。脇に觀音堂あり。法藏寺懸所あり、淨土宗。海士小屋九十軒あり、不殘板屋作り也。船の懸り間あり。自然に菜・蕪生じて、外は芦・茅のみ生ずる也。其外廻りに小島多し。第一に黑海苔・蚫名物にて、御上へ御用の分上る也。運上銀十三枚也。其外諸魚時により大獵する也。

南志見の里なる宿の小娘の夜すがら糸繰る業のいとものいらしくて。

小車やたれまつむしの音にそへて

◎小田屋　惣領より二里あり、本馬九十五文、輕尻五十二文、人足四十八文也。家數五十軒計あり。惣じて此邊を南志見と郷名をよぶ也。商家酒屋なごあり、よき村也。南志見川あり向は里村と云。此川の源は金藏村奥山より一筋、東印内村山より一筋流れ、此湊へ出る也。御收納藏一筋、御鹽藏一筋あり。又井口藤彌丞と云し郷士の城跡あり。里村に西光寺とて眞言宗あり。又宇出津へ行く金藏越は、此川緣を登り柳田村へ出る也。

又曾々木大川なごへ行く間道は、此濱より磯傳ひ行。又本道川西へ行に澁田村を經行也。此澁田村に照光寺とて一向宗あり。是は南志見の城主井口氏の子孫とて、井口山と云。此村より峠を越れば大野村也。此峠の内に濱田藥師道と石牌あり。是は時國村の散村に大川と云處にあり。靈像の藥師如來當國十二藥師の内也。此村の磯に義經の舟隱しとて、奥しれぬ大洞あり。二町計は舟をさし入るゝ也。夫より奥は闇くてしれず。又唐竹の御藪あり。御鹽藏あり。此村は町野川の湊にあれば大川の名あり。川の向は曾々木也。

大野川の千鳥を聞んと足をとむれば。

立去て川の向になく千鳥

又大野村は、澁田村より峠を越れば下手にあり。町野川の緣にあり。大村にてよき村也。公領也。池田抔とて酒屋あり。氏神は八幡宮毎歲八月十五日祭禮、歌舞妓なごありにぎはしき也。上時國村は此村の向也。

◎川西　小田屋より一里十六町、本馬六十八文、輕尻四十一文、人足廿文也。家數處々に別れてある村也。川の西故呼ぶなり。此村に棚貝の藥師とて、昔は大寺にて其跡あり。其外に谷内の妙義なゞてあり。又櫻木と云所もあり、古寺の跡也。又少し川上に井ノ面村とて公領あり。氏宮は岩井堂とてふしぎなる社地也。御神躰は臍の緒と云り。又川西より鈴屋へ行には、櫻木と云に渡舟あり。此渡しより山手へ行ば金藏村也。金藏寺とて眞言宗あり。白雉年中開基の由。山王權現の社あり。近郷の大寺也。昔は七堂伽藍にて八坊ありし也。兵亂に退轉す。今の金藏寺は松習院とて白山の別當也。

◎鈴屋　川西より十七町、本馬廿八文、輕尻十一文、人足六文也。家數五十軒計、よき村にて酒屋なごあり。村中に川有、寺山川と云。源は寺山村山より流て、大野川と合流る。長六間の橋あり。此橋を渡れば粟藏村也。惣じて此鈴屋村よりは宇出津へ五里、飯田村へ五里、輪島へ五里あり。此橋を粟藏橋と云、此爪追分也。

又宇出津へ行には粟藏より丸山へ一里、丸山より久田へ一里廿四町、久田より久龜屋へ廿四町、久龜屋より宇出津へ一里廿五町也。粟藏村に丈藏とて、利家公より御扶持十五石頂戴せし十村役のありしに近年斷絶す。今其跡彦丞と

云あり。先祖は粟倉氏にて、彦十郎とて大納言様御宿仕。男子二人あり、御陣中召連られて次男は末森の合戰に打死せしもの也。兄彦丞は御暇下されて父の名跡繼し也。其時より御扶持也。其外御印物傳へり。又此村に石倉比古神社立給ふ、御神躰白山權現也。神主瀬尾氏也。近郷の宗社にて、又元宮跡とて田の中にあり。岩倉山は此北の高山也。又東の山手に佐野村とてあり。則佐野寺とて眞言宗あり。是より舞谷村とてあり。日の御前とて高嶺あり。昔は五社權現の大社ありしに、告ありて權現を石動山へ移し奉て、今は神明宮を石動山より勸請してあり。舞谷御前共云也。近年論有て寺山村分に成しといへり。

又粟藏より南の川緣の岡に、善願寺とて眞言の小寺あり。又往來一里に東村とて小村あり。是に石瀨比古神社立給ふ。御神躰八幡宮也。座主は八幡寺とて東村に眞言宗あり。神主は川向德成村大瀧氏也。此町野川を此邊にては岩瀨川と云て、此所則岩瀨の渡しとて元はありしと也。此渡り月の名所にて、今も川瀨に毎歳八月十五夜には月影二躰移りて、北國一の月の名所也。古歌に。

舟こむる岩瀨の渡し小夜更てみかまき山を出る月かけ

宮崎山共いへり。御鏡山をみかまき山と誤りていへり。岩瀨の渡しの東の高嶺也。社は此麓にあり。昔は兩部習合の大社にて、近郷の惣社也しといへども、今は幽なる小社也。又渡しの向に大鳥居あり、德成村の八幡宮の鳥居也。毎年名月には近郷より月見ありて賑し。予も幸月の頃此邊に來て、日頃の望みなれば一夜川瀨に月見侍りぬ。

今宵此川瀨の月を見る事年月の望み足りて。

たぐひなき月ふたつ見る川瀨哉

惣じて此川は鳳至・珠洲の兩郡の境を流れて、源は四筋なれども、本川は河内村領高洲山の東より流て、一筋は上町野郷五郎左衛門分村奥山より流て、笹川村にて合流す。一筋は合鹿村山より流て、小間生村にて合流す。一筋は寺山村山より流て粟藏村にて合流る。上町野・中町野・下町野の三郷を流れて曾々木の湊まで流入る。八里餘あり。當國第一の流にて大川と云。町野川とも云り。其外處々にて岩瀨川とも大野川ともいへり。此川つゞき村々多し。丸山村、粟藏より一里、天王寺とて密宗あり。近き頃の法印入定有

し塚あり。又長尾村に昔弘法大師與へ給ふたばこの種とて、煙草の名物あり。

又小間生村本隆寺とて密宗あり。道重とて百姓あり。又久田村は紙を漉き名物也。郷の田と云にて、追分の馬次也。合鹿村は三ヶ所に別れて、權舍とて山の中に散村あり。五輪とて古塚あり。又田平と云散村に、福照寺とて一向宗の大寺あり。此邊を上町野郷と云て、郷の田より分れて、此田平を經て木郎へ出で三崎迄の往還也。宇出津へは郷の田より久龜屋へ出行なり。又小間生村の東の谷へ入、此散村大郷(オホガウ)と云を經、桐畑村より内浦吼木山・鳥越村等へ出る也。是を泥ノ木村越と云。

又小間生より町野川緣を登れば石井村近し。藏福院とて禪宗あり。米山藥師とて安置あり。是は柳田村領米山の城跡にありし尊像也。長十四間の橋あり。氏宮諏訪明神の別當は今一向宗光榮寺とて社内にあり。昔は天台宗也しといへり。又柳田村・笹川村・石井村三ヶ處領境に笹川落合也。笹川村にも長八間半の橋あり。此川は五郎左衛門分村・神和住村山よりながれて、寺分村・天坂村等を經て、此所にて合流るゝ也。柳田村、此邊の大村にて五ヶ處に別てあり。安養寺とて密宗あり。昔は二百石寺領ありて五社權現の社あり。今も別當あり。其比は七堂伽藍成しに、今は小院也。此寺の隱居地に、法花寺とて眞言宗近郷の大寺あり。本尊藥師如來の靈像は大佛にて、堀田の中より出給ふ也。又米山とて城跡あり。冷水あり。升形・刀の池抔とてあり。法花寺と云寺有て、米山藥師とてありしに、兵亂に退轉す。本尊は石井の藏福院にあり。石井村は其時の城下也と云り。市姫社あり。又柳田村ぬづき谷と云所に女瀧・男瀧の兩瀧あり。此瀧の邊の岩に諸菩薩の來迎の御姿を彫りてあり。金山と云に、近き頃迄此村に十郎兵衛とて大百姓あり。此所持ありし千刈の一枚の堀田あり。板尾山とて粟の御林あり。米山とて同御林あり。金藏越とて處々へ行は、晦日(ヒヅメ)谷内と云より登る也。又河内越と云は、川上へ登り五十里村へ行也。國光村近し。城跡あり。委きことしれず。西山村に田村麿の太刀とて傳へる者あり。五十里村、柳田村上半道にあり。長福院に本尊行基菩薩作の上品の阿彌陀如來あり。又此村に町野川の淵跡とて、今蟹

池としてあり。昔此淵に大成蟹住て人を取る。弘法大師威力を以退散あり。其後も此池にありて大石と成、色々怪異をなす故此池を埋めし也。今も此地を穿ち石を顯すと、霖(オホザメ)して數百日止ず。是は金藏村境にあり。黑川村近し。新助とて公領の庄屋あり、よき百姓也。河内村近し、高洲嶽の東平にある村也。

此河内越とやらにかゝり、山路をたどり登りしに、谷間の清水こそ町野川の源と云るを聞て、いつしか川音も絶々に、汗苦敷渴をしのがんと此清水を結ぶ折から、吉野川その水上を尋れば苔の岩間を清水とく〳〵と西行の古歌を思ひ出して。

川音も消て岩間の清水かな

又鈴屋より飯田へ越る間道あり、黑峰越と云。四里あり。鈴屋村の向東の谷内へ入、寺山村を經て登る也。此寺山村は處々別れて山中にある大村也。散村の阿部殿(アベツト)と云所に、黑峰の城主阿部判官義宗と云人の塚あり。則往來にて、所を五輪と云。則此村に判官の子孫ありて、阿部殿〳〵とよびしを、誤て阿部當と今よぶ也。是より黑嶺山へ上る也。道に盃谷・銚子谷などゝて深き谷あり。是は黑嶺の城元朝に落城せし時、器を捨ありし故に地名によぶと云り。絶頂に城跡あり。東方に冷水あり。七ツ塚としてあり。是は落城の時死骸雜物を埋みし古塚と見えて、今も穿てば兵具出ると云り。此黑嶺と云城廓の時は、大木しけり黑く見えし故名とすと云り。東平は上戸の嶺山にて色々舊跡あり。上戸三ヶ村の處に記せり。西平は寺山村領也。又寶嶺山と云り。山の本名にして誠に絶頂に冷水あり。藥草其外產物多きのみか、一國は云におよばず、近國を見おろし船の見當となり、景色いはんかたなし。實にも寶嶺にして、內浦鰤網の見當となりて、御前は城跡の北二三町登る也。松柏茂り、則寶嶺大權現の社あり。御神躰白山宮也。此御前は南山村の領也。近く權現の鍵等は、十兵衛と云古き百姓ありて支配する也。別當は上戸の光性寺也。神主は飯田の葛原氏也。此寶嶺の麓に洲卷村・白瀧村としてあり。則白瀧として名瀧あり。靈像の藥師如來ありて是も南山村十兵衛支配也。天竺傳來の尊像にて靈驗あり。惣じて此邊に、昔は中田村の兵右衛門、北山村の治郎兵衛、南山村の十兵衛、是は一

廓搆へ、中田殿・北山殿・南山殿とて威勢をなして古き筋目の者也しと云り。此邊は若山鄕とて廣く村々多し。委くは飯田・若山の鄕の處に、黑嶺つゞき川の流迄記せり。

此黑嶺を越るに風景類ひなしといへ共、道のけはしきにしばらく息を休めんと、石に腰を懸向の山をとへば、陸奥にはあらね共是も青葉山と云て、紅葉せしに。

世の中の苦は色かへて青葉山

又鈴屋より飯田へ本道通りは五里あり。鈴屋より黑丸へ二里三十町、黑丸より大坊へ一里八町、大坊より飯田へ一里十六町也。是を八太郎越と云。又若山越とも云。委は末に記す。

又鈴屋より大谷村へ行は、すゞやより吉ヶ池村へ一里二町、本馬八十三文。吉ヶ池村より大谷村へ一里、本馬六十四文。此吉ヶ池村に吉祥寺と云臨濟の禪宗あり、古き寺の由。又鈴屋より時國へ行には廣江村へ出る。此村の田中に堂あり。弘法大師の御作の彌勒菩薩也。又此村の宮もりの內麻賣の地藏としてあり。虫喰齒を病む者は、其年の數程麻の木の箸をこしらへて備へると、痛み忽に治ること靈驗あらた也。町野川上の者は、五六里末より右の通祈念して流す也。奇瑞あり。此村に成政として山廻り役あり。粟藏氏也。智德寺として禪宗あり。伏戸村續き也。公領也。寺地村間にあり、高玄寺と云禪宗あり。

あさま成軒の妻に、櫻のさかりなるにめでゝ一夜の宿りをもとめんとて。

とてもなら櫻咲家に宿からん

◎時國　鈴屋より廿九町、本馬三十八文、輕尻廿三文、人足十文也。此村は下時國とて公領と私領入交りあり。川西より一里十町あり。本馬六十一文、輕尻三十六文、人足十八文。上時國村、日野氏右馬助とて一軒百姓あり。公領第一の高持にて庄屋也。此先祖は昔元曆の比、平大納言時忠卿此國へ配流ありて、其嫡子時國と云る人の子孫の由。中頃迄此所を大刀村・晦日村と云、不殘田地せし也。御當代に成て藤左衛門といへるを別家させ、田地を分け私領に成し也。右馬助家に色々什寶あり。畠山殿時代の書物等多持傳へり。今も上時國不殘公領にて、右馬助高の內にて、一村下百姓の家來分也。いつしかに大刀村・晦日村を此家名に

呼び、今は時國村と云り。上時國・下時國・大川・曾々木とて別れてあり。御收納藏あり。高田寺とて眞言宗あり。時國兩家の菩提所也。東の坊とて同宗の小庵あり。氏宮八幡宮に、八月十六日には毎歳祭禮に歌舞妓あり。曾々木と云は町野川の湊にて、少々商家等もあり。下時國村入交り、藤左衛門とて右馬助別家山廻り役なり。日野氏也。

嵐とていとふもあだよ奥山にはこばてながむ瀨々の紅葉々

又東に高山あり、岩倉山と云。海中へ指出たる岨敷靈山也。則石倉比古神社也。本地千手觀音也。此本尊は輪島光の浦の沖によな〳〵光物あり、白雉二年不思議ありて漁父の網にあがり給ふ靈像也。則別當は白雉山岩倉寺とて大寺也。山の半腹にありて、村より十町餘あり。又岩倉山ともいへり。惣じて此三町野の郷に密宗の寺十四ヶ寺あり。のこらず岩倉山と云也。則名所記にある宮城山是也。深山木山共いへり。名歌集に。

我こひは君を宮城の山ならでまつにかひなきなが濱のうら

案ずるに、元亨釋書に曰。大和國岩倉の金藏寺は隆豐上人の開基、多武の嶺の定惠上人の御弟子にて俱に渡唐あり、金藏寺を建立す。海中より靈木を得て大悲の像を造るとあり。近きに岩倉山金藏寺あり。又千手の像海中より上り給ふ。似たる事爰に記す。又金藏村の金藏寺は、白雉年中の開基にて、昔は七堂伽藍にて八坊あり。今の金藏寺は白山宮の別當松習院と云、三町野郷十四ヶ寺の内にて今も大寺也。岩倉山の緣起未見之、いかにや。

又時國より眞浦村へ行には、道三筋何れも國中第一の難所也。本道は岩倉越とて此寺の腰より越ゆる也。廿五町あり。一筋は簑捲越(マクリ)とて、曾々木の家の後より登りて山の半腹をこゆる也。山けはしく、石山にして恰も劔のごとく、下より吹上る風にて簑抔着することならず。依て名とす。是道程十三町計あり。又一筋はひろぎとて道程六七町程あり。ならびなき大難所也。是も曾々木御鹽藏の腰より磯の岩壁の半腹を通る也。高は山岨しく屏風を立たるごとく、下は數百丈の大海也。出口に大なる洞あり、浪打入るときは響きて雷のごとし。是も氣臆れてすさまじき也。此洞は福穴と

て、役の行者の護摩を燒給へる洞と云り、奥しれず。此洞の口を、浪間を考へ向の岩に走り上る也。夫より岩石に手懸り足懸りあり。是を能見て取付踏へて歩む也。是も氣おくれて手懸り足懸りも見えず。亦或は梯子とて岩を割たる所あり、是を登り下る也。迚も此道のありさま筆にも盡しがたし。我等も物語にとおもひ通り侍りしに、聞にもまされる難所也。氣臆れては前後忘じ、ふたゝび通るまじき所也。去共所の者は、道の近きにめでゝ荷負ひて通る也。下へ落れば海岸の岩に碎かれ海水に沈み忽ち死す。與し風すれば狐等歩む事あり。其時は兩方より行合ときには、人に而も狐にても片方のものは落る也。此所にて落て死せし者多し。然るに近年安永年中より片岩村の海藏寺の隱居發願して、石工に云付道を切廣け給ひしより、五寸計にも成て往來仕安くなるに、亦其後寛政年中も再石工に云付、莫大工料を與へて切廣け給ひしより往來安くなりしよし。

やう〳〵此難所を越て、暫く息をつぎて跡をみれば。

雉子の聲に山ほろ〳〵と崩れけり

◎眞浦　時國より廿五町、本馬三十五文、輕尻廿二文、人足十文、家數三十軒計あり。權兵衛なごゝてよき百姓あり。此邊は西海郷と云、中にも邊鄙の片浦半也。前は滄海漂々として、後は岩倉の山峨々たり。左はひろぎの岨端巖々たり。右は朴坂の峠嵩々とありて、誠に閑靜いはん方なし。御鹽藏の傍に藥師堂あり、丈六の金色の大像也。いつの頃より安置と云事しれず。其外にもよき百姓家一兩軒もあり。又仁江村近し。朴坂峠越へば廿町あり、友定と云百姓あり。清水村仁江より八町あり。皆鹽師にて御鹽藏處々にあり。此處は難所多く道岨敷といへ共、山水の眺め盡ず。しほがまの躰岩間の人家の風情、又たぐひなき眺也。

罪なくして配所の月を見ぬことゝ古人の言葉もあり。今宵望月のその望も足れること我らの身にありとて、各々浦半に出て。

山を見つ海みつ月の今宵かな

亦此邊の磯邊に赤岩と云あり。岩岨敷面白く浪寄せて、四方より波打所あり。則四海波と云り。

劔は箱に、酒は小筒に、弓は袋に、燒飯は腰に。

四海なみ靜に御代の小春かな

◎片岩　眞浦より一里九町、本馬五十九文、輕尻卅六文、人足十六文。此邊の大村也、家數百軒計あり。御收納藏・御鹽藏あり。海藏寺とて禪宗あり。

又片岩より大谷へ行半途に、長橋村とて少し山手にある也。此村に北島神明宮とて大社あり。境內廣く能き社頭也。桓武天皇延曆元年より鎭座と緣起にあり。社地を天津山と云由、海際より十四五町あり。昔平大納言時忠卿の此邊左遷の時、歸洛の事を此社へ祈り玉ふとて、天國作の寶刀一振り、中宮御產の時の子がへりの玉あり。又時忠卿奉納の歌に。

能登の國聞もうるさしすゝの海また吹き戻せいせの神垣

其外寶物あり。神主龜山氏にて開帳あるべし。又此村に國政・末政とて百姓あり。此末政方に、書は石にて夜は光る玉あり。夜光の珠といひ傳へり。

◎大谷　片岩より一里三町、本馬五十三文、輕尻卅一文、人足十五文、家數二百軒計り、近鄕の大村也。此村は昔平大納言時忠卿の左遷の地にて、其舊跡色々あり。船着し所を鄕（ガウ）の間とてあり。其時烏一羽立去けるを、是則時忠卿の重代の烏丸の太刀の精也とて、此烏の行泊る所を館にせんとて、半道山の奥に堀搆へなどたくましく館の跡あり。則時忠卿の子孫とて、則定惣左衛門と云一軒百姓館跡にあり。家後に時忠卿の古塚あり。其外に其頃弄び給ふ器財など持傳へり。其烏の出し川を今も烏川と云り。又此村に此卿の筋目とて、實名を家名によぶ者十二人あり。賴兼・賴光・賴政・兼政・政賴・友安・友吉・助友・吉盛・國吉・助光・則定、是を大谷の十二名と云。中にも賴兼は山廻り役にて、利家公の御墨付・御扶持を頂戴あり。又吉盛と云者の屋敷に穴藏有て、內に十二領の具足ありといへり。惣じて能登の國義經の奥州へ下り給ふ時、此國に立寄給ふは、此時忠卿と義經には知緣有て、態々時忠卿の配所訪ひ給ふ故也。依て能登に義經の舊跡多し。

時忠卿の塚にて。

諸人の涙の種や苔の花

又此大谷に、元弘の頃日野大納言資朝卿の一子阿新（クマワカ）丸の舊跡あり。此阿新丸は佐渡國にて父のかたき本間何某を討て

逆しに、追手懸り難義に及しに、山伏修行者に助けられ、危き命を存生へて、則此國へ着船して此大谷に世をのがれて在しとて、其守り本尊抔助友といふ百姓の家にあり。其時の山伏は三崎權現にてありしといへり。太平記などには阿新丸の此國へ渡りし事見えず。併實說にや。阿新丸は出家有て行法有しとて、大谷馬緤の山中に其舊跡あり。今も日野道とて草生せずと也。

又馬緤村、濱傳ひ大谷より村つゞき一里ある村也。大間・鰐崎・泊とて小名ありて、三ケ所に家あり。御鹽藏も三ケ所にあり。此村にも馬緤の七名とて、七人家名に實名を呼し者ありしに、中頃何も退轉して一兩人殘りある由。是は阿新丸の筋目の者也しと云り。惣じて此所馬緤村と云は、義經の馬を擊ぎ給ふよりの名とあり。則其時神馬草と云海草を以飼料ありしとて、外にては神馬草といへ共、此邊に而は義馬草といへり。俵藻の樣なる藻也。又奥州御厩（ミ）と云所にも此說あり、いかにや。又本光寺とて禪宗あり。守禪寺とて塔司あり。昔峨山和尙住み給ふと云り。此山に峨山道と云もあり。今に日野道・峨山道とて人踏事なし。又此所に名物あり。蛇骨石とて菊銘石あり、御留め山になりてあり。又海中より蛇の屎とて金交りの黑き小石上る也。燒て粉になし呑は瘧落る也。又此村の大瀧と云宮森に深き穴あり。石を落せば餘程聞ゆれども、後には幽になりてしれず。金輪際よりの穴と云り。

又笹波村近し、少し山手にある村也。此山に雷斧石とてあり。俗に云狐のまさかり石也。惣じて此邊の風景、山の姿・磯山の形、磯邊の奇石・異石・怪石の有さま絕景也。

かきりなふ晴わたれる空に。
かへる雁すゞのうら半の春邊かな

◎高屋　大谷より一里廿町餘あり。本馬七十七文、輕尻四十六文、人足廿三文、家數百軒計。此村は船の懸り間抔ありて、商家抔もあり繁昌也。夏中は破船奉行滯留あり。池田氏山廻り役あり。其外船持等ありてよき百姓あり。中にも刀禰と云者古き百姓にて、昔より石動山由緣ありて泰澄大師の衣とて傳へり。尤衫・裳とわかれて、今の衣とは大に異なる物也。見る處上は素袍のごとく下は袴也。地は布にて、今時のほたさらしのやうなる淺黃小紋の地白也。紋

あり、形不知。胸紐革也、正平革と云べき色茶にてもやうあり。衫長二尺二寸餘、肩のゆき二尺八寸餘、袖幅二幅共、襟三尺八寸餘、紐幅一寸五分二筋、一筋長さ一尺五寸計。裳前長二尺三寸餘、後長二尺四寸餘、腰板八寸餘、高さ三寸五分、紋あり、形不知。前後共紐有て同布也。先年此村太郎助と云者の方より出火いたし、火急なる故其節此衣を井戸へ投入しに、刀禰家も類燒して火事鎭りしに、井戸の内へも燒入ありしを、あるじ刀禰是をなげき、人足を以水をかへ、灰塚なり共築きて衣塚ともいたし度とて、水かへければふしぎや御衣其儘ありし。今少し其時の燒穴所々にありといへども、千餘年經たるに一向虫さしもなく色もかはらず。石動山より衆徒連名免狀あり。

高屋刀禰先祖當山申傳之覺

一、當山開基泰澄大師、元正天皇御宇より禁裏御祈願所ニ被爲定候處者、依有異術。粤聖武大皇御宇天下疱瘡、泰澄修法息災。其比奥能登發毒蛇萬民を惱す。則泰澄大師魔障悉咒縛、爲國家安全萬民豐樂五穀成就愈修驗道。是以刀禰奉ニ讃拜一大師第一之御門徒與成。夫より毎歲廻國宿具供奉ニ御衣一。御召下し御衣刀禰に御免許下し給ひ、當山出仕之砌着之、則俗躰を不改事、眞俗不二萬法一如の義理、凡夫の外に无レ仙モ、佛の外に凡夫もなき心也。其隨來歷毎年僧正廻と謂之、四月晦日より五月晦日迄能登羽咋郡の内小島村正觀音より祈念を初、在々所々鎭守にて致勤行、殊に刀禰代々吉例の儀式等不懈者也。

右由緒有レ之上申傳候、已上。

天平八年より正保二年まで九百十年に成。

能州石動山天平寺

衆徒中

大宿先達

脇宿先達

閼水先達

小木先達

高屋刀禰殿

右の通り刀禰方に傳ある所を其儘寫すといへ共、書誤と見えて讀兼候へ共爰に記也。此外に刀禰寛永年中より中頃十ケ村十村役勤し事抑書上たる扣有之。略す。何れにも古き

物也。亦長さ一尺計の觀音の像安置せり。瑩山和尙の作とも、又惠心の作共云り。又磯に嶽と云て小山あり。此山の腰に船懸り則其腰にあり。百姓を嶽と云て船宿する也。

又嫁ぐりとて、此沖三里に磁石島あり。鐵を吸とて船一里四方堅く不寄、ひくき島にて磯見えかぬる也。

◎折戸　高屋より一里四町、本馬五十三文、輕尻三十四文、人足十六文、家數百軒計あり。此村に次郎三郎とて十村役あり。高井氏也。亦外にもよき百姓あり。海苔類あり。中にも海雲（モヅク）の名物也。又是より内浦正院なごへ行道あり。山越にして本ノ村へ二里あり。道に雁ノ橋とて大なる堤あり。風景たぐひなし。又近きに唐笠村・山中村なごゝてあり。山へ少入る也。

又河浦村は狼煙村へ行半途にあり。此所の黑崎と云所に火打石の名石あり。いか程へりても角のうせる事なし、色は黑く飴色也。瑪瑙の類也。御とめ石に成、取る事ならず。

又島立と云所に磯山の腰に洞ありて奥しれず。内浦の松波村江ノ口の淵と云へ通じたるといへり。

又狼煙村へ行上野廣し、春の頃は雲雀の名所にて海も山も囀り渡り、面白さ限なし。

野も山も海も磯も沖も渚も囀る雲雀のたゞ餘念なくながめ居る折から、傍に寄藻掻く蜑のありて雀をながむるかといふ。いやわれはひばりをながむと云。蜑の云、雀は小鳥と云文字ならずや。爰元は海へ鳴きゆけば海雀と書べきや、せばし〳〵といはれて。

いかさまに波へ鳴き入るひばりかな

此老たる蜑は後にきけば、河浦の何がしとて辨口の者成よし。

◎狼煙　折戸より一里一町、本馬四十九文、輕尻卅文、家數六十軒計。是より三崎郷と云。此村に川崎七郎左衛門とて古き百姓あり。先祖は此邊の郷士にて、則城跡あり。磯山の風景よろしき地也。又家に傳ふる什寶あり。唐の鏡とて異鏡也。うらに八分字の三字あり。富定重と云字也といへ共よみかぬる也。又釋迦如來の金像衣のきれとて五分四方計りあり。武衛家より拜せし蜀江の錦のきれあり。又齋藤氏より傳ふるとて、利常公の御裝束の錦のきれあり。又利家公の御筆の短冊あり。

山家と云題に。

忘れじの山だにとはぬ山路哉櫻は雪に降かはれども

七郎左衛門家由來の事

先祖河崎與三助は珠洲郡狼煙村の住人、其比應永年中滿則能登國の守護の任に有しより、世々畠山氏の家臣也。天正の兵亂に畠山義則の孫娘流浪成しを娶て有し。其引手物に畠山氏の重寶の鏡を給はる、是を唐の鏡と云物也と傳へり。與三助・七兵衛は、相公御代承應年中珠洲郡十七ヶ村の吏に被仰付たり。妻は長家々臣浦野孫右衛門の娘なり。七兵衛子は重左衛門、重左衛門子は七郎左衛門、七郎左衛門子我父にして、三代七郎左衛門と號す。

又畠山先祖は足利義純公男泰國、始て畠山を以稱號とす。夫より國氏・家國・義深に至て南征討使となり、千破の城を拔て楠正勝を退治せし勳功により、大和・河内・紀伊國を拜し、且南朝より三種神器入洛の功により、義深の嫡男基國始て管領となり、基國子の二男滿則、應永年中能登の守護に任ぜられし也。義則に至る迄六代七尾の城主たり。

又狼煙新村は寺家村へ行往來にあり。よき百姓あり。

もはや此國の五十里の尾に來れば。

閑古鳥山なくなりて海ばかり

又三崎の山伏山とて、此國五十里のとまり北のはてにある高山也。是は過半は狼煙村の領也。元は鈴ヶ嶽と云り。渡海の船難風に出合、三崎權現に祈るに火見ゆる也。夫より山を見て難をのがるゝと也。依て狼煙の名あり。此山を廻れば三崎權現也。今は太守より夏中山の半途に大なる灯明堂ありて、一夜に油一升燈心布三尺充渡りて、渡海のたすけとなし給へり。誠に此山は海中五十里指出る尾にあり。高山に而其上古木も覆うて渡海の見當となる名山也。亦此山を山伏山と云に色々謂れあり。日野中納言資朝卿の一男阿新丸父の仇を討て、佐渡の沖にて追手懸り難義におよびしを、三崎權現幼年の孝心を憐み玉ひ、山伏の姿と成、船中に而難義を救ひ、此國へ伴ひ來り玉ひて、此山に神隱れ給ふより山伏山と云り。又聞く、義經の御内常陸坊海尊、此所にて義經に別れて仙人と被成、此山に住て山伏の姿にて折々みゆる故に山伏山と云もあり。又三崎權現元大社の時、衆徒多く此山の腰に有けるにより山伏山と云ともあり。又

渡海より山伏の頭巾のやうにみゆる故に云共あり。區々也。大谷の助友の由來にて、阿新丸の事實說にや。往古は狼煙山共、鈴ヶ嶽とも云り。誠に神の御山にて古木茂り、一枝をも樵る事ならず。古歌に。

山伏の螺吹嶺の夕ぐれにそこともしらぬすゞの上風

又此山の麓に間崎・宿崎・金剛崎とて風景の崎三つあり。依て三崎の名あるよし。又海中より越後の崎、佐渡の崎・能登の崎鼎の足のごとく見ゆるゆゑ三崎の說もあり。去共佐渡・越後には三崎と云ことなし、いかにや。快晴には越後の米山・佐渡の神戸山・能登の山伏山、誠に鍋の足なりに見ゆる也。名所記抔には御崎と書もあり。權現立給ふより云へり。古歌に。

幾つらか鈴の御崎を振捨て越なる里へいそぐ雁かな

顯　照

又宿崎・間崎・金剛崎の一里沖に、姫島・神島・鬼島段々沖へ並びて三つ島あり。此所において三崎權現神軍ありて第六天の魔軍と戰ひ給ふこと度々あり。其時は俄に海あれ、浪の色血に成て凄じきこと也。其後は濱に矢の根石とて色々矢の根形の石あり。是を懷中すれば物負せずと云り。

又狼煙村と寺家村の間に鹽津と云所あり。昔は此邊の津にて繁昌なる所と云り。今は寺家村の内になりて散村也。此村に刀禰の傳兵衛とて、太閤秀吉公の御朱印持傳へり。船一艘の櫂役御免の御文言也。名當は鹽津村四郎右衛門とあり。又此村の一向宗御坊に聖德太子の靈像あり、色々奇瑞あり。又大泊りとて、此鹽津の内にて家一兩軒あり。是にも鹽津繁昌の時は餘程家數有し所と云り。此磯邊に人かくし・船かくしとてあり。ふしぎ成所也。船かくしは七八十間四方もある洞也。船を十間計り入るれば、一段高くて内に色々間取有て人住て煮燒せし跡あり。又左の方に七間計四方の口の横穴あり。松明をてらし一里ばかりは行し者あれども、夫より奥しれず、隱れ里也といひ傳へて色々物語あり。略す。又人隱しと云所は、外よりは一面の山のやうにみゆれ共、登れば切戸有て下る道あり。口三十尋四方もある洞也。是にも色々間取ありて、いろり棚などゝてあり。いかにも亂世に人の隱れ住し所と見えたり。又此磯に獅々岩とてあり。大獅子・小獅子とて唐獅子を誠に畫け

るごとし。是は往古三崎權現獅子に乘てあまくだり給ふ獅子の岩と化したるといへり。諺に云傳へるは、或時權現獅子ゐるかと宣ひしに、入鹿と云魚有て答しより、權現の使者海鹿と云り。今も此魚を食すれば三年社參を忌む也。入鹿の三崎詣りと云事あり。又此邊に義經の駒の爪石とてあり。

磯岩の端に腰をして。
　涼しさや船の行衛も見えぬまで

又此邊に伯父の釜屋とて鹽やく所あり。此竈燒く翁あり。何くともなく與し風來て村中を乞食躰にて徘徊せしに、國所慥なる事も不ゝ言、年久敷此所に鹽を燒てあり。冬は繩なごなひて過しぬ。佛學・儒道其外諸藝に達し、武道にも委き者に而、或時此所に難船ありて諸役人滯留あり。此者の事を聞、色々物語有しにくらき事なく、後には六ヶしきとて人行ても物いはず。物の言ぶりは何れ西國・中國邊の者にやありけん。長生して寶曆年中までありしと云り。いかにも德をかくせる高僧の類か、又は敵なご持て身を隱せる者にやあらんと、其破船役人に行し人予に物語りあり、ふしぎ成人也とぞ。

世は火宅とて火生三昧に入り、市中却而靜なりとありしも、佛說なればしらず。此翁の竈の前の住居さぞここゝに思ひ出して。

　今更に祖父の竈屋の內涼し

爰に三崎の雀踊とて、盂蘭盆より菊月の末まで老若男女打交り、翁も杖を帶にはさみ、姥は孫を手引なごして踊る躰、誠に世事を忘れ餘念なく、和順の風土取もあへず、神代の人心もかくやと直なる御代を仰ぎて、我らも打交りぬ。

　豐年や踊忘れぬすゞめごも

まことに此國の風土古代のこりて、のとはやさしや土までもと諺にいひしに、其後二五の年へて、又此踊の頃行見るに、昔の雀踊とは引かへて若き者ごもの粧ひ立て、くろちりめんの帽子なごにひらしやらするも見惡うて、纔の世は斯もかはり行く有さまかなしく眺つるさへあるに、音頭取るをのことて、高慢らしくも踊の中に立て扇をひらめかし抔して、人もなけなるふるまひかたはらいたくて。

　蛤になる分別もなきいな雀

能登名跡志卷下

◎寺家　狼煙より一里四町、本馬六十三文、輕尻三十八文、人足十四文、家數七十軒計。三崎權現の御門前にあり、故に寺家の名あり。三崎權現は高座・金分の兩社にて、須津彥神社是也。北方鎭護之御神、日域四柱の其一社也。高座の御神躰は天津彥火々瓊々杵命、金分の御神躰は木花開耶姫命也。神代より御鎭座、崇神天皇の御草創。社領三崎の鄕、昔は三千貫、其比は別當高勝寺、神主大宮司猿女氏（サルノ）の外、社僧・社人多く在し也。中比まで十二坊ありて、其跡あり。兵亂に中絕あり。其後天正年中利家公諸堂御再興あり。社領田地五町、高に直し七十五石也。內廿五石御社頭御修理料に除知あり。廿五石は高勝寺、廿五石は大宮司猿女氏配分也。別當高勝寺は天台宗にて、講堂・觀音堂・阿彌陀堂・鐘樓・客殿・庫裏立並びて、奧郡の大寺也。塔司安養寺とて小院あり。當社寶物多し。中にも源義經翫び給ひし蟬折の笛あり。是は昔義經此沖にて難風にあひ、此權現に祈り給ふに奇瑞ありて寄附ありしとて、外に高麗笛一管あり。雪の下織の袋に入、緣起一卷と箱に入あり。其外世々の帝の勅願所にして、綸旨・院宣あり。每年八月十五日・十六日祭禮にて、十五日夜は雜子寢とて、近里は云に及ばず、數十里より男女集り通夜して、にぎはしきこと也。其外祭禮多し。略す。惣じて此御神は惡魔降伏諸難を除給ふ奇瑞多く、諸國より步を運ぶ人多し。其外當社のこと筆にも盡しがたし。亦鈴の御所櫻とて、神木境內にあり。又鈴の御牧とて、昔は名馬出來て、禁裡へ度々寮の御厩に立し也。其牧跡とて此上野に駒の尾とてあり。

　懷けつる鈴の御牧の駒なれど飼し古野を忘れざりけり
　　定家卿

又權現のつぶて石とてあり。玉石塚共いへり。人此石をとれどもへることなし。惣じて此三崎の海深うして、春の比喜見城立事度々也。此邊は小貝の名物也。又粟津村は寺家村續き也。是に昔三崎權現三千貫の社領の時に在し大宮司やしきとてあり。今御鹽藏等屋鋪の內にあり。又琴江院とて臨濟の禪宗あり、露地見物也。此氏宮十二の森とて、本

地十二藥師如來也。本道正院村へ行には、此村中より山の手へ入也。本村にて馬次也。又濱傳ひは粟津・宇治・森腰・引砂・高波・伏見・小泊・同新村・雲津とて磯傳ひ行也。雲津まで一里あり。本道とは違ひ、絶景にて名所多し。しかれども道は少し遠し。又森腰村氏宮は片輪姫宮とて、海より上り給ふ手なき御神躰といへり。又宇治村の氏神は天神の宮とて、天よりあまくだり給ひて、本地は觀音也。又引砂村の氏神は松森の宮とて、山より出現ありし也、本地虛空藏菩薩也。此三ヶ所の宮森は地より浮び出しとて、天神の宮を中にして左右間尺高さ廻り少しも不違、廻り田地にて平地也。不思議の宮森也。又伏見村に伏見川とてあり。源は山中村より流、湊は餘程水あり。又雲津村は南北へ一里指出る處にて、雲津端とて左右の浦を見渡し、向には越中立山など、二十里餘の海上ありといへども手のとゞく程に見え、絶景至極にて、名所記にもある雲津の里とは此所なり。古歌に。

雲津より須津めぐりする越船の沖漕ぎざかるほのぐ
にみゆ　　仲實朝臣

此雲津村、昔は此邊の津にて數千軒有し所也しに、或時猩々と云もの海よりあがり遊びしを殺せし其むくひにて、津波ありて人家のこらず退轉せし也。今の村は其時敎院、泰澄大師開基の大寺ありし門前に五六軒有しが、又々一村と成しといへり。其寺跡地名に寺の前・大門・塔の上・不動坂・阿彌陀ヶ池・上の六坊・下の六坊などゝてあり。今も礎等ありてうごかすことならず。穿てば忽祟りあり。氏宮白山宮は其時よりの社にて、昔は大社也。百姓に神主・鍵主などとてあり。此宮森は高き所の崎にあれば、諸方より見ゆる也。又木下とて古き百姓あり。數千年の者にて、藤原氏小林姓の由。利家公の繪像を傳へり。又は日本往生傳にある、鞍見の里唯信の母木下氏とは此家のこと也。

又蛸島境に鉢ヶ崎とてあり。不思議の塚也。是は泰澄大師の鉢の子を納し塚也。依て鉢ヶ崎といへり。又蛸島村は雲津より廿町あり、家數四百軒あり。近郷の獵場にて、四十物其外問屋あり。昔此沖に大なる蛸あり。船中又は近郷の人を取る。此山の山神と戰ひ、終に山神平げ給ふにより、今氏宮の山王權現是なり。其大蛸化して島となる。今辨財天の宮ありて、磯三四町にあり。依て蛸島の名あり。

黄昏に宿を求めんと。

夕霧やとゞもし火細き蜑が家

又正院へは十町餘あり。間に正院川尻川とてあり。稲荷山の要害とて城跡あり。城主温井兵庫とて、畠山の家臣にて、越後勢とたゝかひ落城ありし也。今氏神稲荷の社地になり、礎・石垣等そのまゝあり。其時の外堀のあとを、内の郷と云あり。又此村の内新保といふに、七郎右衛門とて古き百姓あり。持宮とて五町計山に日の宮と云あり。惣じて雲津より布浦までを長濱の浦とて、のこらず鹽濱にて風景言語に絶したる名所也。諸書にも出る所也。其上鹽多く出來ありて、大濱共いへり。

◎本村　寺家より一里六町、本馬四十九文、輕尻三十文、人足十五文、家數百五十軒計。散村になりて山中にあり。雲津より山中へ入て、正院よりの本道也。此村は、本村とは中比よりの名にて、近郷のもと村故名に呼べり。元は鞍見村といひし也。則日本往生傳と云佛書に、のとの國すゞの三崎鞍見の里出生唯信と云僧、山城の國醍醐の食花堂にて不思議の往生あり。父は親鸞宗、母は木下氏とあり。則此村の一向宗の光樂寺といふの子なり。能く畫けるによつて、大和の當麻のまんだらは、此唯信のゑがける寫しといへり。其時一緒に寫せしまんだら此光樂寺にありて、什寶として毎年兩度弘めあり。又此村を鞍見村といひて、元は三崎權現毎年三月・九月初丑の日より御神輿出座あり。濱傳ひ木郎の不動寺の山王の宮へ御幸あり。戻りは山手通り御歸座ある也。その御輿御泊りある所に假屋あり。道々玉居の祭とて、今も村々に餅などつきて祭れり。此村は終りなれば、鞍見の玉居で跡玉居と云諺あり。

◎正院　本村より卅四町、本馬四十九文、輕尻廿七文、人足十三文、家數百廿軒計。町作りたるよき村なり。此村は昔の要害の城下にて商家等あり。其上松前等に出店して、よき身上の者數多あり。氏宮八幡宮は、昔は猿樂などありにぎはしく、今も舞臺などあり。什寶に能の面あまたあり。昔は今の櫻井氏の神主の外に社人多く、神子塚などゝてあり。本住寺とて日蓮宗の大寺あり。此寺は要害の城の家臣出雲石見守屋敷跡にて、則開基日那也。千光寺とて禪宗あ

り。一向宗の大寺二坊あり。町端に舘の藥師とてあり。小路村つゞき也。羽黑の宮とて羽州羽黑山を移したるあり。又熊野谷村近し。敎西寺といふ御坊に、要害の城主の守本尊とて、親鸞上人の眞筆の名號あり。正月・七月の十五日に弘めあり。岩坂村近し。三俵刈とてよき百姓あり。鹿野村近し。恒方・友末などゝて百姓あり。中にも恒方は、利家公より御扶持頂戴あり。是等は越中阿尾の城主菊池伊豆守家來筋之由。氏神天滿宮は靈社にて、ちゞの宮といふ。鮒(ヒヾ)と云もの海中より詣るとて、鮒濱とて除てあり。併渡唐の云ひ誤りにや。御神躰は渡唐天神の由。又妙住寺とて日蓮宗あり。此寺の番神は、飯田の城山にありしを移したるといへり。夫木抄の歌に。

君が代のためしと見ゆる長濱に千種の貝の數も盡せじ

◎飯田　正院より廿四町、本馬卅一文、輕尻十九文、人足八文、家數三百軒計。二・七の日市あり。不殘商家繁昌也。御鹽代官一人・山廻り役一人在住。十村役篠田氏也。淨土宗大運寺とてあり。本尊丈六の阿彌陀如來也、作佛の由。最勝寺・淨光寺とて一向宗あり。昔は若山にありて眞言なりしとて、其節の什寶などあり。又明(アキラ)とて御印戴きある小刀鍛冶あり。城跡あり、しれず。今氏神春日の社地になりてあり。又飯田川とて、若山川ともいへり。源は南山村・伽藍村山より流て、二里餘にて飯田の下の町端にて海へ入る也。則長三十八間の橋あり。此川筋登れば若山の郷也。所々橋あり。此往來は八太郎越とて鈴屋へ出る也。若山の郷村々多し。

或日飯田の市に出て。

市の女のつんざきくらふわかめ哉

此山手に廣栗村と云に、定廣と云平氏の筋とてあり。隣村の鈴内村と云に定廣の宮と云あり。又日宮村と云に大王と云百姓あり。昌樹寺と云臨濟の禪宗あり。亦出田村と云に獺越坂と云あり。是は獺の越るを見て付し新道也。此村に惣六と云百姓、蓮如上人の書物多く持傳へり。經念村近し、古麻志比古神社立給ふ。近郷の宗社にて大社也。神主葛原氏也。十町計奥山に御鞍懸と云神木の櫻あり。大木にて花の比は見物也。又宗末村と云に藥水あり。湯に涌し用ふれば諸病を治する也。則行基御作の藥師如來あり。又大坊村に正福寺と云一向の大坊院あり、般若山と云。本尊春日の作の彌陀如來也。昔は天台宗にて種々の寶物あり。延武村に、延武と云利家公より御扶持頂戴せる山廻り役あり。其外此若山の郷は郷士ありて、今も國兼村の國兼・宗末・義古・國宗・清德などゝ云筋目あり。又向村に定祐とて百姓あり、禪宗なれども、古佛一向宗の寶物數多持傳へり。正月・七月十五日には兩度參詣多し。此村に桃木原ありて、花の比は見物也。又中村の願成寺は禪宗也。又上戸三ケとて、北方村・寺社村・南方村也。飯田より村つゞき也。此邊を大濱と云て鹽多く出來する地也。御鹽藏等多くあり。北方村中へながるゝ川を假屋川と云。此川の石、銀石と云て光あり。橋あり、假屋橋と云。橋爪に三崎權現の玉居の御假屋有し名也。此北方村に眞賴と云て、利家公より御扶持給はる山廻り役あり。又山手に御塚と云あり。黑嶺利家公御責の時、御家來打死の塚の由。黑嶺山の東平は此村の領也。白米坂などゝ云て面白き處あり。高照寺と云て密宗あり。昔は行基菩薩の開基にて、七堂伽藍の大寺也。今も作佛多し。門前の田の中に白比丘尼の鉤(ヒルゲ)の箸をさして生へしと云て、杉の大木あり。枝葉異なる木也。能登の一本杉と云り。又辛鮭の宮と云あり。三ケ村の宗社也。別當は卽高照寺、神主は水島氏也。此宮を辛鮭の宮と云ことは、昔此里人辛鮭を拾ひて、何と云ものにや名をしらず。幸に氏宮の神躰にせしに、このからざけさまゞ〳〵怪異をなして、後には人を取喰ふ。行基菩薩此怪異を退散ありて、（又泰澄大師ともいへり。）大穴持命を勸請ありて、今一宮大明神と云也。三輪の御神躰と御同躰なれば。

三輪ならで爰にもありや一本の杉の綠のしるしさかえて

又蟹寺とてあり。法成山永禪寺と云。此寺昔は敎院也しが、妖怪のために住持を取殺すこと度々也。依て住持する人なし。然る處貞和の比、同國永光寺螢山の弟子に月庵と云僧、行脚の折此寺に住みて、或夜客殿に座禪しておはせしに、丑滿の比震動して、眼日月の如くなるもの顯れ出る。禪師曰、問ことあり、汝如何なるものぞ。彼者云、小足八足大足二足右行左行眼天に有と云。禪師汝は蟹にありやとて、拂子を以て打給へば忽ち消て失にけり。夜明て里人來り見

れば、禪師の恙なきことふしぎに思ひ、事のやうすを尋みるに、後の山に深き池あり、其水の面に幾年ふることもしれぬ一丈餘りの蟹の、甲八つにやぶれ死して浮び居たり。その後妖怪なし。則月庵を中興開山とす。二世は天桂和尚、三世北海和尚の木像開山堂にあり。又蟹の住し池あと、後の山にあり。此月庵和尚は俗姓曾我氏にて、至ての美僧也と云り。今も曾我永禪寺と云。昔は大寺にて、其時の代官のすぢと云て、前家と云百姓あり。此寺の緣起に委くあり。

蟹寺のいはれをきくも今更に尙仰がるゝ法のちからは、案ずるに、孔子家語に曰、妖怪不レ勝二善政一、夢怪不レ勝二善行一とあり。怪を見て怪とせざれば怪なし、妖怪は不正の氣也、德ある人に勝ことあたはず。又是に似たる事勢州鈴鹿山の邊にもあり。蟹坂の蟹塚とてあり。是にも蟹化して人を取ことありしと云り。又說に盜人の異名をかにと云し也。はさみをあげて手足をはり横行する形也。もし此やうなる名よりつたへあやまれるにや。

亦此辛鮭宮・蟹寺等あるゆへに、此村を寺社村と云由。又南方村と云に、三盃の助兵衞と云百姓あり。先祖は山にて飯のもりたるを三盃拾ひしより云り。又夫より身上直りしといふ。上戸三盃助兵衞の文字をかしゝ。此村に柳田の神社と云あり。境内廣く古き宮の由云傳へり。神主櫻井氏也。又奥山に淸水と云所あり。昔は伽藍にて觀音の靈場ありて、其比は叅詣多くあり。今も中ノ茶屋・下ノ茶屋なごゝてあり。又奥山に日字（ニチ）の瀧と云あり、虹の瀧とも云へり。瀧壺へ礫打ば忽白虹立登る也。瀧壺深き也。此流を虹見川と云り、今誤て鼠川と云り。此川筋に佛躰石と云あり、名石なり。源は寶嶺の南平より流て、二里餘りながるゝ也。往來に十間の橋あり、竹中橋と云。昔は藪中にあり。今も橋爪に竹中と云百姓あり。橋の西に家のあるを冥加谷と云。此散村の一里半山の奥に石坂と云あり、家十軒餘あり。黑嶺の大手にて城戸と云あり。又家臣大場何某屋鋪跡と云あり。委くのこれり。亦往來に鳥越坂と云城跡あり、黑峰の取出成し由。峠のおりとに、谷崎橋とて長三十間の橋あり。此川を般若川と云り。まんが淵と云ておそろしき淵あり。川上に加護の瀧・般若の洞なごゝ云あり。是も黑峰の東平寺山奥山よりながれて大川也。惣の坊と云て弘法大師住玉ひし跡あり。惣じて此山中に日字の瀧・冥加谷・般若ノ洞・加護ノ瀧とてあるは、大師の御舊跡也。今も山中に護摩たき給ふ跡あり。又加護ノ宮と云て、大師白山權現を勸請の宮あり。今は石坂村の氏宮にて、大木茂りあり。又此般若川の緣を登れば吼木山へ行也。堂ヶ谷と云村あり。昔大師建立の地藏堂ありしゆゑ名とせり。此村過半一向宗にて、此地藏堂をこぼちて、本尊を杉の木のまたに立おきしに、その尊像次第にいつとなく木中へ入り給ひしより、今高屋と云處に地藏杉と云て大木あり。

◎鵜飼　飯田より上りの馬次也。三十三町あり。本馬四十四文、輕尻廿六文、人足十三文、家數百八十軒計あり。此村に昔は郡奉行在住ありて、其比は大獵場にて繁昌せし也。妙嚴寺とて東方の院家あり。珠洲一郡の一向宗の觸頭の錄所也。寺領十二石、西方寺村一村の支配也。昔は西方寺村にありて、丈六山西方寺と云て、天台宗にて三崎權現別當兼帶の寺なりしと云り。中比利家公、黑峰の城主阿部判官義宗御退治の時、雪中に及び此寺に御滯留あり。元朝に黑峰落城有し時、御褒美に子孫ある爲に一向宗に被成、改名ありて妙嚴寺と云り。依て利家公の御像、御代々の御位牌客殿にあり。其時は一郡の政務を御預けありしと云り。又什寶多し。利家公御歸依ありし摩利支天の尊像あり。其外はことしげゝれは略す。氏神住吉の宮、廣國新左衞門勅命にて勸請せし由。又鵜飼川と云あり、近鄕の大川也。往來に三十三間の橋あり。源は大町泥木村奥山よりながれて三里あり。此川に菜籠淵（サイラウノ）と云て、おそろしきふちあり。昔女菜籠を洗ふとて、誤て此淵へ落せしに、松波村の江の口の淵へ出しと云り。又此川の上に善野と云あり。弘法の臼の井と云て冷水あり。又大町村と云に、黑峰の家中の跡と云あり。又此川の湊の洲崎を月崎と云り。風景たぐひなき地也。又見付島と云て大きなる島あり。辨財天の社あり。三月十八日祭禮也。昔大同年中弘法大師御歸朝のとき、船中へ何くともなく法華經讀誦の聲聞ゆ。聲にしたがひこぎよせ給へば、今のみづき島につきぬ。實は舟の着島といふこと成べし。其時白山宮翁と顯れ、吼木の山上へ導き給ふと也。其時の道すぢと云て、田の中にあがりの小路とて道あり。其時の橋あとゝ云て、元橋と云あり。此橋爪に洗足の井と

て、今も靈水あり。大師足洗ひ給ふ水也。其外大師の舊跡在々所々にありて、筆にも盡しがたし。吼木山法住寺は則法住寺村にあり。或時大師、法華讀誦の聲に隨ひ此磯に舟をつけ給ふに、何國となく老翁一人來て曰、我住む山に櫻の古木ありて、夜々光り物ありて吼る聲ありと云。大師此翁にみちびかれて登り見給へば、法華讀誦の聲は此木の聲也。光物は大唐より投給ふ處の五鈷杵也。則此山をひらき寺御建立ありて、今の吼木山法住寺と號け給ふ。即此翁は白山妙理大權現にて、今東の山に大社あり。大師本朝に初て建立し給ふ密寺は爰也。此山次第に繁榮あつて、嵯峨天皇御勅願所となし給ひて、代々の帝の綸旨等あり。昔は七堂伽藍にして、境内に六十四坊棟をならべり。寺領千貫、山方一里御朱印あり。北陸道第一の靈地として、賴朝公よりも將軍の祈願所となり、ます〳〵榮え諸堂美を盡せしに、中比の兵亂の災にみな〳〵炎上す。今の講堂は賴朝公の再興の所なるが、やけのこれりと云り。本尊の靈佛の三尊は、不思議有てのこり給ふといへども、六十四坊はのこらず炎上す。御當家になり御再興あり。寺領三十俵一山御寄附ありと云へども、往古の百分一にして、漸く極樂寺と云一坊あり。然るといへ共、境内近里に大師の御舊跡はのこりありて、有がたき靈地也。中にも吼木の五鈷の櫻あり。大師の御影を移し像を刻み給ひし鏡の池あり。大師あかの谷水を毎朝汲給ふときの座具袈裟を懸給ふ松あり。衣鉢坂あり。彌勒堂・藥師堂・稻荷社・山王社・諏訪社等とて大師勸請の社あり。大師植給ふ下馬櫻、二ヶ所にあり。又渡唐の產千年草と云て、外に生ぜぬ草あり。料理にして不斷寺中食する也。高野の萬年草、此山の千年草と云て名物也。其外寶物靈佛多し。本尊大日・阿彌陀・釋迦の三尊は、善無畏三藏天竺傳來の佛也。大師此山開基以前より此所に待給ふ尊像にて、平生開帳ならず、七年の季に中りて開帳あり。奇瑞多き靈佛也。聖德太子作の地藏、行基作の不動尊、運慶の作の二王尊、其外作佛多し。中にも大師四十二歳の御姿をきざみ給ふ尊像、同吼木の櫻を以彫給ふ法華經の板二枚、みだの六字の名號、又舟後光の名號の板木等、大唐より投給ふ五鈷杵あり。是は我が法成就の地に留るべしとて、獨鈷・三鈷・五鈷の三つをなげ給へば、三鈷は高野山の松に留り、獨鈷は佐渡の小比叡山にとまり、五鈷は當山の櫻に留れり。大師自畫自讚の一軸、代々綸旨・院宣、花園院勅命を以山境を極め給ふ綸旨あり。勅使藤原宗信とあり。其外賴朝公の寄附狀等、其外數多あり。又利家公より奥二郡の知識米之御書あり。

彌生の比山上せしに、下馬櫻の山深く老木なるに。

むづかしとかつ咲花の老木哉

又金峰寺村は鵜飼より村つゞき也。豐安山金峰寺と云禪宗也。開山曾我の月庵和尚也。寺領二十俵也。利家公御發向の時、唐竹の名物にて御簇竿を御用に立しことあり。今も唐竹の大藪あり。今に金峰寺竹とて名物也。又畠山類家松波氏歸依の藥師尊像あり。御佛田料月崎七十五束苅田地拜領あり。亦廣國村近し。加志波良比古神社立給ふ。其所を小名に柏原と云なり。昔は大社也。珠洲郡式内の三社の其一社也。其別當跡と云て庵の藥師と云あり。吼木山の下寺なりしと云り。此村を廣國と云は、日野新左衛門尉廣國と云し人住し故の由也。是父は日野廣蔭と云て公卿の人、後は改名して知德廣蔭と云て、京都より兵亂を遁れて此所に來り卒去せしと云り。此後室長生して尼になり、八十四歳にて入定ありし塚あり。法華經を一生書寫ありし經塚なごあり。其廣國の子孫中比十村役となり。飯田へ引越し、七郎右衛門と云。裁許のことに付遠島あり。其子玄順と云て、醫師に成て近比まで存命ありし也。此家代々幼名に熊の字を以付し由。日野阿新丸の子孫にや、今委きことしれず。惣じて此廣國散村の名に、助政・是國抔と此邊にあり。いづれも此筋目を云由。助政は太田氏の由、又鳥越村近し。六左衛門と云山廻役あり。同村に朽ヶ平の六兵衛とて古き者あり。朽ヶ平六兵衛・堂ヶ谷次郎兵衛・鵜島三右衛門と云三人の者一枚に、七石五斗の利家公の御墨付戴きあり。又是より鵜飼川緣の邊りに往來あり、谷野・泥木といふをへて、町野鄕へ出る道あり。泥木越と云。

たばこ火をからんと立よれば。

軒の妻に人待顏の櫻かな

又みごりの城と云て廓跡あり。法住寺村の領にて鵜飼村の邊也。吼木山衆徒の取出の由。鎌倉實記などに木曾の弟に吼木山衆徒あり、其律師の居城とも云り。邊に三つ寺と云

て、今墓原になる寺跡あり。吼木山坊三ヶ寺ありといへり。妙金の宮と云て山王宮あり。是は今も吼木山支配也。又鵜島村の境の山の尾に、松波常陸介歸依ありし藥師あり。其頃は藥師寺と云て坊ありし也。今地名のみのこれり。本尊は金峰寺に安置あり。亦鵜島三ヶと云て、浦傳ひあり。黑丸村・鵜島村・宗玄村也。下りには松波村より此三ヶにて馬次也。松波より鵜島まで廿四町、本馬三十一文、輕尻十九文、人足九文也。鵜島三ヶにて家三百軒餘あり。村の長さ廿町餘あり。此邊より三崎までを長濱の浦と云て、鹽多くやく所也。風景類ひなし。萬葉の歌に。

すゞの海に朝びらきして漕くれば長濱のうらに月照りにけり

黑丸村、氏神は八幡宮也。社地廣し。境内に古塚あり。是は此村に横濱三右衛門と云て、此邊の鄕士の筋目の者あり。姓は源家にて多田藏人と云しとて、此近邊を多田の鄕と云由。氏神は正八幡宮を勸請せし此者先祖の夫婦の塚といへり。此者の方にて、鎌倉の最明寺時賴入道年を取給へり。其時給はりしと云て、俊成卿の千載集其外扇子など持傳へり。また中比内並(ウチナミ)五左衛門といふ鄕士ありしとて舘跡あり。その筋目のもの八人百姓にあり。舘の邊に若王子宮あり。近比まで内並寺と云寺ありし由。又黑丸市兵衛と云大百姓あり。昔は山廻り役勤て、古き百姓也。此者故有て黑丸の名あり。類家に黑丸藤兵衛と云て大百姓あり。又川尻川と云あり、長十二間の橋あり。此川上に大瀧と云たきあり、此所の不動尊靈驗あり。此瀧壺深きこと限りなし。其上諸木茂り物すごき處也。近鄕の雨乞は此瀧にてする也。古は大木茂りて流も水かさあり。往來舟橋ありて、今も舟橋川と云り。又鵜島村は中にあり。酒屋與三兵衛と云て古き百姓あり。此者の先祖は、弘法大師の御宿まゐらせしもの也。其比此者の家度々火災ありしことを聞給ひ、大師是をはりおくべしとて。

しも柱氷の梁に雪の桁さす樌までも水梓かな

其後は火災なし。其時の座敷の床柱と云て殘りありて、今諸人に削り與ふる也。諸病を遁るゝとなり。又宗玄村に、則宗玄忠左衛門と云古き百姓あり。此者故ありて宗玄の名あり。此村の氏神は乙劍大明神也。安養寺と云別當あり。

昔は大社成し由。又安養寺は今金峰寺の境内にあり。毎年三月十五日に三ヶ村祭禮にて、黑島村八幡宮へ鵜島村稻荷・宗玄村乙劍御幸あり。立物山なごひき、にぎはしき也。又宗玄村端に伐り通と云て、岩山を切拔て往來する也。昔遙の山を越て往來せしを、御郡奉行に黑川五左衛門と云人此所を切拔、往來安くなりしと也。

是までは直鄕也。是を境として木郎鄕戀路村也。

此切通しを廻るとき、風と吉野川岩切通し行水の音にはたてし戀はしぬともと云古歌を思ひ出して。

すさまじきいつの戀路や切通し

誠に此戀路村は、名にめでゝ風景たぐひなし。沖に辨財天の小島あり。菱男波と云て、磯に菱形に波寄する也。又左右の岩根の鹽竈の躰、言語にも絶したる所也。其上此戀路村に物語りあり。いつの比にや多田の里に女あり。茂九郎の里に男ありて夜々行通ひける。その比は道もけはしければ磯傳ひに淺き瀨をたごりけるに、月なき夜には女岩の端にかゞり火をたきて待。又外に男ありて此女を戀ふと云ども不叶ば恨て、或夜女をいましめ、かゞり火の所をかへてたく。男此事を露しらずして渡りしに、磯の深みへ沈みて死せし也。女此事をきゝ、續いてあへなく身をなげて死しぬ。夫より戀路の村の名ありといへり。

寄(マヽ)せみてりいまによごまぬ菱男波つらき戀路の名こそ流るれ

此所に觀音坂と云て峠あり。麓に觀音堂あり。是は此男女の爲に建し尊像と云り。是より松波村へ十五町あり。山道にて海上を見渡し面白き所也。半途に盲人落しと云て、おそろしき崖あり。又畠中より山手へ入ば松波散村の局(ツボヂ)と云所へ出る也。昔松波家の家臣局左衛門と云人の屋敷跡にて、其筋目と云て百姓あり。又穴釜とて瀧あり。往古穴釜と云て富貴の者ありて、此瀧壺より酒の出しことありといへり。今も此瀧壺に色々ふしぎありといへり。亦是より松波へ出るには、往還にて城山へ出る也。亦城山つゞきに大きなる宮森あり。笠主宮とて上村と云の氏神也。此宮の脇に笠主と云百姓あり。此者の先祖畑に出ありしに、御神躰天より此者の笠の上に下り給ひて、告て宣く、我を此所の氏神に祭るべしとありて、則此所に勸請する也。本地金像

の藥師如來の小佛也。其日祭禮にて三月廿二日也。此村に光明院と云よき密寺あり。和漢三才圖會に、光明院は能登の谷村にありとは、外に光明院なし、書誤りにや。又松波川あり。此源は馬渡村・合鹿村の奥山より流て、松波の海へ入也。川筋に江の口の淵とて深きあり。此川緣を登りて町野へ出る往來あり。松波村の入口に長八間の八子橋あり。惣じて此松波より三崎まで十里の間を長濱の浦とて、布浦・高麗の端より雲津の鉢崎と云まで村々一目に見ゆる也。秀景定に名所なり。八景あり。

椎泊夜雨

春雨のいつか晴なん長濱の浦の笘屋の旅寢こそうき

松波秋月

殘りなき秋の夜長き長濱の浦澄渡る月のさやけさ

鵜島晴嵐

晴れて行嵐に殘る鹽竈の煙たなびく長濱のうら

吼木晩鐘

なせる罪の果しなき身の長濱に夕暮告る山寺の鐘

黑峰暮雪

長濱に打出みれば名にも似ぬ黑峰山の雪の夕暮

飯田夕照

しなてるや春の日長き長濱に長橋渡る往來久しき

蛸島歸帆

帆に連て家路へもどる釣舟の急ぐ心の長濱の浦

雲津落雁

雲井より雲津に落つる雁金の行衛浪立つ長濱の浦

◎松波　鵜飼より一里十六町上りの馬次也。本馬五十八文、輕尻四十一文、人足廿文、家數三百軒餘あり。此鄕の大村にて昔の城下なり。此村は松波常陸介と云て、畠山類葉の領地、六萬石の城下なりし也。天正の比謙信勢の爲に落城せり。城山は北の川向の松山也、風景の地也。此筋目と云て福壽院と云百姓あり。亦積寶山萬福寺と云禪宗あり。大寺にて則常陸介位牌木像あり。其比菩提所の時は地方三百石寺領ありし也。亦松岡寺と云西方一向の院家あり。蓮如の三男蓮綱の開基にて、昔は加州波佐谷と云にありし由。今も地方七石五斗寺領あり。此寺の太鼓の筒は豆がらの木にて、一撥二聲にひゞく由。是は吼木山の什寶にて、内に

空海作と書て判形あり。兵亂の時此磯によりしと云り。神護寺と云て眞言宗あり。此氏神神明宮の別當也。本尊華嚴の釋迦如來、聖德太子の作也。又氏神八幡宮、神主は立花氏にて、七十ヶ村の神主也。十村役あり、恒方と云て鹿野村より引越ありしに、近年退轉せり。御收納藏二筋あり。千路太郎右衛門と云て、元十村役の筋目あり。又本道は木郎越にて不動寺村へ行也。又灘廻りと云て此磯傳ひに村々多し。所々に名所あり。又松波村より秋吉村と云に行に、たびの木坂と云てあり。甲斐の信玄前生に建立ありしと云て、石躰の地藏あり。色々奇瑞あり。松波より灘廻り間道なれども、小木の九十九潟とて見物あるべきなれば、委く道程をしるす也。松波より布浦へ十四町、本馬十九文也。六ヶ所へ別れてある村也。椎泊と云て、さし出たる閑靜の地にて船の懸り間あり、又比那と云に佛穴と云洞あり。南向にて磯に松嶋・高麗島と云て風景いはんかたなし。閑靜にして奥州松島の景に等しきと云て、奥州松島の見佛上人來り給ひて、三年まで此洞に住給ひて、其歌に。

三年までおり重ねつる布浦をけふ立そめていつかきて

見ん

見佛上人

西行撰集に、西行此上人に逢給へるは、能登國いなやつの郡、洞は南向とあり。能登の國にいなやつの郡なし。案ずるに須津郡と書けり、いなやつの訓あるやいかゞ。又此洞の邊に、盜人穴と云て大なる洞あり。眞脇三と云盜人住し故、眞脇三とも云り。佛穴の隣に盜人穴、善惡の二つをかし。又卿の釜と云てあり。沖に義經の食物煮給へる釜と云てあり。依て卿の釜と云。月の輪と云て風景あり。又坊の釜と云もあり。藥師堂あり。昔は松波常陸介祈願所にて、醫王山藥師寺と云て密宗也。今は小庵也。本尊藥師如來は、見佛上人佛穴にのこし置給ふ靈像にて、御長一尺の閻浮檀金の三枝の蓮花藥師、左は日光佛、右は月光佛立給へり。靈驗奇特多き尊像也。緣起に色々奇特の事を載す。松波家守本尊にてありしを、此處に安置せし也。大寺なりしに松波落城後中絶ありしを、又靈驗あらたなるにより再興して、藥師寺と云て木郎八ヶ寺の其一寺となれり。能登國十二藥師の其隨一也。わきに夢想の藥水あり。又松波より布浦へ行に、毘沙門塚と云あり。是は穴釜長者と云者、此神に祈

りて福德ありしより繁昌せしなり。多門天の社跡也。布浦より九里川尻村へ十八町、本馬廿八文。此川尻川は木郎川と云て、谷深く、湊まで三里あり。時長村山より流、川緣村々あり。秋吉村に、清水寺と云に觀音の靈像あり、眞言宗也。又川尻村、此川尻にある村也。惣じて此邊は入海にして物淋しゝ。隣村へ行にも淺瀨を涉りなごして閑靜言んかたなき處也。川尻より立壁村へ二十町、本馬廿六文也。

長途の旅にくるしくも、さびしき宿に行末を思ひやりて。

秋風やあはれの上のたびのくれ

川尻より立壁の小坪と云所へ舟にて渡れば近し。四方山村は村つゞき也。御收納藏あり。白丸村へ九町あり、本馬十二文也。をかたと云て古き百姓あり。又氏神を尻高宮と云也。此邊にて尻高と云貝の大なるが、每歲八月朔日祭禮にあがるなり、神前に備ふる也。白丸より長尾村へ十一町あり。本馬十五文、長尾より新保村へ十四町、本馬十八文。新保より越坂村へ十五町、本馬廿二文。今は新道ありて十町あり。瀨越より一ノ瀨村へ十五町、本馬二十二文。此一ノ瀨村は九十九潟の果にあり。また上市ノ瀨ゟ十町餘山にあり。又吹上と云て越坂の散村あり。山上にありて九十九潟を見おろし、風景たぐひなし。此所昔は天德寺と云て大寺ありて、今も六千坊・經塚・開山塚・天德寺などゝて地名あり。其比弘法大師、此處にて鉢の箸をさし給へるが榮えて、今榧の大木二本あり。實大にて左卷にて名物なり、御上へ上る也。亦此山つゞきに峠と云處あり。宇出津・小木・眞脇・一ノ瀨への追分の四辻なり。山中にある峠なり。熊野權現の大なる宮森あり。是は一ノ瀨村の氏宮也。昔この處に行基菩薩の開基の大寺あり。七堂伽藍にして、行基山新善光寺と云し由。天正の頃兵火の爲に退轉す。今も石垣・礎等其儘あり。兵亂に鐘を入し池ゟて鐘池と云有、今も水底にあり。今寺號・本尊は眞脇村にあり。其外同村長願寺本尊、時長村願成寺竹布の十二天の繪像、滿泉寺の十二藥師も、皆此寺の什物なりしと云り。其比は近鄕寺領して、上日寺の仁王尊も近き比まで此峠にありしと云り。此所の熊野權現は鎭守也しと云り。又九十九人と云て日本無双の入海あり、九十九潟（クツモガタ）と云り。風景日本の三景にもひとしき處也。是は小木・一ノ瀨・越坂三ヶ處の領境の入海にて、入口九十九ヶ處

あり。深さ百五十尋餘あり、廻り三里餘あり。中に鶴下嶋（フリ）とてあり、形は蓬萊の臺のごとし。腰折の松と云て名木あり、肉桂の木數多あり、辨財天の社あり。島の東に丸き蓋のやうなる所あり、元朝に開と云り。誠に風景仙境共云つべし。

問ねぎも其名もしるき友鶴のをり居て遊ぶ千代の浮島

九十九入の名あり。城ノ下・舘ノ入・椎ノ木・道ノ下・尾伏・堂船・濱ノ下・あけば・濱ノ入・田ノ下・春日ノ入・藪ノ下・坂口・びしやこ・入濱・たびの木・山椒のくり・松ノ下・宇那・名古羅・網のせ・一ノ瀨・岩根・狸ノ端・小谷內・田きれ・嶋ノ戸・かけ竿・長戸・淺ノ浦・夕日・兀山・鶴ノ端・笠ノ浦・二ノ瀨・兀浦・三ノ入・かつき・葭ノ間・迫戸・朝日・吹上入・峰草落し・一つくり・松山ノ入・川口・尾上・大石・大谷內・石山・たれはせ・島の腰・島ノ入・渡し・嶺瀨・戸波・長手・二ッ釜・芦ノ間・岩越・岩腰・奥ノ瀨・三ノ瀨・一枚田・やき山・釜中・船かくし・小入・猿手・灘ごめき・沖ごめき・横引・出口・穴口・洲崎・草刈・島立・瀨良・小はま・三ッ穴・中ノ入・舟見・かんどろ・二のくり・うを住・釜ノ入・瀧口・おせ川・彦ノ入・畠ノ入・畠ノ腰・七曲・腰折・前谷・折・すかも・波なし・小釜中・琵琶首・中ノ松、〆九十九入の名如此。開口三町餘あり。下の間口、越坂村の城ノ端ゟて、城跡にて穴藏等あり。庄七ノ宮と云て宮森あり。城主太田氏の由。上の間口は、小木の日和山ゟて景色也。七ヶ國みゆる。小木の間に船待するもの遊山する處也。越坂より此間口を舟にて渡せば十町あり。舟賃一人十二文。また一ノ瀨より小木村へは十四町あり、本馬十九文。小木村は御領分一の潤にて繁昌也。本町・新町・庄崎と云て、別れて家居あり。船本と云て古き者あり。山城屋などゝ云て舟問屋あり。勝光と云て刀鍛冶の筋あり。小木鱈と云て名物なり。切漬を御上へ上る也。法融寺と云て一向の大寺あり。此寺昔は貝田と云て、潤の出崎の岡山に在し也。此處に古塚あり。是は此寺の姥ありて死せしが、牛と成し者の塚といへり。又氏神三船權現は上野にあり、よき社也。近年此宮普請するとき古通用の牛の舌と云金子を掘出したることあり。此所昔寺地にて、坊の上・坊の池抔と云てあり。昔の社地は三船と云て、風景の磯山あり。沖よりは大船の如くに見ゆる山にて、三船山の端と云て海に出る崎にあり。誠に船形の松山也、佳景至極也。一山踏所鳴て、下は窕（ウツロ）也。艫と思ふ所に穴あり。

旅の修行者此穴へ入りしに、内は宮殿樓閣ありしと云り。誠に仙境の由。亦佐渡國にも小木と云に三船山あり。三船權現あり、御神躰猿田彦命にて御同躰也。今の小木は古寺の跡にて、大木ありし故おほ木と云し由。所口龍門寺此所にあり、槻木一本にて建しと云り。其比此小木は細木村と云て、三船山の腰今岩本と云處にありし也。今の處へ移し、三船權現も移し奉れり。

此ころや三船の山にたつ鹿の聲帆にあけて鳴渡りけり

西行法師

又眞脇村の散村に姫と云處あり。此磯の岩に陰門の形あるにより姫の名ある由。三船山に對して笏島（タシトロ）・碇島と云あり。秀景にして、碇島は辨財天の社あり。又小木より眞脇村へ廿七町あり、本馬卅六文。此村は六分は公領也、四分は御私領也。家居百七十軒計あり、入交りてあり。國中第一の大獵場なり。公領庄屋七右衛門と云、井田氏也。氏神高座權現也。神主高原氏也。鷹王山上日寺と云密寺あり。此寺昔百合若丸と云人の寵愛ありし鷹海中にて死しに、此磯に寄り其菩提の爲に建し寺也と云り、本尊千手觀音は春日の作にて靈像也。七ヶ年目あてに開帳あり。其時は鷹來りて棟を不去と云り。昔其鷹の骸寄し處を經塚と云て、碇島の邊りあり。此寺の仁王尊は行基の作にて、峠の古寺にありしと也。又新善光寺と云て淨土宗あり。本尊は信州善光寺前立同木同作の尊像也。臼の臺座より二尺の御長也。厨子に負子（レンジャク）付てそのまゝあり。正月十六日・七月十六日開帳あり。此本尊は昔公卿の姫君に少將姫と云る人、尼となり、負ひ奉り廻國ありしに、謂ありて此山中に庵をむすび住給ひしに、程なく繁榮して行基山新善光寺と云り。然るに此寺天正の比兵亂に退轉ありて、本尊を今爰に移し奉りて新善光寺と又號す由。靈驗あらたにて、近年此村出火有りて、此寺も燒失せしに、此本尊飛去給ひし處と云て寺山と云由。又長願寺と云一向宗あり。此本尊彌陀佛は行基の作、是も峠の古寺の本尊の由。又大澤村と云てあり。近年里人に告ありて掘出せし地藏尊あり。又眞脇より小浦村へ十三町あり。磯に義經の烏帽子岩と云てあり。又同鼓岩と云てあり、何れにも當國には義經の舊跡所々にあり。所に云るゆゑ記す也。氏宮は八王子の宮と云てよき社也、御神躰阿彌陀如

來の木像の由。又岡山に崎山と云てあり。開き地にてよき田地あり。百姓彦兵衛と云てあり、此者の先祖開きし也。

片里にはからずも年を迎へて。

居並んだ顔もあらたにけさの春

眞脇より羽根村へ廿六町、本馬三十四文。氏神八幡宮はよき社也。昔は大獵場にてはんじやうの地也。御鹽藏・唐竹の藪等あり。源三ヶ堤とて、山奥に大なる池あり。又十町計り山中に、日ノ御殿とて社あり。昔は不動寺の山王權現此宮へ御幸ありし御旅所也。宮森廣く、梅櫻の名木あり。又磯にほゞ打洞とて奥深き洞へ浪打入所あり。又高の山にもほゞ打洞とてあり、奥しれず、外浦へ通じたる由。脇に笠懸の榎木と云あり、古木なり。又磯邊に遊明寺と云て古寺の跡あり。磯に風景の小島あり。稲荷社あり、黑瀧與一郎の守神といへり。此遊明寺は宇出津の常椿寺也といへり。又羽根の地藏堂とて小庵あり。本尊海中よりあがり玉ふ靈像にて石佛三躰安置あり。靈驗あり。又田の浦とて開處あり。是は宇出津の領にて橋本屋といふものゝ田地也。又此邊山手に宇出津村は元ありし也。棚木の城の北也。此棚木城は長家黑瀧與一城跡也。天正年中落城せり。今に井戸・堀・石垣等其儘あり。此城山の北平の腰に、船隱しと云て不思議なる處ありて、何艘舟ありても外より見ゆることなし。又切通しと云て、山を切通し船の通ふ處あり。惣じて此城山面白き風景處々にあり。大に境内廣し。羽根より宇出津まで廿六町、本馬卅四文也。

此灘に船待することあり。比しも彌生のはじめ、小止もやらぬ春雨の降さへあるに、あさまなる宿に、言とふものとては汲茶さし出す下女のありさま、黑き脛のみゆるは更也、をかしき所まであらはせば、布の二重は陸奥の狹布の里にはあらねど、そちの前があはねばこちのむねもあはず。外面には芦間をあざる濡鷺のやうに、船人の笘に面出し、けふも晴ず明日もながぬと呼びかふ聲も悲しく、ねてもさめても唯寂寥なるを愁ひて。

春雨やなくほゝけふも淋しけれ

又松波村より不動寺村に行に、宮犬村と云てあり。彌勒院と云て密寺あり。常陸介祈願所にて、鎧等今にあり。

◎不動寺　松波より一里三町、本馬五十二文、輕尻卅二文、

人足十六文、上り馬次也。家數四十軒計、あさまなる村也。木郎越とて松波よりの本道也。此村に醫王山不動寺と云て密寺あり。光仁天皇第四の皇子智德上人の開基、其比は天台宗にて七堂伽藍、木郎一鄉寺領ありて、高倉院勅願所にして、數度の勅使綸旨・院宣等ありて、坂本山王廿一社を移して、本尊藥師如來は行基菩薩の作、一刀三禮の佛也。三崎權現毎年御幸あり、繁榮なりし御寺成しと、其比は衆徒多く、今木郎七ヶ寺は末寺にして、皆醫王山と號す也。山王廿一社は三ヶ所に勸請あり。不動寺村松尾の宮に七社、秋吉村瀨爪の社に七社、行延村柿尾の社に七社、毎年三月中の申の日は、木郎村三十一ヶ村神輿玉居の御幸あり。拾芥抄の下卷諸寺の部に曰。石動寺は能登國にあり。智德上人光仁天皇御宇草創、高倉院の御宇勅使參議藤原宗通と有。石の字の書誤りにして、則此寺のこと也。智德上人開基を以、今も俗に相子の若の御寺なゞいへり。山王權現疱瘡除の守りあり、靈驗あり。中比衆徒一揆ありて中絶せり。其後弘法大師住給ひて密宗となし、諸堂再興漸く繁榮の地となりし、又天正の比兵火の爲炎上して、多くの坊舍・什寶・緣起も度々の兵亂になくなり、今は昔の百分の一にもなきこと也。今其時の舊跡殘れり、脇坊・平野坊・寶藏坊・昌龍坊・上蓮寺・延次・行延・時長・國重・淸眞・顯吉・吉延・延吉なゞゝ云て、一揆衆徒・與力の筋目地名抔に殘りあり。脊繼（セツギ）と云城跡あり、其城主の筋目と云て五郎左衛門と云百姓あり。衆徒多ある處を山伏山と云て、今も不思議ある山あり。蝙蝠の谷内と云に、人隱しの洞とてあり。吹屋の谷内に行基の作の地藏石佛あり。其外處々に舊跡のこれあり。亦滿泉寺村近し。滿泉寺と云て眞言宗あり。瘤池（イボ）と云あり。弘法大師の誓ひにて、此水にてあらへばいほ落る也。此寺の本尊藥師如來は、行基菩薩の作にて靈像也。又此木郎越往來に、弘法の井と云て時長村・行延村に一ヶ所充、冷水也。昔は十町餘の谷水を汲運びしを、大師悲しみ與へ給ふ水といへり。

此弘法の井にて。

渴仰の乾きを覺ます淸水哉

◎山中　不動寺より廿六町、本馬卅四文、輕尻廿文、人足拾文也。上り馬次也。家數三十軒計あり、あさまなる村也。

惣じて此木郎越は四里廿町餘あり。山中にして上り下りと四ヶ村にて驛馬勤る也。下は宇出津より時長村にて、馬次所は十八束と云り、一里一町、本馬五十二文、輕尻廿六文、人足十六文。時長より行延村へ卅三町、本馬四十一文、輕尻廿六文、人足十三文。行延より松波へ一里八町、本馬五十八文、輕尻卅九文、人足十九文也。此四ヶ村あさまなる所にて、人足等もつかへて時刻移るなり。荷物等あらば先觸を出すべし。行延村に古塚あり、鄉士の塚と云り、又時長村に願成寺と云て密寺あり。本尊藥師如來、元は堂ヶ平と云にありて、いろ〳〵ふしぎありて此寺へ移し奉ると云。此厨子に龍彫てあり。夜々飛行する故、今大釘二本打込てあり。此寺に竹布の十二天の尊像の什寶あり。又此村に藤四郎と云て、御領分傳馬御免の御印物持し者あり。鷹舟・馬舟相改可申とあり。又榮孫と云て百姓あり。宇出津へ代には下の長坂とて三十町の坂あり。

夜深きに此峠通りし。

暮るも山明るも山よかんこ鳥

長坂の上の地藏より直道あり。右へ行ば行延村・柿尾坂上へ出、松波の間道なり。左へ行ば田原へ出、町野へ出る也。

◎宇出津　山中より一里十二町、本馬六十八文、輕尻四十一文、人足廿文也。此宇出津は本町・新町・新村つゞきありて、其支配違へ共みな宇出津と云り。三町にて家數四百軒餘あり。昔は元宇出津とて地名になりて田の浦邊に有し也。今の宇出津の地は、天呑城と棚木城の間に杉木原にて有しを、兩城落し後、間緣にて便よき所なれば今の地へ移りしと也。次第に繁昌して國中一の四十物所にて、毎年春鯨なゞ取り大獵至極の地也。其外諸商人あり。間には數百艘不絶。問屋の座敷には數百の旅人不絶。不斷に市をなし、夏冬共ににぎはしきこと國府にも增れり。一國山奉行兩人在住、御塩方代官一人、奉行付足輕六人、同山廻り役一人、銀見一人、三ヶ所にて肝煎四人、十村役一人、御收納數戸前、御武具土藏あり。禪宗二ヶ寺、淨土宗一ヶ寺、日蓮宗一ヶ寺、一向宗二ヶ寺。船問屋等多き中に、堂後と云て船問屋あり。是は天呑城主三宅小三郎子孫にて、天呑明神堂の後にありしゆゑ名に呼也。西ヶ谷内と云紺屋は、宇加塚

村にありて、寺代官の筋目也。氏宮は棚木白山宮、神主棚木氏也。一社は酒垂宮松尾大明神にて、町の南の岡にあり。神主加藤氏也。此御神躰は、昔酒樽に乘給ひて此磯に寄給ふより、酒垂大明神と云由。兩社祭は三月十八日、町中立物山をひきにぎはしき也。八月十日・十一日は棚木宮にて、氏子歌舞伎をして、近郷より商人集り賑しきこと也。又天呑宮と云て、南の町家の後に小山ありて、社あり。三宅の城内にありしを此所へ移し奉れり。今に不思議の瑞驗多し。三月三日祭禮なり。三宅小三郎は畠山の家臣にして、城跡南の間口にあり。今畑に成てあり。天正年中に落城す。位牌等は禪宗常椿寺にあり。黒瀧與一は長家の類葉にして城跡は東の間口にあり。これも天正年中落城ある也。位牌等は禪宗海前寺にあり。此寺は元棚木の城中にありて、東丘寺と云し也。又元觀音寺とて、町野へ行往來の谷内にあり。今は寺なく、觀音塚と云也。昔は海鹿の觀音と云て、此谷内へ入海し、入鹿多集り大獵せし也。今地名に海鹿田・蟹田などゝ云てあり。此觀音は行基菩薩の作にて、中居へ盜み行し故、中居に海鹿多く取るといへり。今は六月七日祇園會の御旅所也。兩城山つゞき風景也。中にもえぴすの端にて蛭子御神社あり。此邊わけて風景也。又上町野・柳田村等へ行に、上の長坂と云を登り、本郷村へ一里九町あり。石井村へ一里十町、又本郷村より久田へ卅三町あり。是は外浦の部上卷に記置。

まだらなる雪の道をたどりて。
松風のおとあらはれて雪の山
旅心にて師走市にたちて。
年の瀬に我友もある生海鼠哉

又宇出津より輪島へ當目越するは、曾又村へ一里卅四町、曾又より當目村へ一里十七町、當目より輪島へ三里十五町あり。此往來村々あり。宇出津より一里に宇加塚村あり。昔天台宗の大寺ありて、此郷を寺領せしと云て舊跡あり。常蓮坊・大藏坊などゝて七坊の跡あり。經塚・錢塚・鎭守の跡・宇賀塚・比丘寺・公家の谷内等の名も皆其舊跡といへり。氏神白山宮、御神躰は行基の作千手觀音の由。其時の寺號と云て、大乘寺と云て淨土宗の小庵あり。よき村也。其比寺百姓の筋目は、多く宇出津へ出てありしといへり。寺分村

近し。此所は此寺の百姓成し名也、又神和住村近し。城跡あり。

山里の旅寢に凌岱法師の片歌とやらを思ひて我もかく。

あはれげに猿ゝ鳴なる更行霜夜

又宇出津より波並へ行には、間に藤波村あり。一里の間に所々へ別れてある村也。眞島と云風景なるに、八王子の社あり。灘濱と云に大宮權現あり。祭禮毎年三月二日也。御幸あり。此日を藤波の樽祭と云。百姓分一樽・表百姓一樽・天窓振一樽神前に備ふ。神主祈念濟と、其三つの樽を我先人先と爭ひ、村中を振歩行也。其後は酒一滴もなくなりて、みな〳〵外なる酒買來て盛に酌みあそぶとなり。是を藤波の樽祭と云也。此兩社の御神躰は山入にありし古寺の兵亂の時沒落せしが、此磯に寄給ひし御神といへり。又十七・八町山に神目伊豆比古神社あり、今幽なる小社也。宮森廣し。神目の宮と云。境内に八重櫻の名木あり、花の比は見物なり。小又ヶ谷内と云也。昔は藤の名所にて、谷川へ花の多く流れしにより藤波の名あり。武左衛門と云山廻り役の古き百姓あり。此諸橋の郷に神目伊豆比古神社と額打つ所三ヶ所あり、いかゞ。

眞島の宮森の松が枝にかゝれる藤の花の盛なるに、往來の尼の栞の一句有けるを見れば。

藤の花ゆかりもなくて墨衣
かくありしをゆうにやさしくて。
いかならん花のゆかりぞ藤の門

◎波並　宇出津より一里三町、本馬五十一文、輕尻三十一文、人足十五文、家數六十軒計、獵所にてよき村也。此村に後藤・飯森などゝて古き百姓あり。又次郎兵衛と云者の方に、日の丸の旗・瀧川の鞁とてあり。謂いかなるやしれず。又唐傳とて骨つぎの名藥あり、獵の傳へし方と云へり。妙榮寺と云日蓮宗のよき寺あり。是は飯森彌左衛門と云し人の開基の寺の由。德性寺と云禪宗あり。慶專寺と云一向宗あり、蓮如の寶物あり。毎年三月廿五日にひろめあり。此谷内より輪島等へ行く道あり。又矢波村浦傳也、往來にて十町餘あり。寺田橋とて長十二間あり。わきに廣福寺と云禪宗あり。村端に螺穴とて不思議なる洞あり。氏宮山王は村中にありて、龜形の山にて風景也。此往來にさいの川原と

て、子共の多く泣く聲夜々する所あり。地藏堂ありて小石多く積てあり。又七海村境に、達磨山とて此海中より上り給ふとてあり。又矢波の散村に、山手一里計に猪の平と云あり。此村に音無川と云に藥水ながれて、此水汲て沸し用ふれば、浮腫の病治すること奇妙也。則行基菩薩の作の觀音あり、靈驗あらたなり、又七海村は往來浦傳ひ也。久作と云てよき百姓あり。青尾林と云て大なる御林の松山あり。則散村に青尾と云あり。此所先年、外は快晴なるに民家一兩軒津波打て壞したり。不思議のこと也。此者共佞けたる心立ゆゑ天のとがめと云あへり。

案ずるに津波と云は入海にありといへども、此能登國は往古よりなし。かゝることはありても、神の祟りにて其處少し也。潮の滿干によるにや。汐のさしひきは人の呼吸にて、盤古氏の息なりとあり。水は陰精にして月の出入に應ずる也。北海は陰滿て潮の干滿薄し。南海は陽滿て大干潟あり。又地形の高低によるにや、此能登には希也。又津波とは和訓に云海嘯・江嘯のことなるべし。

又萬念寺と云禪寺あり。氏神白山宮也。鵜川村へは十町あり、磯に寄地と云所あり。其昔鵜川の天神御神躰葉付の大根・俵藻に乘り寄給ふ神地也。今はしほ濱になりてあり。又此出崎を小倉の端とて、二ヶ處あり。何れも秀景至極也。此岡を櫻木と云。則櫻木の宮あり、御神躰此花開耶姫命也。本地正觀音也、春日の作。相殿少比古命は本地藥師如來、行基の作也。境内に御手洗の井とて藥水あり、能登十二藥師の内也。昔は兩部習合の大社にてありしに、平治年中鵜川合戰の時兵火の爲に退轉の由。鵜川天滿宮は暫く此宮に移し奉りし由、今の御幸の御旅所也。後の高岑を善光寺山といへり。此麓に道幣の宮と云あり、御神躰猿田彦命にて、中絶ありしを、近年不思議の告度々ありて再興ありし也。其外日宮とてあり。小垣村の山王、谷屋村の高取宮など云て、何れも靈社也。

◎鵜川　波並より一里十六町、本馬六十九文、輕尻四十一文、人足廿文、家數二百軒計、町作りの能き所也。則町中へ鵜川と云川流入て、往來に長十五間の橋あり。此川は山田の郷龍村山より流て、湊まで三里餘あり。餘程の舟出入して、商家・獵師あり、繁昌成所也。十村役あり、多田

氏也しが、今中絶して北村氏勤役せり。日比氏に反魂丹の名藥あり。鍛冶屋・濱屋などゝて船宿屋あり。氏神天滿宮は大社にて、神主梅田氏也。毎歳十月七日は八講會とて、近里六ヶ村に十二名の當屋あり。供物には御鏡餅を備ふる也。祭禮の日十二名連座に拜殿に座す。時に谷屋村の藤八と云者上座する也。扨鵜川村に傳兵衛と云あり。此者の方へ七度使者を遣す也。八度目に傳兵衛出合也。是を七度半の使と云。夫より傳兵衛拜殿の正面に座し、神主中神樂あり。祈念濟て御鏡餅の大いなるを持出て、當屋の者翌年の當屋へ渡す時、傳兵衛を初て例年より御鏡餅惡敷とていぎる事やゝ二時計にして漸々詫入て、小餅とて小き餅二三十添る也。夫より神酒を祝ふ也。是を鵜川の餅祭と云り。此謂は、昔七海村の磯寄地と云へ御神躰寄給ふ。鵜川村傳兵衛は其比代官職に而、告ありて櫻木の宮へ移し奉る。又翌年十月七日鵜川の孀婆（ヤモメバヽ）に告ありて、今の社地へ移し奉る。其ばゞ居し所を今誤りて馬場と云。又蓮光寺と云一向坊あり、是に蓮如の火難の名號と云あり。同宗寶藏寺は大寺也。昔は敎院にて此谷内にありし由。是に什寶あり。又淨光寺と云日蓮宗あり。此寺の後に城跡あり、藤岡平右衛門尉と云し人住る由。此高に丸山と云て風景の山あり。此鵜川を登れば、山田の郷と云て廿五ヶ村あり。此鵜川に限り鰡を釣る、外になき事也。古歌に。

能く登る國の鵜川に鮎すめば高野に雉子は住ぬものかは

此鵜川の里にて越の一峰老に逢ひ、一夜風雅をかたりて。

よる波に花いろ〳〵のもしほ草

又山田の郷は、昔長家の類葉山田式部大夫秀次と云し人の領地にて、城跡は印内村にあり。位牌等は西安寺村の西安寺と云禪寺にあり。寺中に太山府君の大木の櫻あり、花の比は見物也。神道村は柿の名物なり。爰に潔戒山とてあり、松柏茂りたる高嶺也。諸天明王の大石數千あり。皆建石に成てあり。麓に前立とて長三間計、幅二尺計、厚さ三尺計の大石あり。是より内は女入る事ならず。女鹿さへ不入。此前の田を舞臺と云。昔下の毘沙門とて大社の時、歌舞伎有し所といへり。俗に石佛と云り。又八田村に、日出森と云て田中に小山の宮森あり。日の出に地より浮び出し宮

地と云り。則氏宮也。又印内村、大村にて公領也。町と云に大社あり。今藏權現とて、毎歳七月廿三日より廿五日迄祭禮あり。是を山田御採(オサイ)とて、諸商人集り、群集の參詣あり。神主中川氏也。境内に大木の杉あり。元は八田村に、大藏權現とて一鄕の惣社成しを、其比城下なるゆゑに今の社へ移し奉りて、今藏と申也。大藏は昔に違ひ、百姓の持分となりて小社也。又不動山靈山寺とてあり、眞言宗にて本尊藥師・正觀音は春日の作也。大嶺とて後の山八町登れば石動山五社權現の社あり。高山權現と云。毎歳三月廿四日は高山祭とて一鄕祭也。毎歳十月朔日より十日迄八講會とて、近在十ヶ村に三十名の百姓ありて祭の當屋を勤る也。昔は七堂伽藍にて、中比まで六坊ありし跡其儘にあり。二王門・塔ヶ谷内抔と云て地名あり。其時寺領地なる故院内村の名あり。和漢三才圖會に、高山權現は高山にあり、祭神は猿田彦命、元正天皇の時始て建とあり。此所をも石動山ともいへり。何れにも御神躰猿田彦命にてなし。三田村八幡宮の地主多門天は、昔は大社にて上の毘沙門とて、奥の院三町計絶頂に多門天の像石あり。大石の立石也。神主堀内氏也。

同村に妙龜山大盛院とて禪宗あり。昔龜山院の御宇、官女此所に流浪ありしを葬しとて、其塚龜山と云にあり。龜形の山也。色々の物語あり。略す。又龍村は鵜川の上三里にありて、此奥山より流出て一の瀧・二の瀧とて二つあり。昔此瀧に大蛇住て人を取喰ふ。大穴持命是を退治ありて、其靈を龍大明神と申て、此瀧の本に社あり。此所の氏神也。毎年十一月廿八日祭禮にて、此瀧坪に俎板石と云てあり、此石上に鮭の魚二尾おのづから上りて、死して浮び流るゝ也。是を取て喰へば癩病になると云て、人おそれて不喰。是昔の人身御供の代りの生贄也と云り。此村の内に暮の谷内と云而、此大蛇の尾に劔ありて、雨雲覆ひ重りていつも闇かりしゆゑの名也。是則村雲の劔也と云り。其時の淵の跡とて、今沼になりてあり。此謂にては素戔嗚尊の退治ありし山田の大蛇に似たり、いかゞ。此國陰國にて、此類ひの外魔の住所にて、かゝる舊跡所々にあり。又木住村に八郎左衛門とて、利家公より御扶持頂戴の山廻り役あり。新田氏にて義貞の子孫也。花炭を燒こと家傳也、御上へ上る也。又鵜川村より中居・甲村なゞへ行は、磯傳往來あり。十町餘

行ば小田川村とてあり。中居へ行く本道武連越と云は、此村中より山手へ登る也。鵜川より武連まで一里卅三町、本馬九十三文、輕尻五十二文、人足廿六文。武連より川尻村へ一里廿町、本馬七十四文、輕尻四十四文、人足廿二文也。道難所也。是より甲村へ出、中居へ行く道を爰に記す。九武連村は山田の鄕の内也。往來より北の方に吉ヶ池とて、昔蛇の住せしと云ておそろしき池あり。又武連の二子山と云あり。名山にて絶頂二ツに別れ、富士のごとく也。高山にてもなしと云へども、國中よりみゆる山也。此南の麓に、永願寺と云て古寺ありし也。今は地名のみあり。昔甲村に堀川の何某とて、京都公卿の兵亂をのがれて來り給へるが、其兄弟の骸を此山に葬りしと云り。又此散村に一ッ屋と云所あり。昔一つ家にてありしに、甲の城主平ノ右衛門督と云し人、軍に打負、一人此一ッ屋に來りて身を忍ばんと賴しに、あるじ情なき者にて、右衛門督を云甲斐なくも生害す。其跡と云て、四五間四方に今も草生せず。今十軒計家數あり。殺害有し所を氏神として小社あり。太刀・鎧等近比までありしと云り。

此邊の山里に、比しも霜月すゑの三日の一夜を明しけるに、夜具とてもあらず、一枚の莚にわらなはを曲て枕とし、寒夜のつらきに家の内なる人々の不斷の起臥を思ひやられて、さのみ寒からざりしに。

身のほゞを心にしのぐ寒さ哉

又小田川より三四町浦傳ひ行ば、古君村あり。助右衛門と云よき百姓あり。蝶の鏡と云不思議なるかゞみを持傳へたり。又此村の姫崎と云て、妙泉寺地主權現の御旅所あり。風景の地にて謂ある神地也。此磯に井筒波と云て名所あり。相逢波共云り、井桁波共云り。

我戀は名にのみたてゝ諸橋の渡し相合波の間ぞなき

筒井筒いつの名のみぞ古君の老にけらしな波の數々

又古君より五六町浦傳ひに、宇賀川村と云てあり。此山手の岡十町計に、明泉寺村に白雉山明泉寺と云て密寺あり。勅定山共云。孝德天皇勅願所にして、白雉年中草創の寺也。本尊千手觀音は春日の作也。靈驗あらた也。其外行基菩薩・弘法大師の作佛多し。昔は諸橋鄕寺領あり。中比賴朝卿三ヶ村を寄附ありしと、此寺觀音堂再興狀にあり。其比は大

伽藍にて、今に十町の間に礎等其儘殘りあり。今も畠山重忠の寄進の石燈籠、梶原景時の寄附の大石の手水鉢あり。賴朝公其外將軍家の墓所あり。境内廣し。大石塔多あり。寺中に明星の池・明星の石とてあり、謂あり。東鑑に、建長三年若宮誕生祈の賞に、若宮別當隆辨に工藤三郎左衛門光泰を以、能登國諸橋の鄕を下さるゝとあり。誠に一千年餘の古跡なれども、數度の兵亂に緣起・綸旨・院宣も不殘燒失せり。又云傳ふるは、善無畏三藏天竺傳來の本尊千手觀音にて、末法結緣の爲此所に立置れしに、其後天子の姫宮に痼ありしを、獨りの乳母一緒に、空船に乘まゐらせすてられ給ふに、此磯に寄給ふに、白き雉子一羽來りて導き參らせ、此岡に至り給ふに千手觀音の堂あり。是に籠り給ふに、姫君物云ひ出し給ふにより、天子聞召勅定あつて一宇御建立あり、勅定山明泉寺と號す。姫君も乳母も尼となりて、あたり近きに住給ひし處を姫崎と云。又古君の名あり。靈鳥出し處を鳥の濱と云。又其比明星天より下り、石となる。それより靈水出しより明泉寺と號すと云り。其舊跡のこりあると云ども、いつの時にや緣起もなくなり、云傳るまでにてかすかなる事になりぬ。かゝる靈場もあさまに成、元亨釋書にも洩れしこそ遺恨なれ。當國順禮の第一番の札所にて、今も觀音は靈驗あらたにましますにより、諸人歩をはこぶ也。又上日寺とて近し、今は禪宗也。是も其比此姫尼の、千手觀音御影をきざみ給ふ本尊と云り。是は當國順禮第二番の札所也。

明泉寺の隱居の僧、安永三年三月十五日入定ありしとて、我等其年の五月詣しに、其塚の有さま殊勝にもあはれに覺えて。

葉櫻や甘味のぬけし法の跡

◎前波　鵜川より一里五町、本馬五十四文、輕尻卅二文、人足十六文、家數五十軒計。此村に次郎兵衛とて、利家公より御扶持戴きし山廻り役あり。又洞光寺とて禪宗あり。氏神稲荷宮、此邊の大社にて。神目伊豆彦神社六鄕の大社稲荷大明神と書ける額あり、此社は其昔毎歲祭禮に猿樂あり。則金澤の諸橋權進は、先祖此村にありて、類家等今にあり。其比舞臺のありし所を道化山と云。又權進屋敷と云もあり。其猿樂の時諸入用等留帳此社にあり。其外寶物あり。天の平賀・手抉とて神代の器物也。春日作の實瓶と云ものあり。同作の翁の面・靜の面・朝比奈の面とてあり。其外略す。又近年堀川三位康實卿奉納有し色紙二枚あり。其歌に。

年毎に生添ふ竹の世々をへて變らぬ色をたれとかはみん

山のはに匂ひし花の雲きえて殘る日かずのありあけの月

是は當社神主も堀川氏也。先祖は隣村甲村に、昔堀川家の公卿流浪ありし其筋目にて奉納有しと也。又諸橋權進寶曆六年奉納せし守刀一振・舞扇子一本あり。案るに權進は樂人、此堀川氏は神主にて、何も明泉寺領之内扶持ありし者也。又向の崎に諸橋の一本木とて不思議の大木あり。若狹の白比丘尼の植しとて、槻木なれども榎實出來せし也。諺に云、えのみ千俵なりても木は槻の木と云は此木の事也。權進先祖、此木の本にて翁の靈面を得たり。是權進家の什寶也といへり。誠に一本木にて、外に草も生ぜぬ眞砂の濱邊にある大木也。其上一つの奇特あり。近年此木枯たり。其根株に今屋根して鳥居抔立てあり。此木枯しより、此所へ大石數多打上て、今は數千に及て山となれり。是を小玉石と云り。越後國諏訪の海にもあり。古歌に。

諏訪の海水底てらす小玉石手にもとられず袖もふらまし

此海も諏訪のうみと云へり。則すは大明神は此所に產し給ふ也。此諸橋の鄕に御舊跡あり。往古鵜茅葺不合尊は諏訪大明神也。御母は豐玉姫也。隣村沖波村は濱繼き也。是に產屋の宮とて、所の氏神にて、神主四柳氏也。御神躰豐玉姫也。此所御產ありしとて、御產所跡を小屋の間とてあり。產屋の水とて靈水往來の中にあり。圓の宮とて不思議なる小山に社あり。御神躰鵜茅葺不合尊也。山手に諏訪大明神の大社あり。宮森不殘椎木原也。是も白比丘尼の植しとて、皆古木也。是も神目伊豆彦神社と額あり。前波稲荷社と神號の論あり。往來に閂石とてあり。又產屋を鵜の羽にて葺し鵜を取たる故、鵜出・宇加川・鵜川なぞゝ云て地名あり。惣じて此諸橋の鄕は神地なるゆゑ、何によらず植る物一年に二度みのる靈地也。今に小玉石と云て此磯に寄るこ

と、末世の奇特と云ふべし。かゝる舊跡あるに、筑紫の鵜殿宮とて諸書にもあり。神代の事なればいかゞ。

神も此產屋の水を汲はやし清き心も猶そゝぐらん

昔此村に官女の流浪ありて宿かり給ふに、其家に若き男ありて亭の口より覗しに、官女見て。

沖波の立つとはすれど寄もせず

と有ければ、若き男かくなん。

東風といふ風いまだ吹かねば

と付ければ、夫より契り淺からずなりしと所に云傳へり。又此諸橋に七不思議とてあり。土を穿てば神代の器物平賀と云物出る也。槻木に榎の實生ずる也。諸橋菊とて水仙原あり。石山に毎夜火燈るゝ也。天狗の爪硎石あり。金聲石あり。動着石あり。是を諸橋の七ふしぎと云也。金聲石は打ば鐘の聲する石也。甲村近きに二つ家あり、其磯にある動着石は其邊也。大石なれども指にてさはれば動く也。又九月比より一遍に野山に水仙の花さく也。常の水仙とはしべにかはりあり、諸橋菊と云。

◎甲村　前波より一里十町、本馬六十二文、輕尻卅八文、人足十九文。黑崎・宮古・阿曾良・大甲・小甲五ヶ所にて、家數百七十軒計。此村は王餘魚の名物也。昔堀川大納言・弟左兵衛督とて、京都兵亂の比、此所へ兄弟の公卿來り住給ふ。其比まで此村を阿曾良と云しにより、阿曾良大納言と云し由。住給へる所を宮古と云り。其兄弟の塚は、武連の二子山にありといへり。此比よりの者とて、今右馬・藏人・刀禰・九文などゝて百姓にあり。此卿の植給ひしとて、阿曾良の笠松とて、風景の地に名木あり。又此村は、入海にして奥深き事なれば、廻れば阿曾良まで廿町もあり。船にて渡せば四五十間計也。大蓮寺とて禪宗あり。此寺の隱居惠寛和尙と云るが、安永年中に發願にて、左右より石垣を積出し、長十五間の橋出來せり。名を鹿橋と號し、此風景類ひなければ、僧侶の詩歌連俳あるを集て鹿島記とて一冊あり。中にも惠寛和尙の歌に。

入海や舟路にかはる長橋も心がくれはなる時しかな

亦東武の人の方へ此橋成就せしとしらせの文ありし返事に。

身を盡しかけし鹿橋今ぞきてふみゝる末の賴もしきか

な

此外詩歌連俳多し。略す。海にわたせる橋、此國は松百村の外希なりしに、又爰に出來たり、奇特成事也。又甲山とて一國の名山あり。海の尾崎に誠に兜の鉢のごとく丸き事、諸方より見ゆるにかける事なし。諸木生茂りて見事なる事、又類ひなき名山也。昔は阿曾良村と云しに、此山の形により今は甲村と云。絕頂に社あり、則甲比古神社と申奉る。本地藥師如來也。神主大橋氏也。此山腰奇石異石多くして、風景言葉にのべがたし。中にも夜毎火ともるゝ石あり。又天狗の爪硎石と云て、面平かなり、毎朝物を硎し跡あり。此山の腰少はなれて海中に錢塚とて小島あり。錢を杉形に積しにたがはす。色々物語あり、略す。又大甲と云に城の高と云り。是は平ノ右衛門督と云し人の城跡也。天正年中落城せし由。

曾良や宮古の入江の霧間をわけて戶渡る船のいと面白くて。

ながめよと漕にはあらで稻小舟

又宇出津抔より口渡りとて所口への往來あり。此甲村より向の島の路へ姥ヶ浦と云へ渡る。是を大口と云て海上一里あり。舟賃一人に五分充也。夫より島の路饅目村・長崎村・野崎村を經て、日出ヶ嶋村より向の陸なる三室村へ渡る也。是を小口と云て海上廿町あり。舟賃一人三分充也。三室村より太田村抔を經て所口へ出る也。甲村より所口まで六里半あり。又此甲村を廻れば曾良・鹿波・岩車とて磯傳ひ三ヶ村あり。皆公領也。曾良村近し。坂東とて古き百姓あり。利家公より權役二枚御免許の御墨付戴きあり。此者先祖は、下野國高木の城主細木家直と云し人甲の阿曾良と云所に來りありしに、又此所へ移りて曾良と名付、子孫榮えて今一村となれりといへり。千壽院と云密寺あり。船の間あり、小舟不絕。出崎に不動崎とて古跡あり。又鹿波村へ磯傳ひ一里あり、よき村也。一向宗二ヶ寺あり。此氏神八幡宮・白山宮兩社祭禮は八月十五日也。角力祭とて土俵の前に神輿を居奉り、三十三番子供角力あり。肝煎・番頭行司にて正しきこと也。角力終りて、神主森川氏鹽鯖一尾充配る也。則祭禮料とて田三百苅・畑千歩寄附あり、能き祭禮也。此散村に內波とて山手にあり。惣じて此諸橋の鄕、藤

波・波並・矢波・前波・沖波・鹿波・内波と云て、能登の七波は是を云。又岩車村一里あり。昔安養寺とて天台の大寺ありし也。今寺號一向宗になりてあり。今も寺の境内に堂の上など地名あり。五輪石塔等其儘あり。氏神山王權現は美麻奈比古神社也。今も美麻奈宮と云。此神號は今穴水にあり。又出崎に最勝の森とて面白き出崎あり。住吉明神の社あり、風景地形不思議なる所也。毎歳大晦日には此社へ龍燈あり。此所入海にして中居へ聲屆き也。渡しあり、四町計也。

◎山中　甲村より一里四町、本馬五十三文、輕尻卅一文、人足十五文。此村は誠に山中にて、四ヶ所に別れて家六十軒計あり。甲村の宮古と云より山手へ登る也。武連村へ近し。此道すがら中居邊りの入江を見おろし、風景山水の有さま筆にも盡しがたし。

海も山も唯一目に見えて。

海山のかぎりありてふかんこ鳥

◎川尻　山中より一里一町、本馬五十文、輕尻三十文、人足十五文。中居川尻と云、家數三十軒計あり。淺間なる村也。川尻川あり、長八間半のはね橋あり。源は中谷村山より流て、此川尻川へ出る也。中居の入海の東にあたりて、舟にて十八町あり。大方は舟にて越す也。舟賃一艘三十六文也。本道は比良へ廻り、波志借村を經て中居へ出る。道程九町あり。此川尻村はあさまなる所といへども、磯邊にありて入江々々を見渡し、鹽竈かせぐ海士のしわざ、鹽竈の躰、眺に盡ぬ秀景也、又此磯傳ひ岩車村近し。又比良村、川尻より廿町あり。法榮寺と云西方一向宗の寺に、不思議なる靈石あり。此外東方同宗二ヶ寺あり。長八間半のはね橋あり、此邊風景也。川上は汁谷村・曾山村山より流るゝ也。又波志借村は私領・公領入交る也。全翁寺とて禪宗あり。一向宗一ヶ寺あり。此に又長七間のはね橋あり。川上は藤卷村山より流れて、此橋ある故元は橋梶村也。梶村もつゞき也。又橋爪に開出の地藏とて、靈像の尊躰あり。行基の作にて靈驗あらた也。此村より中居へ十四町あり、風景也。或年此邊の橋普請有し時、狂詩など旅宿の徒然に。

能州普請ハ山海ノ邊。秋風飛レ塵奉行前。根伐木割ハ爭ニ寸隙一。地盛板揃ハ雇ニ手傳一。宇上繕レ柿如ニ啄木一。橋下打レ釘似ニ鞦韆一。暮ニ歸ニ旅宿一月滿レ屋。曉出ニ橋場一星殘レ天。儒弱ノ下男ハ待ニ晩日一。元氣ノ棟梁ハ誇ニ壯年一。人歩畫寢托レ茗作。工匠夜這脱レ褌懸。數日ノ苦樂渾テ若レ此。奉行ノ鎌留ハ誰可レ憐。

◎中居　川尻より一里九町餘、本馬六十文、輕尻卅六文、人足十八文。此中居は南村・北村と別れて、家數四百軒計あり。昔は禁裡御用勤て、諸役御免の御中居領なりしゆゑ名とす。此邊を南北の郷と云。往古此所に日吉山安養寺とて、天台の大寺ありし也。近き頃まで境内に舊跡あり。本坊は岩車邊にありしと見えたり。七堂伽藍の地にて、不動崎に不動堂あり。神明ヶ端は鎮守神明宮あり。藥師堂・大師塚・千部坊の跡抔とてあり。又廿一社の山王宮ありし也。今の六所權現の地に七社、山王社に七社、岩車村に七社あり。日吉廿一社の三ヶ所共に大社にて、崇德院の勅願所にして、度々勅旨・綸旨等あり。美麻奈比古・美麻奈比咩神社、兩部習合の惣社なりしに依て、日吉山安養寺とて別當たりと云り。今此御神號は穴水にあり、いかが。兵亂に安養寺も廿一社の大社も、多くの衆徒・神主も退轉して、三里に末院ありしも改宗ありて、安養寺の寺號も一向宗穴水法性寺の懸所となり、岩車にあり。其後今の中居の地は久しく荒地となりてありしに、同郡椨比の惣持寺に東天和尚とて貴き禪師ましませしに、ある夜禪師座禪の折から、何く共なく女性一人來りて授戒を願ふ。禪師宣ふは、汝が正躰を顯はさば授けんとあれば、我は此山一つあなたなる入江に住むものとて、千尋の大蛇となりて失ぬ。禪師跡を尋て此所に來り給ひて、一宇建立あり、臥雲山大龍寺と號して住給ふ。此禪師は生所しれず、羅漢の化身といへり。即爰にて遷化あり、塚は寺にあり。今も此塚に喰箸を備へ祈願すれば、虫齒をいたむもの忽ち治する也。昔は忌日には龍燈有しに、次第に滅齋の穢にや、龍燈は向の最上の森の崎へあがる。龍神布施に捧し守りとて、塔司仙慶庵にありて、諸病火災を遁れて奇瑞有しに、其後符を破てより奇特薄し。今什寶になつてあり。其時の大蛇は則奥津比賣神の御神躰なりしと也。今も毎歳祭禮に、此寺住持參詣ありて法施あり。元此寺の門前に五六軒民家出來しより、南村の始也。又北村は昔より鑄物師にて、初は内浦村沖の崎と云にありて、今も吹屋の跡あり。其昔河内國丹南郡より鑄物師來りて

此所にありしに、其比禁裡に夜々御殿の上へ黑雲一叢降りて、帝御惱安からず。博士奏して云、是はぬえと云鳥にて至て陰鳥なれば、陰國の水邊に拵たる燈籠にて見給ふべしと有ければ、公卿詮議ありて此所へ宣旨あり。百の燈籠を鑄て捧しより、世々禁裡御用を勤て、能登釜の名物の初也。後鳥羽院の御宇に、初て綸旨下りし時拜戴せし地を瑞鳳山とて、則後鳥羽院の御像を祭り、綸旨下りし日三月廿一日毎年祭禮とする也。此瑞鳳山風景の名山也。其後沖崎より此處へ來りて、鑄物師今にありて、北村・南村と別れ榮えて、鑄物師受領の者百五十餘人に及べり。今も口宣の書物五十餘通傳へり。眞田氏を改所とし、神崎・國田・嶋田・嶋竹・福光・米田・中瀨・森川・中山・宮崎・小泉・小林・吉岡・四柳などゝて今もあり。御即位毎に改所名代として、此者共の内より登る也。中比眞淸田三右衛門・神崎金右衛門・橋梶の大津坊とて、利家公能州御發向の時御手傳ひ申せし者にて、御墨付戴きあり。中にも三右衛門は大力の剛の者にてありし由。今も御扶持頂戴して十村役也。又利常公の時、鑄物師名人宮崎彦九郎と云しを金澤へ召され、寒雉とて今金澤にあり。又此所にて出來の鐵炮の大筒とて、目形七十貫目計ある異筒七挺御收納藏の内にあり。御鹽代官一人在住、兩町に肝煎二人、眞言宗八ヶ寺、一向宗二ヶ寺、禪宗二ヶ寺。北村氏神は六所大明神とて、神主神杉氏、別當地福院也。南村氏神は山王權現也、神主四柳氏、別當醫王院・觀音院・蓮臺院・月光院四ヶ寺年替り也。祭禮は毎年三月中の申の日にて、神輿兩社共に町中御幸あり。別當には昔の安養寺什寶・古佛等、社中において開帳あり。又町中に若宮とて小社あり。是は日吉山王の時、京都より齋巫下りありしを、其靈を祭りし宮也。其筋目今にあり。宗之市と云家の前に、湯の池とて神水あり。其比の衆徒の筋目とて藤ノ坊・金剛坊・印鑰坊・大宮坊などゝてあり、今八ヶ寺の眞言も、皆末院の改宗也。又穴水法性寺も末院の筋目なりとあり。又遍照院と云に、觀音の不思議の靈像あり、是は宇出津海鹿觀音也といへり。御手かた手なかりしに、獵師の網にあがりしを付てみれば、再びはなれず。其時周章て付しとて表裏になりてあり。金像也。又神明ヶ端とて社あり。脇に藥師堂あり。本尊海中より上り給ふ石佛也、大佛也と云り。又南の出崎風景の地に、奥津姫大明神の大社あり。祭禮毎年三月十五日・十六日也、此社は元は隣村の麥浦村境に、宮の入とてふかき入江あり、此所にありしを移し奉りし也。又町家の後に奥深き洞あり。兵亂の時器財をかくしたる所といへり。

左梅子の許に宿り、種々の饗應にあひ、立つ日になれば。

餌ぶくれて立去がたき疇の雁

此邊の八景を四季の發句にせよと望まれて。

橋梶の夕照　鍬洗ふ夕日かげらふ橋柱
大瀧の晚鐘　春雨や夢の世長し暮の鐘
北村の晴嵐　一嵐晴殘してやせみのこゑ
南村の歸帆　凉みがてら岸に舟待漁父が妻
比良の落雁　朝な夕な馴て門田に落るかり
瑞鳳の秋月　我影の雲とわかるや海の月
川尻の夜雨　色々のうきを時雨るゝ旅寢哉
奥津の暮雪　白ゆふやおのづからなる雪の森

◎七海　中居より一里一町、本馬四十九文、輕尻廿九文、人足十五文。上七海・下七海と別れて家數六十軒計。上七海は私領也。下七海は公領也。入海の奥にあり。其入江々々の有樣、谷川の流れ、磯邊の風景、言語に絕したる所也。

海山に秋はてもせで詠めかな

又往來に城ヶ端と云て廓跡あり。芝ヶ峠と云て古戰場あり。又穴水は七海より十九町あり。入海の奥に有て、此穴水公領にて家數三百軒あり。町中に長十間餘の橋あり。川の西を大町と云、東を川島町と云。此川の源は荒屋村奥村山より流れ、又一筋は唐川村奥村富木山境より流れて、此町の後にて合流す。商家多く繁昌也。毎月二の日三才の市あり、湊は餘程の船着にて賣買の便有て公領一の廣き所也。大町の庄屋は宮の森と云り。河島の庄屋は池田永齋と云て、長家へ忠勤の者の筋目也。橋爪に關寺と云者の方に、弘法より傳へられし五香湯あり、產後に吉。壹貼何にても升物一升に代る也。昔は此穴水は長屋の城下にて、數千軒の家あり。兵亂に退轉せし也。今の家居有は出村と云所なりし也。其比は寺庵も多くあり。兵亂に散亂して、今も兩町に藥師堂とて二ヶ所作佛安置あり。瑞源寺とて禪院あり。長氏より寺領五十石寄附あり、長家代々の菩提所にして大寺也、又十町

山手に、來迎寺とて密宗あり。長家代々祈願所にて、寺領十石寄附あり。此寺に長谷部信連の靈像あり。今武健靈社と額あり。是自作の靈像にして奇瑞ある也。正月・七月十六日開帳あり。寺内に信連守護神の稲荷宮あり。又北の山手に白山宮あり、河島村の氏神也。美麻奈比古・美麻奈比咩の神社と額あり。境内に崇德梅とて古木あり、勅使梅共云由。又社近きに、穴水の井と云て神水あり。此水有ゆゑに穴水の名あり。祭禮三月十八日、毎年町中御幸あり。神主四柳氏也。亦南の磯邊に、奥津比賣神社とて大社あり。大町の氏神也。社内に古塚あり、名を十種塚と云。十の神寶を納めし塚と云り。塚の上に古木の櫻あり、家傳櫻と云り。後の山を舟津山と云。神主關氏。祭禮は白山宮と同日にて御幸あり。

此社内に散敷紅葉もまことに塵に交はる神心とあれば。

おろそかにふみしたぐまじ下紅葉

長家累代居城ありし城跡は、町の東の海へ出る山の尾にあり。蛇の端とて、搦手の海の手にあり。長家此城退散の時、蛇出て名殘を惜みし所と云り。今長家の玄關に龍彫てあるは此謂と云り。此磯に信連貝と云てあり、鎌倉より靱に入て來りて、我子孫榮ゆるならば生ぜよとて磯に捨られしに、今多く此磯にあり、今貝に靱のすれし跡と云てあり。此穴水へ、輪島よりも寺口よりも五里あり。道は輪島へは一坂にて馬次也。寺口は地藏坊村にて馬次也。亦穴水谷内村々多し。宇留地村とてあり、鳴瀧と云てあり。鳴橋と云てあり、名所也。上唐川・下唐川村とを經て、富木所々へ行往來也。又乙ヶ崎村へ行は磯傳ひ也。十町あり。間に鵜島村と云公領あり。

◎乙ヶ崎　七海より卅三町、本馬四十三文、輕尻廿六文、人足十三文、家數四十軒計、あさまなる村也。此村磯平にて入江にあり。船を圍ふに手寄能く、穴水へ近く、物毎に勝手よきゆゑ、秋末は磯邊に大船の不絶あり、普請抔する也。御收納藏あり。其上淺間なる村と云共、巡見上使泊り所にて、源内と云家居能き百姓あり。是と一向宗妙樂寺の兩家にて、巡見上使の宿勤る也。

あさまなる宿の寢覺に。

宿馴ぬ枕も嬉しほとゝぎす

又新崎村は乙ヶ崎より南へ一里、海へさし出る崎にある村也。鹽師にて御鹽藏あり。誠に閑靜なる所にて、一向宗一ヶ寺あり。此村に謙信塚とて一里塚の如き塚あり。古木の榎木一本あり。折々此塚の内震動する事あり。是謙信家臣に有坂備中と云者、三崎へ船にて渡り、七尾城の搦手へ向べき手分けなりしに、追手の勢と手配り早く着船して、道々亂逆して討取所の首塚也。惣じて此者の爲に多くの神社佛閣を失ふ事、當國においては數不知。かゝる惡逆無道なる臣を持つ謙信の惡名殘れること淺間敷事也。此國へ謙信發向なし。然るに有坂塚共いはれず、謙信塚と云事不忠至極の有坂也と云傳へり。

此崎より根木の里とやらんに舟にて渡せしに、冬の日の習ひとて俄に浪風あらくなり、雨頻に車軸を流せば、船中周章さわぎしに。

魂も細目になりて一時雨

惣じて此磯傳ひ、志賀浦・根木・鹿島とて浦半の眺言語に絶したる景也。又鹿島村は乙ヶ崎より一里半あり。磯山に鹿島大明神の社あり。北の谷内に要石とて異る大石あり。則ふる崎の浦とて、名所にて萬葉の歌に。

かしまより熊木をさして漕舟の楫取間なく都しおもほゆ

◎曾福　乙ヶ崎より二里廿四町、本馬七十七文、輕尻四十七文、人足廿三文、家數六十軒計。此村の後に當て高山見ゆるは、富木の鉈打山也。此所よりは近し。東平此村の領也。鳳至・鹿島・羽咋の三郡の境山にて、頂きに大石あり境とす。當國三十三所觀音の廿四番札所にて、順禮の者は此村より登る也。委き事は富木院内の所に記せり。外に高山みゆるは、本郷村領の瓶割山と云也。何も舟の見當にして、所々の獵師のたすけになる山也。

折しも野飼の駒のあまた放ちたるに、小牧の昔をおもひて。

きよろ〳〵と霞を出し野馬哉

◎小牧　曾福より一里六町、本馬四十九文、輕尻卅一文、人足十五文、家數百軒計、入江の縁にある村也。此村より鹿島郡にて、駄賃錢割合違ひあり。此村より中島へ越る、一里の峠也。高茂山と云ひ、奥深く富木山へつゞけり。昔は此所牧野の駒ありて、小牧の名あり。道より南は中島村の常林寺

の林にて、大木の杉あまたあり。又此山の麓の灘に、瀬嵐村とて公領あり。風景の小島二つあり。一つは猿島と云、今畑に成てあり。一つは種々島とて宮森に成てあり。惣じて陸より、向の島の路へ中にも近き所にて渡しあり、島の路通村より此小牧・瀬嵐へ五六町あり。則高茂の渡しと云り。昔七尾の城主畠山義則と申て風流の人にて、其比歌道の秀才月村齋宗碩抔招きて、此瀬嵐の二島を須磨・明石の浦に擬して、人丸の廟宇を建て、時々の風詠ありて、其折萬水一露なぞの歌書も此家より出たり、かゝる亭荘廟宇も、程なく兵亂に灰燼となりはて、礎のみ近きまで殘りありしと云り。又此所に人丸の歌也と云傳へり。

しらはまの松の梢に照る月の爰ぞこしぢの歌の種島

此歌萬葉抔にも見えず、若も宗祇なぞの詠歌にもあらん、いかゞ。白濱村は此島の西にあり。磯岡山は白濱の御林とて、大なる松山成しに、近年大風に松不殘折てなし。誠に海上より岡の山の詠言語にのべかたき所也。其後數十年を經て、金城の淺井政右と云人、和倉湯治の折から此邊逍遙あり。此島の人丸の廟宇の跡にて、一つの片石を得て家に歸り、月村石と號して盆中に置て、此石語を加陽大乘寺の萬山和尚に乞て、其石語に云。

予雖レ未レ見二其石一。一ヒ覩二其所記一。則思三人丸於二明石浦。思三畠山ヲ於二七尾城一。思三月村ヲ於二瀬嵐ノ里一。耳如レ聞二其水之瀬聲一ヲ。目如レ見二其山之嵐翠一ヲ。彼石不レ來二我心中一。我心不レ往二石邊一。而文字輪文能轉ル二人思念一ヲ。實不可思議也。

詩曰

混成ス靈地物。存レス古蘚痕班。彷彿タリ人丸影。依稀月老顔。瀬聲通シ三几上一。嵐翠映ク二窓門一。不レ待點二頭目一。我愛ス似二我頑一。

則鷹ヶ峰卍山和尚廣錄に見えたり。誠に向の島の路を淡路島と思ひ、後の高茂の高嶺を鵜越共準へ、左右の浦の眺いかにも須磨・明石の浦にも擬すべき處也。

其廟宇の跡也と云て、一本の柳有ければ。

月花に見すてられても柳かな

◎中島　小牧より一里、本馬三十八文、輕尻廿五文、人足十九文、家數二百軒餘あり。町作りたる所、御藏所也。此

邊を熊木の鄕と云て、昔は入海にて船多く着、繁昌成所にて、萬葉に。

はしだてのくまきさかやに、まぬらるやつこわし、さすひたてゐてきなましを、まぬらるやつこわし

此外にも長歌あり、略す。今に熊木酒屋と云者あり。熊木川とて大川ありて長八間半の橋あり。此川源は奥山富木境より流るゝ也。中島村と云に、大野氏十村役あり。定林寺と云禪寺あり、境内廣く、大木の杉あまたあり。昔は七堂伽藍にして、本尊釋迦如來、天竺傳來の靈像にて、色々奇瑞ありし事あり。其比は京都東福寺末院にて、嘉暦元年の建立也。亦熊木惣社阿良加志比古神社は、中島村より十町川上宮前村に立給ふ。崇神天皇勅願所にて、社頭御建立有し也。其比は社領三千石、兩部習合の社也。今も大社にて寶物品々あり。中にも弘法大師の眞筆の法華經九卷あり、依てくまきの名ある由。同作の藥師の尊像あり。春日の作の翁の面あり。其外品々あり。近年神主四柳氏退轉して、今は能登部清水氏預り也。祭禮は毎年八月廿日、近鄕十六ヶ村の祭禮也。此熊木名物に九万疋（クマビキ）とて饅の腸漬ありて、昔は禁裡へ捧しと云り。又熊木越とて富木への往來あり、道々村多し。豐田村に藤原彦の神社立給ふ。社内に八重一重櫻とて名木あり。祭禮は毎歲八月十六日にて六ヶ村祭り也。依て六方祭とて賑しき也。又上町村に郭跡あり、しれず。西谷村と云に德山五兵衛尉城跡あり。又町屋村に國分左兵衛尉城跡あり。

◎川崎　中島より廿六町、本馬廿六文、輕尻十七文、人足十三文、家數七十軒計也。此村に田畑刑部抔と云百姓あり。中に川あり、長十二間の橋あり。川の源は羽咋郡日用村山より流て、豐田村を經、即是にも長十間の橋あり。川名豐田川と云り。又豐田村に左近と云古き百姓あり。畠山式部大輔義春の母人は、此家の娘といへり。又笠師村半道餘あり、往來也。山手より海際迄廿町ある村也。三輪氏の十村役あり。櫻田・藏見と云百姓あり。大覺寺と云禪寺あり。御收納藏あり。菅忍比古神社立給ふ。笠師の保四ヶ村氏神にて、祭禮毎歲八月十三日也。神主井田氏也。

笠師の山中を越る折から。

片里や谷内に聞ゆる田植歌

又鹽津村は十町計笠師より海邊にあり、能き村也。沖に辛（カラ）

島と云て神森あり。此島風景勝れり。

◎大津　川崎より一里十六町、本馬五十八文、輕尻卅八文、人足廿九文、家數百軒餘あり。此村昔は德田佐渡守と云し領主ありし比、諸事運上して船着なる故大津の名あり。佐渡守城跡は少し山手、則德田村と云にあり。又大津村に大野氏山廻り役あり。又此村の百姓の家に昔より怪異あり。靈佛の木像傳へり。外へ移せ共又此者の家へ戻り給ふ由。又此村の田の中に手向の櫻とてあり、石動山より弘法大師此所を通り給ふ時飛し櫻と云り。又此村菖蒲ヶ谷内越とて、德田村・代田村・梨谷小山村を經て堀松村へ出る往來あり。大津より堀松まで二里あり、本馬駄賃八十文也。此邊より金澤往來也。又西の方印内村・矢田村・栗山村三ヶ所は紙漉所也。又田鶴濱往來に、金ヶ崎と云に冷水あり。此崎の海中に手にとられぬ金見ゆることありしゆゑに名とすと云り。又白濱村往來也、白比古神社立給ふ。

又三引村近し。赤藏山本宮寺とて高嶺にあり。推古天皇の御祈願所にして、昔は七堂伽藍御建立あり。六十餘坊建並て靈地の大寺なりしを、兵亂に炎上して奥院・二王門まで殘りありしを、其後長家より再興あるこいへども、今僅に奥院・講堂と榮春院・怡岩院の二坊のみあり。寺領七石、山方一里長家より寄附、しかも高嶺にして靈地也。麓より奥本社へは廿町登る也。赤藏權現、本地千手觀音也。十五町に御手洗の池あり、冷水にして清き事限りなし。講堂の本尊は弘法大師の作五智如來、丈六の金像の大佛五躰安置あり。靈場にして石動山に準ずる山也。密宗也。又龜山天神とて麓に立せ給ふ。又近き比まで赤藏山は兩部習合にて、神主長尾土佐守とてありしに、社僧と論有て退轉せり。又當國浦ヶ嶺觀音廿二番札所は、田鶴濱入口丑ヶ端と云岡にあり。昔は上の山浦ヶ嶺にありしを、長連龍今の所へ移されたり。

◎田鶴濱　大津より一里八町、本馬四十文、輕尻廿六文、人足廿文、家數二百軒餘あり。商家多く能き村也。此村昔は長家の城下にて繁昌成し也。惣じて此邊を新郡と云り。則長家菩提所東嶺禪寺、寺領三十石寄附の大寺也。同宗悅叟寺とて寺領十石。長家の舘跡は今御收納藏屋敷になりてあり。則馬場なごあり。亦百姓に中村屋とて長家由緣の者あり。又永江平兵衛とて長家々人の筋目あり。惣じて此村今も商

船着て、諸事運送自由の處也。此近郷は能登蜜柑の名物也。

今宵月見がてらに、此所の船道遙こそ面白しとて、宿の主にいざなはれ、我も濱邊にうかれ出しに、まことにくまなき月に、うかべる舟のかゞり火は星のごとく螢のごとし。さて船中には今やう豐竹の一ふし、太竿の一曲の呂律は龍の吟ずるかとうたがふ。りうさんなの拳、酒に生醉の踊物まねは、海へはまるかとあぶなし。或はさゞゐ・小蛸をあざるとて淺瀨をかせぐもあり。其外釣の一樂、打網の一なぐさみさまゞ〳〵なるに、我は只茫然として。

名月やいるさもなくて夜は明ぬ

又此磯邊傳ひ奥ヶ原村・舟尾村を經て涌浦村へ、田鶴浦より一里あり。今は和倉と書り。日本一の熱湯の温泉也。湯の島とて磯より一町餘に小島あり。潮滿る時は島をこす也。汐干になれば湯坪へあつくして立寄事かたし。石傳ひそだなど敷て漸に湯を汲む。大なる桶へ三の一湯を入、三の二はうめ潮をして入ことなり。所口町にて取湯するに、海上二里と云ごもさむることなく、當分うめ水して用ふる也。湯本所口和倉屋と云者御印物戴き、一廻り一人に湯賃四十文あて取に廻る也。湯所のわきに小島あり、辨財天の社あり。風景類ひなし。爰に一つの奇特有るは、湯坪普請する事あり。熱湯にて中々手をもさしがたきに、湯の藥師堂は村の後なる山にあり、此尊像を横になし奉れば、湯忽常の潮となりてあつきことなし。普請仕廻尊像を直し奉れば、又湯涌き出て常のごとし。かゝる奇瑞あることありがたきこと也。古き打身、新きは云におよばず、腰痛・脚氣其外瘡、何たる痛をも治せずと云ことなし。靈湯也。所口よりは和倉へ二里あり。津向村・松百・新保・祖濱・石崎より山道へ入。石崎村は加越能の海を釣・指網抔して、海上を家にしてかせぐ所也。公領也。祖濱も公領也。庄屋は室屋氏とて、よき百姓あり。松百は私領也。蛇のすしとて名物あり、がうなと云貝の鮓也。入海に渡せる橋あり、此邊風景也。此入海の奥に直津村と云あり。此氏神は海より上り給ふ大石也、少彦名命の像石と云り。此村より所口往還へ出るに近し。又所口へ松百村より行は、濱傳ひ津向村を經て出る也。

誰をしも松百の里に千代かけて海に渡せる橋の通ひ路

又田鶴濱より金澤等の往來を、西海道又は能登部海道とも

いへり。是を海道と唱ふるは、往古能登國は此道筋入海にて島國なりしが今陸地と成る、其海の跡故に云なり。村々多し。高田村、田鶴濱より近し。高橋氏の十村役あり。此屋敷は長家臣浦野孫右衛門屋敷跡にて、門前に馬場等あり。此村端に當國順禮廿一番の札所の觀音あり。出口に二宮川とて大川あり。長十一間の橋あり。又伊久留村近し。伊勢内宮御師松田三郎四郎持宮の神明宮あり。長家より二百石寄附有。百姓八軒あり。又町屋村、田鶴濱より廿五町あり。此村に助八と云百姓の持宮に住吉宮あり。是に疣池とて、明神の誓にて此池の石にてすれば疣落る也。又三階村と云に、北村氏十村役あり。又安淨寺とて、長如庵を十六歳まて新發智にて有し一向宗あり。此寺昔は孝恩寺とて禪宗にてありし也。又春木村とてあり。此村に昔春木・齋藤と云て鄕士の舘跡あり。今は一向宗林照寺の屋敷也。又羽坂村に鳥屋比古神社立給ふ、御神躰は金の鷄の由。神主高木氏也。市姫の社あり。一宮御神輿所の口より御歸座の時、一宮神主上指の鏑矢一筋北の方へ放つ也。又御神輿往來七日の内は灰汁をつかはず。是は昔氣多御神御通の時水を乞給ふに、取違へて、灰汁を奉りし因緣也と云り。亦此村の一向宗西永寺と云に、親鸞上人の御影自作の木像あり。又一青村近し。此村に昔弘法大師水を乞給ふに水を進ぜざりし故、井戸を掘ても食用に立水なし。又此村の孫十郎と云古き百姓の境内に尊菜出來る池あり。又黑氏村つゞき也。法泉寺と云御坊に、御名號等色々奇瑞ある寶物あり。七月盆中は弘めあり。又良川村は田鶴濱よりの馬次にて、二里廿七町あり。本馬百七文、輕尻六十三文、人足五十三文也。山田寺は眞言宗也。本尊春日の作也。即觀世音也、當國廿番の札所也。又上村能登比古神社立給ふ。祭禮毎藏十月廿一日にて、同所愛宕の社へ御幸あり。此村に一樂と云百姓ありて、此者廿日夜丑の刻に本社を開き、御神躰をおひ奉り、後歩みに歩むこと也。今は略して草鞋をさかさまにはき歩む也。翌日愛宕の社にて祭禮あり。神主は清水氏也。石動山神主兼帶して此村にあり、一國の觸頭也。又德丸村近し。長家の郭跡あり。又西馬場村近し。靈在山本道寺とて日蓮宗あり。後の山を筒ヶ岑と云、日像の上人開基の寺也。寺中に題目石とて石塔あり。則日像上人の書給ふこと

へり。此石塔をかきて水に入呑めば、癩病其外諸の難病治するゆゑに、石塔の面かけて過半ありといへども、題目の文字石に入て失る事なし。奇特なること也。此寺は昔二宮村に加賀左衛門・北左衛門とて二人ありて開基の寺也。日像上人を石動山の衆徒にくみて仇をなせし時、此兩人懸命に働き、此寺を建立して上人を置奉りし寺也。

此寺へ詣でし折から、藪深く鶯の音信るゝに。

うぐひすのしらべも清し所から

又能登部下村、河合氏十村役あり。長樂寺とて密宗の大寺あり。當國順禮十九番の札所也。此所を能登部と云に、島國の時渡り口成しゆゑの名と云り。又良川より金丸村へ直通り馬次も有。一里廿五町あり。本馬五十六文、輕尻三十三文、人足廿一文也。此村に鎌の宮とてあり。毎年祭禮に、此宮の神木のたびの木に、氏人新しき鎌を打込也。此鎌次第に木中へ入て節と成也。又此村に當國三十三所の十八番札所澤の觀音と云あり。谷内の人しれぬ所也。昔兵亂に人かくれ住し所とて不思議なる所也。又後の山を美女山と云て、千路の潟を見おろし、向うの山々を見渡し絶景至極なれば、美女山と云。此峠を越え上柳村へ出で、所々へ行往來あり。是を中道とて、往古の三崎までの往來也。又千路村近し。柳田村もつゞき也。是にも松尾坂とてあり。又同じ絶景也。中山村をへて瀧谷等への往來也。又此羽咋の潟緣を、千路・柳田村等をへて一宮へ行に近し。御幸の道筋也。此柳田村に光專山とて古寺の跡あり。觀音堂あり、本尊は運慶の作也。當國十七番順禮の札所也。又大町村・金丸村半道あり。此兩村に御收納藏あり。潟緣にて長家と畠山の殘黨と合戰ありし菱脇濱とは此所にてあり。又飯山へ金丸より一里十二町あり。本馬四十六文、輕尻二十五文、人足二十二文也。此大町村に御門主神社立給ふ。鵜浦村にもあり、いかにや。此處御收納藏は、長家領分の時よりの御藏といへり。田鶴濱・飯山共に五里餘あり。

爰に美少年ありて、風雅にして而も才覺也。予旅泊の徒然を語ると、良にして別るゝ日とは成りぬ。少年なごりをおしみて。

場班ら露か泪かあさもよひ　少年

乙鳥の名殘りいつかさて又　予

◎所口　田鶴濱より二里二町、本馬八十三文、輕尻五十四文、人足四十二文、山道にて人家なし、しかし道は平地なり。此所口は一國の府にして、諸商賣の問屋等あり。家數六千軒と云ども四千軒計あり。町奉行支配にて一方在住。御鹽奉行一方在住、是は口郡破船奉行兼帶あり。小代官六人、町付足輕十人、山廻り役四人是は宇出津山奉行の支配也。町年寄六人、惣肝煎兩人、銀座一人、其外諸役人多し。古き町人あり。中にも氷見屋何某は、一子淨寂坊と云者利家公石動山御攻の時一命をすてし者にて、今屋敷千歩・田三段頂戴罷在。其外酒見・富田などゝて古き町人あり。又府中町は利政公の御城下にて、是にも湊屋佐藤左衛門とて古き者あり。當處名物多し。中にも羽衣とて酒の名物也。清水米・百日紅・豆飴、其外魚鳥產物に便よき國府也。利政公の御城跡は小丸山と云にあり。御收納藏奉行御貸家等は大馬出と云にあり。御預所陣屋は登落と云にあり。又寺庵多し。禪宗九ヶ寺・眞言宗三ヶ寺・淨土宗四ヶ寺・日蓮宗十三ヶ寺・一向宗十五ヶ寺あり。何も畠山城下にありて、由來寶物等あり。淨土宗寶幢寺と云に、平の重盛卿の守り佛、同遺物等あり。又松尾山神宮寺は、印鑰大明神とて御神躰は多門天也。今別當最勝坊は眞言宗の妻帶也。又光德寺は西方一向の院家也。一國の錄所にて町中にあり、大寺也。此寺鳳至郡三井の鄕にありて、梅山和尙の開基、惣持寺近門の禪宗なりしに、中比改宗ありて此所へ來り建立ありし寺也。則今其處を興德寺村と云り。其時の什寶とて、梅山和尙へ龍神の捧し滿珠乾珠の玉・唐織の袈裟とて、當所禪宗龍門寺にありて、則今惣持寺近門の寺也。然れども光德寺は金澤より引越の寺にてあるよし、いかにや。又密宗妙觀院は小島村にありて、一山菊名石也。其上境內秀景限なし。又向の山愛宕も同宗にて、是又風景也。又辛崎とて、昔畠山氏の江州辛崎の風景を移せし宮あり、風景也。所口氏神氣多本宮は所口村にあり、小名に神明野と云に建給ふ。一國府の惣社にて、能登生國玉比古神社是也。御社領十二石、神主船木氏兩家あり。昔は社領千石、兩部習合にて社人・神子・社僧等多く有し也。別當所口寺とて、國分寺にて有し也。神代より鎭座にて、昔の社地は後の愛宕山と云にありしを、今の地へ兵亂に中絕ありしを移し奉りし也。今も

神主入口に一國一ノ宮國分寺と札打あり。廻國納經は此處に納る也。毎歲二月初午、一ノ宮氣多大神宮御幸あり。色々古式不思議の奇瑞等あり。又當社祭禮は毎年三月十三日也。氏子中歌舞伎などあり。其外年中神事多し、賑はしきこと也。六月晦日御手洗川にて御祓の大祓あり。依て晦日川と云也。亦東西へ流るゝ故に二俣川とも云て、所口町中へ流れて所々橋あり。源は田根村山より流て、府中の濱へ出る也。又府中村山王權現は神主大森氏也。毎歲四月中の申の日は祭禮也。利政公よりの神事にて、國府の大祭也。本宮へ神輿御幸あり。町中御領分一の大きなる立物山あり。にぎはしき事おびたゝし。亦岩屋の水とて冷水あり。洞の內に水坪ありて、所口數百軒の酒屋其外多の民家汲むといへ共、纔の水坪のかわく事なし。不思議の靈水也。其洞の有さま、松山の風情、下行水の淸き事風景たぐひなき所也。一山窕にて、洞の奧深きと見えて、鰍と云魚ぬしとて多あり。

幾千年汲とも盡じ淸くすむ岩屋の水のながれ久しき

此所口は七尾と云て、昔城下にて松尾山の古城の麓にありて、今も古七尾村・古屋敷村・古城村などゝて少し山手にあり。又七尾と云しことは、此城山に菊の尾・竹の尾・梅の尾・松の尾・龜の尾・虎の尾・龍の尾とて七尾あり。依て呼へり。惣名は松の尾山と云り。此浦邊を松尾浦といへり。外に松尾浦と云はなし。定家卿の歌は、たゞ人を松尾と云に懸しとあり。若此うらの事にてもはぢぬ風景也。尤此所にてはなけれども。

こぬ人を松尾の浦の夕凪にやくや藻鹽の身もこがれつゝ

又往古より此松尾城は國府にして、代々の人居城せり。仁和・寬平頃、源の順と云し人代官として居城あり。夫より武部判官師澄目代として、久安・仁平の頃住せり。其後建武・延元の頃中院少將定淸國司として居城あり。永享の比より元龜・天正の比まで畠山氏數代居城たりしに、天正の末文祿の比利家公能州一國御手に入、此七尾の城下を今の地へ移し、所口と改名ありて彌々繁昌せり。

陰茂き松の尾山の松のはのかくともつきぬ君が萬代

勒文

此勒文と云しは俳人にてすゞの海の作者也。誠に風雅の人也。子孫今に富田氏にて所口にあり。又此城山に享保の比ふしぎあり。府中に室屋兵衛とて大百姓あり。此城山を畠に開く事を願上、則願ひ叶ひて多く人夫をのぼせしに、此山に數千年經る槻木の大木あり。此木を伐らしむるに斧の切口より血流れ出たり。杣共おそれて伐事をせず。兵衛此事を聞き、安からぬ事と思ひ此山へ登る。半途にて俄に雲かきくもりて、兵衛を虛空へ摑み行、暫ありて山の麓へ落す。其體微塵になりて死けり。又其夜大槻木は自然に根返りして倒れけり。其槻木今に根は空になり、枝は地に着て、其儘人も邊りへ不被寄也。

案ずるに老木を伐るに必汗を出す也。其色極て赤し、血のごとく也とあり。又老木の精あり、形ち黑き狗のごとくにて、煮て喰ふべし。是を彭候と號く、壽命の藥とあり。

又藤野村は城山の麓也 侍從利政公の御塚あり。御位牌等は、御菩提所の所口靈泉禪寺にあり。此寺は寺領十五石七斗五升、畠地七百八十二歩、高に直し三石二斗五升八合拜領あり。この村に一言の觀音とて、病難を救ひ給ふこと靈驗あらたなる事あり。

此城山の麓なる聖廟へ菊月末の五日に詣て。

松高し神の御庭の下紅葉

又矢田村近し。清水寺とて密宗あり、靈佛の觀音は春日の作也。此寺大同年中開基にて名瀧あり、御瀧とて瀧坪二ツあり。諸人歩を運ぶ也。所口清水米は此所より始れりといへり。又此村に明星舘とて同宗あり。伊勢の内外の社あり。是は安倍宗任草創の寺とあり。又所口より磯傳ひ鹿渡島に行、口渡りなどする往來あり。澤野村近し。午蒡の名物也。又太田村は所口より廿町餘あり。海門寺とて禪宗あり、寺領三十俵也。昔は畠山氏の菩提所にて、寺領三千石也。其寺分の寺代官の筋目の百姓に三郎太郎とてあり。此寺を海門寺と云ことは向に島の端陸の端出合て、こなたよりは漸二三間に見えて、此寺の門とみゆる也。依て海門寺と號す由。又此村より三室村へ二里あり。福浦・吉野・間とて三ヶ所へ別れてある村也。此福浦より向島の路日出ヶ島村へ小口の渡りとて半道あり。舟賃一人に三分充也。宇出

津等への往來也。此邊の風景言語にのべがたし。向の島の路を淡路島と思ひ、三室・七尾の磯を須磨・明石に擬す共おとるまじきなり。萬葉集に。

能登の海に釣するあまのいざり火の光にいゆく月待がてら

亦鹿渡島とてあり、三室村の浦續也。此灘の尾なるゆゑ角（カド）島と云事也。此崎を廻れば中山の郷なゞゝて灘に十三ヶ村あり。越中氷見へ出る也。此角島に觀音あり、靈驗ありて龍燈折々あり。椿森共椿寺共云。坊守觀音院とてあり。磯に舟の懸り間あり、水石の名物也。此處を廻り、灘傳ひ村數十三ヶ村の内八ヶ村公領也。所口より氷見までは、此灘廻りして十一里あり。難所云ん方なし。黑崎村に火打石の名石あり、今は御留山也。又鵜浦村は一宮の鵜祭の鵜取て捧る也。鵜田と云て神地あり。當屋の者田を作り、鵜捧る也。此村より一宮まで十三里。此謂は、昔北島の女神此磯に寄給うて、一宮の御神と夫婦に成給ふ。其後御中惡敷也、越後國能生へ飛給ふ。委くは一宮の所にあり。此村に御門主神社立給ふ。又山崎村と云に阿良加志比古神社立給ふ、少彦名命の像石也。又庵村に堂見と云所に、石動山權現を移し奉りていかけ山と云。本名は笊籬山也。昔五十四坊ありし也。今は權現社別當三坊あり。又山崎村奥村に鵜目嶽とてあり。觀音堂あり。當國順禮三番の札所也。難所ゆゑ大方は鹿渡島の觀音に札を納る也。角島より氷見境大泊村まで六里あり。次の村は脇村と云て、是は越中氷見の庄也。

見せばやな君を松尾の浦震島かくれ行船ぞつれなき

又島の路は長五里幅一里半、村數廿一ヶ村、一向宗十一ヶ寺。惣名を袋島と云。名所記抔には只能登の島山とあり。萬葉の歌に。

こぶさ立舟木伐るといふ能登の島山けふみれば木立しげしも幾代神びそ

此歌は、伊夜比咩神社にて始て船木を神詫ありて伐し所と云り。伊夜比咩は二穴村の神明宮也と云り。今は向田村の八幡宮をいへり。昔は鍛目八家の庄とて八ヶ村ありしと也。其昔泰澄大師の御弟子臥りの行者は、此島の路の人にて、元亨釋書ニ云、大寶二年有二少沙彌一自二能登島一來ㇾ謁ㇾ云々。

臥ニ雪裏ニ澄名テ爲ニ臥行者一ニとあり。

此行者の母の住る所を祖母ヶ浦と云て、其塚と云て今にあり。此ふせりの行者は朝暮眠り暮して靈術あり。常に住ける所を閨村と云、寢島とて觀音堂あり。昔は大樂寺とてありしに今は寺なし。此觀音は、臥の行者の鉢の子の中に觀音の像ありと云り。靈像にて奇瑞あり。又元亨釋書ニ曰、逢ニ北海積船一飛レシ鉢ヲ乞レフ供ヲ云々。是臥の行者の鉢の子飛行して沖漕舟に供物を乞ふ。其至る船の者共供物を與へしと也。或時出羽國公米千石積し舟此沖を通りしに、此鉢の子來りけれ共、上乘せし淨定（ヤスサダ）と云者一粒もゆるさずありしに、千石の船中の米忽ち虛空へ飛行。此事を臥の行者へ淨定なげきければ、行者の曰く、其米我師へ捧し也、石動山へ行き我師に其事を申べしとありければ、淨定山上しけるに、石動山の講堂の前に千石の米積てあり。淨定是より發心して、泰澄大師に仕へて木樵・水汲ありて修行せしと也。去ば泰澄に淨定・臥りの二行者ありて、泰澄の曰、淨定の身行は安し、臥りの心行はかたしとありしと云り。其鉢の子の至る所を今鉢ヶ崎村と云。又日ヶ出嶋村は筆ヶ島也。ヒ・フの通ひの誤りにて、今日出ヶ島と云り。此能登にはヒ・フの假名物毎に違て、たとへば屋根フクをヒクと云、綱引をフクと云り。是も沖に机島とてあり、是に對して筆ヶ島なるを今日出ヶ島となれり。

實も此所の風景にめでゝ。

およびなき筆の浦半の春邊かな

又野崎村御藏所にて高札場あり。島の路にて千石高は此村と向田村計り也。亦向田村は大村にて伊夜比古神社立給ふ、大社也。御神躰八幡宮なり。昔御神躰十二月三日蛸に乘りて、此村の三郎助と云百姓の前なる平石と云上へあがり給ふを、高の愛宕と云山へ移し奉る。今も蛸のごとく云て、十二月三日に毎年祭あり。又奇瑞ありて今の社地に奉レ移也。當社寶物色々あり、月星の玉とてあり。此玉は此村の谷内より出し由。其所を明星の谷内と云。寶劔の鍔とてあり。又牧の駒ありて、此所の池水に來りて住む駒あり。是を此神馬にしてありしに、類ひなき名馬成ければ、時の將軍賴朝公へ召れ、名を池好（イケヅキ）と呼び寵せられしは此馬也。其時賴朝公よりの下し文の判形の物あり。並に梶原等の判形の添狀あり。其外は略す。神主船木氏也。今も此池好の出し處とて牧野の跡あり。又此村に蝦夷の岩屋とてあり。昔蝦夷の大男とて異人の住し洞と云り。亦別所村とて山の中に一村あり。此村へ行く道に牛の爪坂と云てあり。是に蝦夷の大男の手の跡とて石にあり。又須曾村に衣川と云あり。鮭の魚多くあがりしを、蝦夷の大男取て食物にせしに、或時臥り行者來り、大男にさけの魚をくれとありしに、大男惜みて得させず。其時行者。

きのふきつけふもきてみる衣川すそ綻びて鮭もあがらず

斯くありければ、其後鮭一尾もあがらず。彼大男喰物に飢て蝦夷ヶ島へ行しと云り。其外樣々物語所に云り。略す。

向田村に昔般若院とて大寺ありし、其礎・踏段石抔其儘あり。其外釋迦堂・愛宕抔とて地名殘れり。今一向宗十一ヶ寺は、過半敎院成しを改宗ありし也。又鍛目村と向田村に城跡あり。畠山の取出の由。鍛目村に當麻氏の十村役あり。此村に嶽の宮とてあり、菅忍彦神社と云り。又二穴村に神明宮あり。北島神明宮とは是にて、伊夜比咩神社と云り。又此村を二穴村と云は、磯山の腰に洞二つあり。沖にて難風に逢ひし船、此洞に入て凌也。又泊り村と云には船の間あり。通村と云は、指出る崎に長者ヶ端とて、昔長者住て今に長者屋敷あり。寶を納し所とて、三錢塚なゞ云あり。今に礎・石垣なゞあり。梶の端とも云るもあり。陸へ近く渡しある故通村と云。高茂の渡しと云て瀨嵐村へ渡る也。又小浦村と云て、野崎と長崎浦との間にありし也。此村年貢未進して、一村丹に乘、行方なく退轉せし也。越後國へ渡り、今も小浦と云て鹽燒あると云り。惣じて此島の路は人の氣質愚にして柔和也。然共近くは金澤より流れ人有て、物毎に賢くなり、今は所口の者も手こりする程也。

此島の路の旅寢に。

風のいる戸に明方や浦千鳥

又所口近在の藤橋村と云に、山岸と云百姓あり。蓮如上人の筆の物を傳へて、毎年三月廿五日に弘めあり。有江村の一向宗の榮林寺に、聖德太子の靈像あり。又國府村の高井と云に、金谷水と云て名水あり。是は所口岩屋の水の源と云り。脇に獅子ヶ岩とて獅子に似たる岩あり。又在江村に實

盛の塚とて古塚あり、言誤りにや。又武部村に眞舘氏十村役あり。

◎二ノ宮　所口より二里十七町、本馬八十二文、輕尻五十文、人足四十二文、家數百四十軒計あり。此村天日陰比咩神社立給ふ。則二ノ宮大明神と云。神主船木氏也。其昔天子に啞の姫宮ありしが、此石動山へ籠り給ひしを祭り奉りし御神躰也。又北左衛門・加賀左衛門と云て、日像上人に歸依して馬場本土寺の開基日那の筋目あり。又利家公石動山御攻の時討死の塚あり。又二ノ宮川あり。往來に長十間餘の橋あり。川上は石動山より一筋、芹川村山より一筋流て、下は川尻川と云て田鶴濱の海へ入也。

又石動山は二ノ宮より一里半登る也。一國第一の高嶺也。昔此山は天より星落て石と成。天漢石と號す。今講堂の前にあり。開山泰澄大師養老二年登山以前は、此石ゆるぎて山震動してあれしに依て石動山と云り。本社五社權現は伊須流伎比古神社是也。大宮は伊弉諾・伊弉冉の兩神也。火の宮は大物主命、劍の宮は市杵島命、梅の宮は天目筒命也。五神五社也。本地虛空藏・十一面觀音・正觀音・大聖不動・倶利伽羅不動の五尊也。倭漢三才圖會等に出たり。天智天皇勅願所、養老年中の草創、開山泰澄は越の大德とて、姓は三神氏、越前の麻生津の人、母は伊野氏、父は安角と云。母夢に白玉入レ懷而有レ孕、白鳳十一年六月十一日生る。十四歳の冬越知峰巖洞中において自ら薙髪して、松葉を食し年を積み神通を得て、能登の臥り出羽の淨定の二行者相隨ふ。神護景雲元年三月十八日遷化也。八十六歳。委は元亨釋書に出づ。當山開闢の事は、泰澄大師天平の比、上は公卿下は庶民死する者多し。勅命有て大師加持し給ふに、其驗あらた也。さて大師勅定を受て神社佛閣建立あり。爰に天平寺も建立有て石動山と號す。次第に繁榮して坊數も三百六十四坊ありし處、中比衆徒越後の謙信方に與みして、利家公に敵せし所不叶して、張本の般若院・寶達坊・萬藏院の三惡僧を初め、同心の衆徒講堂の前にて被誅、首共を芝ヶ峠と云にて梟首あり。夫より衰微して、敵對せざる坊今の五十八ヶ坊は其儘被爲置たり。此五十八坊も、山一里東笊籬山といふに權現を移奉りし所にありし者ども云り。神主二人今にあり。大森氏は山に在住、清水氏は今上村にあり。大宮坊の看司は東林院と云が兼帶也。世々勅願所として、毎歳三度の御撫物を禁裡より御納あり。同正・五・九月の御祈禱の札上る也。北陸七ヶ國の大社、御朱印を以毎歳三度の智識米とて勸進あり。社領百五十石、本社御修覆あり。今又繁昌して諸堂諸坊結構也。毎年三月廿四日・六月四日は權現の祭禮にて、於講堂大般若經講誦あり。人形立物山等ありて賑はしゝ。此日諸人多く登山する也。誠に大地と云ひ靈山也。委は明暦年中に林羅山子の書れし緣起にあり。本道此二ノ宮より登る也。一里半の道程、芝山・裸谷・四ッ谷・阿彌陀ヶ嶺・護摩堂抔とて、難所の古戰場あり。裏道七尾の城山の脇より登り、田根越とて所口より三里あり。又田根村とて、石動山の寺領百姓あり。此村に石動山へ勅使の宿せし者の筋とて、百姓に四位と云者あり。石動山より越中氷見へも三里あり。石動山一山は松木一本もなし。是は此山の山神、螢山和尚に松木を參らせしとて、永光寺には松多くあり。

或時此田根越とて登る折から。

ほつ〳〵と男苗植る山田かな

又越中へ越ゆるは芹川村より登る也。荒山越と云。氷見迄五里あり。荒山村は越中也。所口より氷見迄八里あり。此荒山村に、石動山の天漢石の三つの其一つとて大石あり。此あら山越は高嶺の難所也。俳師美濃の見龍と云る人此所を通りて。

あら山や鬼も近付きの百合の花

又二ノ宮より井田村近し。往來に橋あり。此川上に御瀧とてあり。此瀧の不動尊靈驗ありて、此瀧に打るゝ者諸病を治する也。人籠る也。脇に熊野權現の能き社あり。別當圓光寺と云て眞言宗也。瀧本と云て名茶あり。又此村の百姓に新四郎と云者の境内に、舟山と云てあり。此小山の根に昔より石の唐櫃あり。是を穿ち抔すれは凶事ありとて深く隱してあり。

又芹川村近し。兵衛と云て十村あり、櫻井氏也。又この村に蛇池と云ておそろしき池あり。

又水白村に平相國清盛の末子三河守知敎の塚あり。則壽永二年此所にて木曾勢と戰ひ討死有し也。俗に兜塚と云へり、いかゞ。山際古木の松の下にあり。

又小田中村は高畠へ近し。往來の際に親王の龜塚と云て、誠に龜形の塚あり。往古は此邊は入海の磯邊成しとて、此塚に物語あり。所に云傳ふる儘爰にしるす也。昔此里に入左近と云者の子に太郎と云ものあり。或夜の夢に觀世音枕元に立告て宣ふは、我を連れて唐へ渡るべし、國王と成すべしとあり。夢覺てみれば、小佛の觀音の尊像枕元にあり。うたがふことにあらねば、尊像を守りとして、いづち共しらぬ日の筑紫潟より便船して、終に唐土へ渡りけり。其頃唐土に或國王の獨り姫宮あり。方々より太子を取迎へ給へ共、此姫君と契て命全きはなし。後にはいかなるものにても、此姫君と契りをこめ無恙者には位を讓るべきとの宣旨あつて天下にふれ給へども、王位も命ありてこそと云て望者さらになし。彼太郎又觀音の告ありて其事を望むに、帝望にまかせ給ふ。太郎姫君にまみえて、先勝木を以て削だる男根を以て陰門を試るに、牙ありて其木をかじる。後には木にくだかれて牙落て常の陰門となる。夫よりちぎり淺からず、太子も數多出來給ふと也。其後古鄕床敷思はれて、歸國ありたき由を觀音に祈り給ふに、告有て海邊に出給ふ所に大成龜來れり。是に打乘給へば、忽ち故鄕小田中に歸着あつて、年月立ち崩じられたり。里人是を祭りて所の氏神にあがめ、上の岡に社あり。又五町計山奥に守りの觀音堂あり。又其龜の形を塚に築て、骸を納て今親王塚と云り。近年此塚を穿て田地にせんとて、廻りの堀の半を崩すといへ共、此塚に色々不思議ありてやみしと云り。則木曾殿親王塚の前に陣取ありしと平家物語にあるは此塚の事也。中比謙信も木曾の吉例にまかせて、此龜塚に陣取有しと也。

萬代と限らじものを龜塚のためし久しき名にぞ有ける

又越中氷見灘の南村と云に奥しれぬ洞あり。是此親王塚に通ひたると所に云り。昔此洞より家具を貸たると云。或時かりし人あしき事ありて、其後は其事なしと云り。惣じて穴より家具を貸したる抔云事所々にあり。案ずるに戰國の折穴などへ器財を入置しを、いつしか狐狸の類ひ持傳へて、さまざまのわざをなすと見えたり。

◎高畠　二宮より一里二十町、本馬五十四文、輕尻三十二文、人足二十七文、家數百軒計。此村に太郎左衛門とて、

長家などへ由緣ありて古き者あり。又當國三十三番順禮十一番札所常樂寺とてありしに、今寺なし。本尊觀世音は此村伊勢屋と云者の方に安置あり。依て伊勢屋の觀音と云。又當國觀音順禮八番札所練ヶ谷觀音は寺なし。八町計山へ登る也。あら木の山刀(ナタ)作りの儘の尊像六躰あり、運慶の作也。江曾村の山にてあさまなる堂也。

又酒井村は二村になり、永光寺の門前は寺酒井と云。又洞谷山永光寺は曹洞宗瑩山和尚の開基、後醍醐天皇の勅願所にして、其比は近鄕邑知七十五ヶ村寺領ありて、三萬石とあり。大伽藍にて今一山に其礎あり。往來より少し登れば觀音あり。當國十三番の札所にて、圓通院と云し也。其昔瑩山和尚行脚の折、此堂に夜明し給ふに、觀音の告にて登山有し也。此堂よりは寺へ七町計あり。其時は教院の地なりしに、山神ありて此山を和尚に與へければ、此所に一宇を立て住給ひしに、和尚の德行四方に響て、無程大寺と成る。勅使等度々成しが、中比の兵亂に炎上して、今は其時の十ヶ一にもおよびがたし。參内・綸旨・轉衣等の事も皆此寺にありしを、當寺四世峨山和尚惣持寺へ移り給ひて、今莫大の違ひ也。峨山和尚は惣持寺にては二世也。當寺にては四世也。併し今も諸堂立並びて、寺領二十石、開山地にして勅使橋等あり。寶物品々あり。中にも禁裡より御預けの摩耶夫人の御骨あり。是は天子の姫宮禪尼の、此寺を歸依ありて山上ありし御遺物の由。此尼公は此山大日邪にして、種々傳へあり。又一宗五開山の骨あり。峨山和尚凡俗の時盜賊たりし血刀・女の髪等あり。其外は略す。又十町山奥に瑩山和尚の座禪石あり、名所也。五開山の塚あり。羅漢影向樹とて大木あり。境内に十境あり、瑩山和尚の詩頌あり、略す。爰に十境一躰の詩頌を記す。掛鞋榎・烏石谷・巫女原・運水峰・勝蓮峰・踞猿嶺・粟生原・飯盛塚・集雲峰・埋死谷是也。詩曰。

洞谷山中有二十境一。永光影外揚二佳名一。踞猿嶺下對二江轉一。運水峰頭見二月明一。巫女原間人也隔ッ。粟生野上二佛種生ス。掛鞋榎樹作ニ叢席一。埋死岡丘建二法城一。
烏石溪邊相見舊。稻荷林際道風聲。集雲深處龍蛇聚。向二飯盛塚一誰更耕。

又瑩山和尚常に牛に乘て巡堂ありし其牛の、菩提侘羅と云

山神になり折節顯れ出ることあり。誠に此地境は山深く、前には羽咋の湖水渺々として眞如實相の月澄み、嶺松巍々として風常樂の夢を覺すとは此靈地にして、閑靜いはんかたなし。又一山松茂りて古木多し。是は石動山の山神が瑩山和尙に松を參らせしとて、石動山に今一本もなし。又峨山和尙此寺の勤を仕廻ひ、惣持寺へ行每朝勤め有しとて、其通ひ給ふ道と云て、所々の山中に峨山道と云あり。今に草生せず。此酒井より櫛比までは十五里あり。其外此寺は惣持寺よりさきにして、轉衣等の寺務此寺にありし靈地也。委くは此寺の秘書洞谷記にあり。

我ら洞谷山へのぼりし時、寺中に知れる僧ありて、暫く我を見おくり給ふ折から、女郎花のさきけるを手折らんとてつまづき給へるに、不計我をりにきと人にかたるな女郎花と云遍照の古歌を思ひ合て。

つまづきし僧の心や女郎花

又中川村近し。太郎右衛門と云て利家公より御扶持頂戴の者あり、山廻り役也。又菅原村に天滿宮の大社あり、護國山菅原寺と云。社領九十俵也。別當成喜坊・遍照坊と云てあり。社領の內十五俵あて配分あり。□□氏の神主あり、內十俵配分あり。殘り五十俵は御修覆料に除知あり。昔は勅願所にて大社成しに、度々の兵亂に緣起等も退轉ありしと云り。中比利家公御合戰の御勝利を此御社へ祈り給ふに、靈驗有しより社頭御建立あり。御社領も御寄附あり。菅原の姓の始りは此所より起れると云說もあり、いかゞ。又此村に行長と云て、利家公より御扶持頂戴の山廻り役あり。又此山手に吉野屋堤とて、四十八谷へ入込し大堤あり。又土橋村に新兵衛と云て、利家公より御扶持頂戴の山廻役あり、藤江氏也。同姓に庄右衛門と云又山廻り役あり。

◎飯山　高畠より一里十八町、本馬四十九文、輕尻三十文、人足廿四文、家數九十軒計。爰に飯山川あり。源は越中氷見の庄輪田村打越より流て、羽咋の潟へ入る也。又白瀨村は少し山の手にあり。白狐林豐財院とて禪宗あり。此寺は昔瑩山和尙、洞谷山中の石上に座禪の時、白狐來りて奉レ仕。此白狐此所に數千年住て、終に和尙の法味にあづかり、佛果を得しとなん。則瑩山和尙此所に一宇建立有し寺也。夫より代々知識住持せり。尊き靈場也。中にも月潤和尙は

稀代の祈願を發し、血書の大般若經六百卷あり。同血佛の三尊あり。其時用ひられし硯・金の小刀あり。誠に有がたき寶物也。此村は公領・私領入交りてあり。

又福水村は公領也、近し。飯山川の緣にあり。此川中に金輪際に通じたると云て、掘盡し難き石あり。平生は水の上へ七八寸も放れてあり。此石上に穴あり。夫より水涌き出る也。依て福水の名あり。又往來の山手に戰場ヶ端とてあり。邑知七十五ヶ村目の下に見おろし、羽咋の湖上は手のごゞく程の無類の風景也。壽永二年平家の軍兵木曾義仲とたゝかひし古戰場也。亦天正の比、越後の謙信方の勢長家などと取やりの時、長氏の陣取ありし所也。

又杉野屋村は往來より少山の手にあり、土屋氏の十村役あり。又吉信と云百姓あり。此村の氏神は運慶作の不動尊也。又一里山奧に千石山と云に、大寺ありしとて伽藍の礎あり。此所に大なる像の多門天あり、運慶の作にて堂計りあり。是を千石山と云は、往古大豆一本に千石實のりしゆゑ名とすと云へり。此所より氷見へ越ゆるに五里あり。又鉢伏山とてあり、郭跡あり。是は末森の城の取出成由。鉢伏山と云は、瑩山和尙の鉢の子を納めし山なれば也と云り。

◎子浦　飯山より一里十五町、本馬四十九文、輕尻廿九文、人足廿三文、家數八十軒計あり。此所は昔より驛にて、初は志保と書し也。則志乎神社立給ふ。志保の庄十ヶ村の宗社也。此村の丸屋と云者の方に、天明年中告ありて、井戸より長三寸許の座像の觀世音の金佛あがり給ふ。又金屋左衛門とて古き百姓あり。家傳の燒藥あり、痛・切疵に吉。又子浦川と云てあり。往來に長十七間の假橋あり。源は寶達原村より一筋、當熊村より一筋流て羽咋の潟へ入る也。此所より氷見へ越ゆるを、巡見上使道と云て往還也。又昔壽永二年五月平家と木曾殿の合戰にも、倶利伽羅・志保の軍とあり。三河守知敎なゞ討死は、高畠よりあなたなれゞ、此志保は其時分より本驛也と見えたり。

又荻ノ谷村、岡部氏の十村役あり。又齋藤氏先年より數代在鄕あり、十人扶持被下也。惣じて此邊往古は入海にてありしとて、荻ノ島村・荻ノ谷村・敷波村などの名ある由。

予柳瀨とやらん云片里に、不時成る公務にかられて一夜二夜明しけるに。宵の間に音信るゝ鹿の音もめづらしく、

かゝるあさまのたびねの得こ、今一聲も聞まほしく思ひしに、更行まゝにいこもせはしく鳴つゞひ侍れば。

我をしばしいほねをさせよ鹿のこゑ

敷波村は往來也。公領・私領別れある村也。大蓮寺こて日蓮宗あり。公領の庄屋に松永道法こ云者あり。古き百姓のよし。又太右衛門こ云能き百姓あり。此村の藤七こ云者の方に、不思議なる大黒の古き木像あり。又往來に峨山松こて古木一本あり。今誤りて枝葉異なる故笠松こ云り。是は峨山和尚凡俗のこき、强盜有し物見の松成ゆゑ峨山松こ云由。

此峨山松にて。

幾秋か心の松の一木かな

又宿村こ云てあり、往來也。今濱へ近し。昔は今濱村なゞの宿なかりし時、此村驛にて、末森の城下に有しに、兵亂其上田地砂に埋りしなゞにて退轉し、一兩家殘り在しが、その後次第に家出來て今はよき村也。又末森の城跡は、宿村の向敷波の高にあり。往來より八九町あり。今は畑に成てあり。今に色々の怪異あり。雨降日は獨は里人も不行こ云り。又相見神社は近鄕の宗社也。末森の麓に立給ふ。是より寶達の麓押水三鄕の村々多し。

子浦より今濱まで道程一里十五町、本馬四十六文、輕尻廿九文、人足廿三文也。是よりは上卷の所にしるすなれば爰にしるさず。

能登名跡志後編

一、鳳至郡石休場村神田川こいふ瀨中に石あり。此石にさはる者あれば怪我する事年久し。所の者餘に不思議に思ひ、明和二年の春此石を掘穿ち見るに、裏に紅糸の筋有て、自然の五輪のもやうあり。圓鏡のうちに梵字あり。里人おそれて、數十人懸り遙の氏宮の社地へ移して、神鏡石こ號す。今松が根に建あり。

一、同郡輪嶋崎は潤所にて、高の山を長月山こいうて松柏茂り、蛭子・金毘羅の兩社あり。常に天狗住めるこて、志し參詣の者の外餘り登る者まれなり。脇に渡海船のため燈明堂あり。是は村の中淺津屋何某裁許して、夏中此燈明堂に火を燒く老夫あり。以前は每夜怪敷者來りて、火くれ、無左は立退けなゞ、いろ〳〵六ケ敷事をいへゞも、火も我も公儀のものなりこて、此老夫聞入れずあれば、怒て燈明堂共に遙の海へ投込みなゞすれゞも、心地のみにて實にさるこゝはなし。後には來るこいへゞも、何事なう物語りなゞして歸る事度々なりこいへり。惣て此近邊の者、夜中沖の七つ島・舳倉嶋なゞへ折々魘はれ行き、其外晝も畑に居る者にいろ〳〵希有なる事あり。皆此所の天狗の所爲こいへり。

按ずるに、砂石集に、天狗こいふ事咫尺の中に見及ばざる名目なり、日本に申し出したる許なりこあり。然ゞも古き物に多く天狗のこゝあり。喩ば轉聞錄に、陰山有ㇾ獸狀如ㇾ狸名二天狗一食ㇾ蛇こあり。又天狗は星にして太白星こも大流星こもいへりこあり。日本にも舒明天皇九年二月天狗星あらはれし事あり。又釋書に、天は天曼荼羅金剛界、狗は地曼荼羅胎藏界こもあり。悟は天、迷は狗なり。悟りて迷へるなるべし。諸道の長者諸宗の行者、慢心によつて天狗こなれる事種類多くあり。日本紀に、天狗こ書てアマツクツネこ讀めり。天狗又天狐こも書て通ひ用ゆる也。又八坂の寂仙上人の七天狗の繪こいふ事あり。しかれば三朝に其名なきにしもあらじ。

一、氣多一宮の大宮司櫻井監物は、座主長福院こ爭論ありて、訴訟の爲に金澤旅宿にゐられしに、即知る人にて訪ひ

ければ、監物ものがたりに、此度の公事は、此方十分の理分といへ共、あらたなる告げを蒙りし事あり。今我等相手にする所の者は、我家に仇ある者の再來にて、畢竟我等命にも家財にもかゝはるべき由御告あり。され共あづかりたる職分なれば、覺悟にて仕る公事なりと申されし事、殊勝にもいさぎよき了簡と思ひしに、果して公事未決にして牢死あり、家も斷絶有り。其上仇ある櫻井信濃の類家同姓多膳といへるに、大宮司職・觸頭等も安永年中仰せ付られし事不思議に思ひ侍り。

一、鳳至郡當目村に昔狒々の靈を祭りて、岩井堂というて猿鬼の宮といふあり。同郡道下村に壽見といへる醫者あり。此猿鬼の宮を見物し、社を開き神體の木像を出し、きせるにて頭をたゝきければ、其儘顚倒して即死しけり。おそるべき事也。

一、同郡中居村の神明ヶ端といへるに、天竺桂の古木あり。其下に石體の汐汁地藏とて、瘧を病む者潮を汲懸け立願すれば、落る事あらたなり。此たびの木に怪異あり。則中居村の米村宇右衛門といふもの、ある時所口より夜船に乘り中居へ渡りしに、七尾の城山より火の玉來りて、乘たる船の帆柱に當り碎けしと見えしに、女の首となり飛去り、此たびの木の本へ落けり。又沖よりも火の玉來り、初めのごとくして此度は男の首となり、同じ處へ落けりと。則宇右衛門勿語り有けり。

一、予先年羽咋郡吉田村といふに泊りけるに、宿に南京燒の皿鉢多く持傳へり。其外此國に多くあり。是は昔此邊より、北高麗・廣東迄も商船渡り交易せしといへり。近年も鳳至郡黑嶋村の船、同郡深見村の猿山を二・三里に見て南風に落され、二日一夜に北高麗へ着岸して、船も人も恙なく歸帆せし事あり。此國より酉・戌にあたり、海上百五・六十里あるよし。

小春の空に。
旅心日はくれやすし歸り花
初しぐれ旭にのこる松の色
二つや村を過るに。
鍋洗ふ川の向に鳴千鳥
赤土や霜消えのこる馬さぐり

ある軒に休らうて。
蟀のよろばふ冬の日南哉
相見の宮森にて。
今すこし櫻淋しき小春哉

一、鳳至郡浦上村に澤氏の醫師あり。病死して葬式七日の追善も濟しけるに、此者何方ともなく家に歸り來れり。家内の者ども驚き窺ひ見るに、衣裳ものごし常に替る事なし。おそろしく不思議なれ共、ゆかしくかなしきにひかれ、妻子起伏の給仕して有けり。或時外より手酒を貰ひてすゝめければ、心よくのみけり。翌朝下男厩へ行くに、軒に古き紮頭巾をかぶり醉臥し居たり。扨は曲者なりとて棒にて打ちければ、驚き逃げさらんとするを、追つめ終に打殺しけり。其後來る事なし。いかにといふに、下女前の川にて衣裳洗ふとて、頭巾を取わすれ歸りける。夫より怪異をなせしものといへり。

一、珠洲郡上村の紺屋といふもの死して山に葬しに、其塚へ晝夜幽靈出で、見る人毎に正氣を失ひ絶氣して、村中騷動する事すくなからず。いろ〳〵加持祈禱すれ共しるしなし。其比隣村松波村萬福寺といふ禪宗に圓瑞和尙とてあり。此方に賴みければ、斃馬の頭をもたせ行き、塚の上におき、敎化有ければ、其後幽靈出ずとなり。

一、同郡正院村に丸屋藤兵衛といふ者あり。平生の儘にて毎度何國ともなく行て、五日・十日許ありて家に歸り、諸國に有ふれし事を物語るに、後に聞けば違ふ事なし。船の者など、西國邊・下越後・出羽の國などにて逢ひし事度々なりといへり。妻子を持て、天明年中より止みしといへり。

一、鳳至郡名舟村の磯へ、明和六年の春、長七・八間許に二尺四方許の角の、何の木とも知れぬ大角波に打寄せたり。數年海中に有けるにや、貝・藻など生じ、大字八字彫りてあり。異國の文字にや讀かねし也。一說には外國の榜示杭にてありといへり。

一、珠洲郡鵜飼村の若き者共、或夜打寄り、よみかるた抔打ちて遊び、夜半過に食拵へのため、六左衛門といふもの村のうちへ豆腐を買に出てけるに、往來に火煙あがりけり。行かゝり見れば、火中に村の吉右衛門といふ者の妻車にのり居るを見るより、六左衛門絶氣して倒れけるに、宿に殘

り居る若きもの、六左衛門の歸り遲きゆゑ行迎ひ見れば、往來に臥居けり。連歸り藥など與へ、いろ〳〵介抱しければ、漸正氣になり問へば、六左衛門有し事を語れり。翌朝聞くに、吉右衛門妻その刻限に產にて死せしといへり。不思議の事なり。

一、當國は御公領一萬石、村數六十一ヶ村御領地あり。御家は別て御叮寧にて、驛役は勿論、公儀役人中往來にも、旅宿・夫人足も御省きにて、萬端結構格別なれば、私領・公領百姓中隨分和順なるに、近年羽咋郡の潟を千路の潟といふ論ありて、私領役人御召あり。江戸表にて譯相立、只今迄の通り其もよりの村へ支配に極りけり。其後公儀より、天明年中千路村組合八ヶ村替地仰付らる也、其村々千路村・上棚村・二所宮村・佛木村・中山村・町村・安津見村・安部屋村也。右代り相立、所々にて九ヶ村。尊保村・阿川村・楚和村・灯村・地保村・切留村・鵜野屋村・入釜村、〆八ヶ村は羽咋郡也。鹿島郡にて一ヶ村黑崎村、都合九ヶ村、六十一ヶ村の所今六十二ヶ村になりし也。是天明五年の事也。

一宮氣多の神垣に詣でゝ。

皐月はれ瑞籬出る油煙とり

羽咋の潟邊を通りて。

杜若咲き埋れしおぼろ舟

川尻橋下にて。

文字と見る畫の螢や橋柱

安部屋の里を過るに。

五月雨や戶々に米つく船の者

一、同郡七浦鄕に大蛸あり。折々獵船など難儀に及ぶ事あり。近年も鹽方役人皆月村より舟にのり、二・三町漕出でしに、沖の方に山のごとくなるもの顯れ、波逆まき立ちたるを見付て、漸に舟を岸につけたすかりしと物語り有し也。

一、同郡穴水村河原といふ所に、賓商賣人に覺右衛門といふものあり。此賓屋へ常に心易く出入する同町の勘四郎といふものあり。明和二年五月此者葛籠に能き衣裳多く入來りて、金子拾兩かり行きけり。其後此葛籠を見れば、衣類にてはなく木葉ばかりあり。急ぎ勘四郎を呼寄詮議すれ共、一向に其事覺なきよしいへり。止事をえず覺右衛門役人中へ訴へければ、いづれも狐・狸の業に極り、賓屋の損分に

成しなり。

一、同郡繩又村淨土眞宗專照寺の道宿坊に、慈眼といふものあり。若き時此者村のうちに契りし女あり。其後中絕えてたがひに年老いて、其女死し山に火葬し有けるを、慈眼坊立花を折に其所へ行きかゝり、火葬を見て昔ちぎりし事など思ひ出し詠め居しに、火中より姥の亡者飛び出、慈眼坊の膝に喰ひ付けるを、驚き拂ひのけ寺へ歸り、正氣を失ひ、數日經て本復せり。

一、同郡甲村藤內のものゝ垣內（カクチ）の子共、山に遊び狐の子を連れ來て弄び、後に殺しけり。其夜より彼外人の戶蔀など破り內へ礫を打込み、其後には諸道具自然に動き失せ、晝夜のわかちなく、家內に居住ならず、家出して有けり。村の者ごもいろ〳〵防ぐといへども止む事なく、其頃隣村へ美濃國より鐵炮の上手なる狩人來り有しを賴み、所々へ犬を入れて狐を狩出し多く殺しけり、是に古狐もよわりけん、此狩人を村におかぬやうに奉行所へ書付をもつて訴へ、京都本願寺の使僧に化し、村の御坊へ來りなごして、迚も畜類の業とはみえぬ稀代の事なり。書付筆者を奉行所にて御尋ありければ、輪嶋の船の者に錢三貫文にて調へ貰ひし由。其後役人狐の穴の邊へ行き、さまゞに利害をとき聞せければ、怨業の事止みしなり。天明二年より同三年迄の事なり。

鵜川の里を過るに。

辛風や鱈さきかけし浦の家

凪や柴賣過ぐる橋の上

牛呵る聲は殘りて時雨哉

一、天明七年の春、珠洲郡の大谷村百姓何某の方に聟入振舞せしに、其頃吳服商人に半七といふもの、別名千代太夫というて淨瑠璃かたりあり。此何某方へ折々出入りてありければ、幸ひ二里山のあなたなる正院村に來り居るを聞き、右振舞の日來り吳る樣にいひ遣しけり。半七も慥に約束しけり。半七其日になれば、正院を出て大谷へ來りしに、何某のもとは夥敷客來にて、半七も座敷へ出で珍膳の上淨瑠璃いろ〳〵語り、興に入り鷄鳴になり、座敷もをはり、半七は一間へ入り打臥しけり。曉と思ふ頃寒くなり目覺めみれば、四方のすき間より朝日さしこみてあさまなる社內也。

驚き枕を見れば、宵に貰ひし包み金・菓子なゞ其儘あり。是は只事ならずと走り出、急き大谷村の何某方へ來りければ、亭主はじめ客立ち出で、夕べ約束をたがへし事を恨みければ、半七有りし事をかたるといへども、いづれも合點せず。半七詮かたなく懐中より包金・菓子等を取出しければ、亭主見て、是は此方に認め置きし物なり、其元の手に入る事いかさま狐狸の業ならめと、疑はらしけるとなん。

一、同郡鵜飼村の者ども、或夜舟に乘り釣に出しに、隣村鵜島村の舟橋川の上大瀧といふ森の方より、紫雲一叢たなびき來り、ちかくなり見れば、光明の中に柄香爐をもちたる尊き童形立ち居給ふを人々見て、慎みおそれて舟中鎮り居ければ、暫くありてもとの方へ歸りさりけり。其者にとへば、淨土眞宗にかけある聖德太子の像によく似たるよしいへり。

一、鳳至郡時國村庄屋右京佐は、隣村大谷村へ左遷ありし平大納言時忠卿の筋目といへり。寛政三年亥年京都平松家より詠歌等を送り有し寫しに。

前平大納言時忠卿の遺跡、能登國大谷といふ所にありと聞けば、其國の人に尋ね侍りしに、しかなりと答ふ。昔全盛の頃世の譽れはいふもさらなり、我も一門の古きちなみをおもひてあとゝひものす。

時　章

ありし世にそのいさをしはおほ谷やこけの下にも名はくちずして

白檀香をつゝみて墳墓に手向侍るとて。

ほのかにもけむりのうちに立そひてかへさむ魂のかほりともなれ

おなじ國にかの納言の苗裔歴代せるともがらありと聞ていひやりけり。

はらからのふたつの家のたいらけくやすらかにして世々にさかえん

今般從平松三位殿其方へ詠草一紙被下候段、石動山惣代僧五智院より傳達之趣及屆、當時珍敷義に付拙者より御次へ申上候所、平松殿直筆においては可奉入御覽旨被仰出候。依て指上之、昨八日御覽相濟被返下、則相渡之者也。

亥十月九日　　津田平吉郎　印

時國村庄屋右京佐へ

寛政三のとし、天平寺より例にまかせ勅願の寶簡奉納とて參内の頃、平松時章卿面會をゆるし給ひて、平大納言時忠卿の遺跡其國にあるやらんとたづね給へば、しかなりと答へ奉りぬ。猶もしたひて御詠草一首、彼苗裔に送らんとて言傳ふべきよし仰有ければ、いとかしこく捧げ歸りて、彼家に傳へんとて、はづかしながら短き筆にまかせてかくなん。

釋　堯　詮

古へのあとゝてしたふ玉章のかけてこしぢにかへる雁金

かやうに筋目の家、日本に七軒の一軒といへり。

此家居を見物して。

何がしの庭や柑子の匂哉

町野川傳ひして。

さび鮎やせなひら〳〵と朝日かげ

廣江野にて。

野菊咲すてくづ原の休み石

宵の間過る道もせに。

松風や道もる家の小夜礎

一、輪嶋町變女男子の者あり。幼少の時は名をきちというて女子なりしに、次第に男根の形も出て、廿許よりはすきと男になりて、後に女房かたらひて子も出生せしなどいへり。其上刀のりて米一石をせおひ歩行て、今に存命せり。

一、珠洲郡上戸村の者共、鹽木のため朝大勢馬を引き山へのぼりしに、黑峰城跡近きになり多くの馬驚きすゝまず。いづれも不思議に思ひ、向うを見れば六・七丈許の大蛇、松の切株を枕にして鐘つくやうの鼾し、道を横切りて伏居けり。いづれもすべきやうなく、いざ打殺さんと松枝を棒になし大勢打向ひけり。中にも强氣なる者、頭をしたゝかに打ければ、切株の釘に頭をうち貫き、終に大勢して打殺しぬ。是にかぎらず。奥郡の山にて大蛇に逢ひしもの多し。

一、同村善慶寺といふ御坊の境内に藪あり。夜々火出て磯邊へ行き、良ありて元の藪へ歸る事毎夜也。或夜村の者此火に逢ひ、ものかげにすかしひそかに見居れば、火中に手足細く大に痩たる異形の者見えて、藪の内へ入り消失せけり。翌朝行き見れば、藪の中に穴あり。邊に魚の骨・貝殼

多くあり。古蜘のわざといへり。

加護の宮居に寢轉びて。
蜩や晝寢すごせし宮の緣

黑峰越えをして。

涼さや炭燒あれし竈の跡

端午の日飯田にありて。

心ばへまやのあまりにさすあやめ

黑丸の里なる人家に休らうて。

雨晴て卯花くさき山家かな

一、寛政六年の春、鳳至郡牛尾村の宮森に貉一疋縊れ死しあり。いかにといふに、此村の百姓の娘同村の男と密通し有けり。此娘いつしか懷胎しければ、親に知れぬ先に死なんと男に語る。男我もともに死なんと約束し、其夜になれば女いひかはせし宮森へ行きまちしに、程なく男も來り、兼ての事なれば松が枝に一筋の繩の兩端に認め、首にまとひ聲をかけ合ひ飛びけるに、女思ひの外足地につき死せず。男をすかし見れば貉と化し、枝につられ死せり。娘驚き我家へいそぎ戻りけり。是は實の男は約束はしながら死しがたく、其夜女に出あはず有りしを、貉しりて女を誑し、却て非期の死をせしもの也。かやうに狐狸の類ひ、人を誑かす事此國に甚だ多し。先年も所口近在萬行村の内、かつらといふ所の百姓の主出走してありし跡へ、狐入替り其妻とかたらひなし、男子二人出生す。其後實の男歸り來りければ、狐は失にけり。其二人の男子目細く、耳立ち髪薄く、面躰狐に似て今に存命せり。

一、同郡山田今藏權現は、其昔領主山田式部大輔秀次といへるに、同郡輪島十藏宮あらたなる靈夢ありて、社地鳴瀧山に十藏權現を勸請あり、社頭美をつくしたる大社經營ありしに、寛政年中社頭炎上してけり。其後社頭造營ありて、同五年御神躰例に任せ、今藏神主氏子中輪島十藏宮へ來り、御神躰勸請し奉り、輪島十藏宮よりも先例にまかせ寶物等分遣し、神主・神子・氏子大勢御神躰供奉しありける。此今藏宮にも、山田おさいとて毎歳七月廿三日より同廿六日迄、十藏宮と同じく祭禮ありて、諸商人小屋かけ、參詣人も多く賑敷事也。

一、輪島十藏宮おさい祭りは、毎歳七月廿三日より同廿六日迄、夜は氏子中大燈籠の夥敷御幸に供奉し、鳳至町住吉宮・輪島崎天滿宮も同樣に大燈籠ありて、其粧ひ言語に盡しがたき大祭也。晝は近國より諸商人集り、諸色店出し群集して、其外藝人みせもの小屋をかけならべ、夥敷賑敷事言ばかりなし。予寛政六年七月廿六日輪島町見物に出しに、河岸に猿の見せものと看板打ちて、人多く出入するあり。予も立寄り見物せしに、猿色々藝をなし、暫く休み居ける所を、見物の男女菓子くだものを投與へければ、猿よろこび手に受け食しけり。其中に小娘一人飴おこしといふものを投與へければ、猿いかりて投返し、此娘兩三度すれども喰はず有りけり。見物のうちよりさゝやき不思議をいへば、其小娘連一むれはぢて立出けり。跡に人々いへるは、川尻といふ所の藤内の娘にて有けり。

予が故郷にも似たる事あり。先年御家中の少知とれる方の下女、鷄に餌を與へぬれども喰はず。餘人與ふれば喰ひしを、家内不思議に思ひありしに、其後金城鹽屋町といふ所に源兵衛といふ古道具屋、外人の者の銀をかり、元手にして餘程手廻しして、其よしみに外人の娘子共武士・町人へ奉公人にひそかに取持遣しけるをあらはれ、源兵衛曲事に行れけり。鷄の餌を食せずありし下女も其内にてありしといへり。かやうに鳥類・畜類さへ外人の穢れをしりてあるに、此能登國には一向外人・平人のわけなく、わきて奥郡輪島邊は隔てなく付合して、穢おそれなきもあさましき事也。予も是にはこまりはて、けがらはしくおもへ共、百軒に一軒も此穢なき家はなければ、是も邪法さかんにして、よき道のおとろへぬる事なげかはしき事也。

一、同郡黑嶋村又二郎といふ者の船子に、隣村鹿磯村の者あり。寛政七年卯七月羽州秋田へ船に乘り行き滯留せし中、此船子行衛しれずありけり。其後三十餘日經て、能州穴水の市の日、黑島村の者出逢ひ連歸らんとせしに、又行方なく失せけり。又十日經て道下村の者二・三人未明に寺口へ行き、往來元山といふ所にて此船子に行逢ひ、道下村の者、其元は誰にてはなきかといへば、いや我は彦山へ行く者とて逃んとせしを、とらへんと組合ふうち、一人道下村へ走行き、大勢連越し捕へて、鹿磯村の親里へ遣しけり。今に亂心して存命なり。

門前村を過る時。

秋のくれ門立つ僧の懐手

道下村の宿にて。

從弟煮も芋の子がちや後の月

一、同郡惣領村に地名の中泉谷といふ所は、むかし社有し所なり。寛政六年の春惣領村の孫市といふ者の夢に、我は泉谷の神なり、宮を再興し呉よとて夢想あり。

誓ひある神をいのらぬ世の人の何をまもらんかたしろの跡

孫市夢覺め、不思議におもひけれども其儘に打過ぎけり。又或夜夢に孫市いづみやの磯邊に出けるに、大石の上に衣冠装束正敷き人の、浪に袖を濡しひたして、此有樣なりはやく宮を建よとありし夢覺めて、孫市止む事を不得村の者どもへ此事かたり、隣村の者共へも此事をすゝめて社を建立し、同九月九日遷宮ありし也。

一、寛政八年八月羽咋郡一宮の商人二・三人連れて、塵濱村の磯邊を通りしに、俄に暴風起り砂石を飛ばし、風雨雷電して忽ち闇夜となり、いづれも前後を失ひ、地にはらばへになり居たりしに、雨風頻にして餘りに恐敷、目を少し明くれば、黑雲の中に帆柱のごとくなるもの間近く來りければ、詮方なく負子棒(カタネボウ)にて拂ひぬれば、何やら手ごたへぬ。かくする事度々なり。良有て風雨少しやわらぎ、次第に雲晴れ見れば、十間許隔て磯際に、黑雲一つつくなりあり。是も暫く有て消失せぬ。其所へ行きみれば長七尺許、黑色にして鱗三角、頭尖り尾は蝦尾なる蛇死してあり。常の蛇とは違ひあれば、金澤へ持行き人に見せけれど、求めんといふ者なし。去る醫家(津田隨分齋也)に求め陰干にしあるよし。

やん事なき客人の國巡りとて、先を拂ひ往來の人も片邊に噂踞して。

人音に蟷螂かゞむ馬のくつ

殿原や鶉のふける駕のうち

唐戸山の角力の折。

水茶屋や崩れ角力の裸客

一、鳳至郡乙ヶ崎村に、寛政八年九月下旬畑にある大石自然に動き出、畑にある者見るうちに二・三尺歩みけり。不思議に思ひ、村の者に告ければ、各行き見るにはや四・五

間も動き出けり。人々あやしみ、立翁をもつて打碎んとして、石少し欠ければ其まゝ動き止みけり。

一、同郡熊野村跡繼山見物の歸るさに、道の傍なる茶店に立寄りしに、往來の人かける詩歌連俳の一冊ありて、予も主の望に任せて。

爰に山の姿川の流れ異にして風景無雙の地あり。しかも跡繼山の跡目草となん靈草あるを尋ねわびて。

今更に踏分がたき春の草

又曰

跡繼山者鳳至郡熊野山中之勝地而。又生二靈草一。俗稱二跡目草一焉。民人得レ之爲二子孫綿々之兇一。殊武門之人則秘二於家一藏二於懷一重レ之。可レ不二亦貴一也哉。

川瀨に下り茶水くむを見て。

桃櫻下た行水をくむ女

一說に跡目草は楪といへり。

一、或年三崎權現臨時の祭禮ありて詣んと、親の湊を横雲に立出て。

麥挽や半蔀涼し明の月

歌波の濱にて。

蜀魂足音ひゞく小石原

大野の邑の知れる方に立寄り、麥煎粉を貰うて。

行先の清水たのもし麥いりこ

高淵山の麓を通りて。

暑き日や山の高きをしられけり

夕ぐれに道をいそぎて。

鐘の音の里ちかけなるさらし臼

その日は南志見里に舍りて。

朝涼し起るばかりの旅寢哉

澁田の上野にて。

鶯の巢は何の木の若葉哉

櫻木の渡しにて。

六月や麥ほしてある渡し舟

五里々々橋にて。

こゝゝはん白鷺あざる春田かな

寺山の里とやらんにて。

一つ屋は戸ざしてあるや柿の花

阿部の判官の古塚にて。
後の世をおもひやられて木下闇
黒峰の城跡にて。
汗くるし折しも啼や神子鳥
虹見川と聞て。
紫陽花や空色よわる雨催ひ
上戸の里に泊りて。
外面からあるじの誘ふ納涼哉
渡唐の宮井を過るに。
夏木立啼聲のみぞ村がらす
蟹の橋の堤にて。
萍や淀みのこれる池の水
鞍見の里に休らうて。
夕立を夢に過して晝寢哉
琴江の橋塚にて。
古へを啼つくしてや蟬の聲
三崎の社内に折ふし里人涼みがてら大勢あるに、われもともに通夜して。

葉櫻や風待わぶる人いきれ
下向には浦傳ひして。
夏海や沖の船路の行ちがひ
雲津の里にて。
雲の峯それかあらぬか越の山
長濱の浦邊を過るに。
晝顔や汐汲む蜑の食休み
松波の知る方にとめられて。
隨樂につかれ臥夜の明やすき
山路に道を習うて。
わくら葉にとはれてのぼる山路或
黑瀧景連の古塚にて。
暑き日や露もむすばぬ塚の草
權若の山中にて。
兀山や一村見えて青あらし
岩瀬川にて。
鳶立や簗を流るゝ水の音
鈴屋村に泊りて。

蚊やを出てすゝみ直すや星の夜半
名舟濱を通りて。
涼しさや横に見なして沖の嶋
輪島崎の歸帆を詠めやりて。
帆に連れて道いそがるゝ家路哉

一、鳳至郡惣領村與兵衛といふ者、若き時は方々歩きて强氣なる生質なりしに、中年の比より高淵山の麓なる木樵も通ぬ幽谷に住居して、村へ出る事春秋兩度輪島の市に出る外はなし。或年彌生三日此者の住居を見んとて、一兩人山上してはるゞ〳〵わけ入りしに、其住居高さ七尺許に三方土手を築き、其上に合掌を立て、茅を以て葺覆ひ、二階なる所に起臥するとみえて、下に火ごこ・雜具あり。外面は小芝の青々と生じ、軒を流るゝ水清き事限なし。茶園・桃・栗・柳・梨の類ひを植ゑあり。田畑も能き程に所々見えて、果實榮根自由なる事誠に仙境ともいひつべき浦山敷住居なり。與兵衛も人めづらしくや思ひけん、念比に物語けり。我等尋ねけるは、深山の住居さぞ怪敷事もあらんと問へば、さして怪敷事もなく、はじめの程は毎夜やねをまくり、大木を伐倒し抔する音せしに、夜明けて見れば變る事なく、人里隔ぬれば猪・鹿・狐・狸も見えずといへり。寛政七年に八十二歳といへり。

壽をあやかりものや桃の花

此歸るさに去方へ立寄りて、山住の翁の事をかたり、偏に唐土の五百年を經しかしこき人のいきをしにもおとらぬものとなん咄す折から、桃の酒をすゝめられて。

千早振神の惠みのかず〳〵に五百枝の桃の花の壽き

一、鹿島郡金丸出村百姓の十四歳になる娘ぶら〳〵煩ひ、人に逢ふ事を嫌ひ、いり豆の外何にも食せず。ある日煎豆を快く食し、兩親にいへるは、とかく人に逢へば氣分惡敷なり、むづかしければ人にあはぬ闇き所に居たき由望みけり。親共も病氣にさはるといへるをいとひ、闇き所をしつらひ入れければ、其翌朝より兩親にもかたく對面をせず、兩便にも通はず、物もいはず、夜着引かぶり伏し居てあり。親共いろ〳〵なげき、いかなる姿にても一目見せくれといへども、はぢおそれてなほもなんぎなる躰なれば、是非なく打過ぬ。されども常に好みぬれば、いり豆を日に一升許器

物に入れ枕元におけば、それを食し、今に三・四年にもなれども存命せり。

一、鹿島郡石動山祭禮にて、毎歳六月四日參詣多くありて、御幸・建物山あり。或時建物山に人形をかざりしに、自然に動き出て合戰する事夥敷、後は人形何所ともなく失せけり。今も建物山に人形を大勢持出、かざるとひとしく其儘仕舞ふ事也。是にかぎらず、此山はさまゞ〳〵怪異ある事多し。

一、鳳至郡輪嶋十藏宮は奇瑞あらたなり。境内に八百比丘尼の植ゑし古松あり。祭禮の夜は、此木に龍燈ある事毎歳也。又或年大祭の大燈籠太守の忌事ありて延引有しに、其定日の夜大燈籠の行粧例年にかはらず、近郷所々より見えしといへり。其外毎歳祭禮の夜沖の舳倉嶋の權現渡り給ふとて、俄に北風に吹かはる事なゞ奇特なり。

今後編に短き筆をとるといへども、いづれ不正の怪談のみにして、偏に野夫村童の放諺なり。されゞ萬物造化あり、鬼神も冥助あり、何ぞや珍事不思議こせん。況や狐狸の類ひ人を誑すも全なき業、今愚蒙の揚るも益なき戯れならんと、筆を半にして頓に止みなんものしかり。

寛政八辰の中秋日

能登名跡志附翼

建置

續日本紀曰。元正天皇養老二年。割越前國羽咋・能登・鳳至・珠洲四郡。始置能登國。

類聚倭名鈔曰。能登國。靈龜二年割越中國置之。國府在能登郡。今之鹿島郡也何哉。北方者至陰之地。此國者爲日本之鬼門。

分類要語曰。陰之靈曰鬼。陽之靈曰神。陰陽之妙靈爲往來。而萬物造化焉。謂之能良。始書能門。能者陰德名也。門者監會名也。今書能登。

一宮記曰。往古此國有化鳥。山海不穩。氣多神靈平之。海内船能登。故書能登也。都能登一國偏爲環海地。接壤於南蠻。有運漕魚鹽之利也。故有時南嶺之產物漂流來云

能州四郡組分郷庄村附之事

羽咋郡四組

荻谷村組六十二箇村

押水大海庄　牛首村　瓜生村　上河合村

下河合村　太田村　箕打村　元女村

黒川村　野寺村　瀬戸町村　中沼村

二ッ屋村　兎田村　大海川尻村　森下村

夏栗村　八野村　澤川村

押水中庄　坪川村　正友村　紺屋町村

東間村　御館村　三日市村　上田出村

中野村　上田村　山崎村　寶達村

北川尻村　冬野村　東野村

押水北庄　門前村　河原村　米出村

今濱村　小川村　麥生村　宿村

竹生野村　吉田村

志保庄　敷波村　荻谷村　荻市村

子浦村　聖川村　新宮村　下石村

當熊村　海老坂村　荻島村

粟生庄　柳瀬村　新保村　粟生村

平床村　柳瀬出村

菅原庄　吉野屋村　石坂村　向瀬村

所司原村　散田村
羽咋正院　塵濱村

堀松村組四十五箇村

堀松庄　堀松村　清水今江村　吉田村
梨谷小山村　火打谷村　神代村　(鹽師)川尻村
大津村(司)　小浦村(同)　上野村(同)　百浦村(同)
赤住村(同)　西山村(同)　江野村(同)　矢藏谷村(同)
末吉村　大念寺村　長澤村　福野村
町村　(鹽師)大念寺新村　松戸村
土田庄　舘開村　大島村　德田村
印内村　代田村　谷屋村　栗山村
福井村　館村　二所宮村　上棚村
矢駄村　柴垣村　瀧谷村
加茂庄　矢田村　倉垣村
大坂庄　米濱村　穴口村　大坂村
甘田保　宿女村　坪野村　岩田村
犹谷村

杉野屋村組三十九箇村

邑知院　千代町村　中川村　野村
柳田村　(鹽師)一宮村　(同)一宮寺家村　瀧村
飯山村　垣内田村　上江村　圓井村
吉崎村　深江村　白瀨村　藪野村
福水村　千石村　神子原村　走入村
清水原村　菅池村　見砂村　下境村
太田富永保　太田村　二口村　石野町村
三ッ屋村
菅原庄　杉野屋村　菅原村
羽咋正院　立開村　羽咋村
粟生庄　土橋村　粟原村　兵庫村
若部保　本郷村　志々見村
尾長保　堀替新村　尾長村　千田村

相神村組六十六箇村

富木院　高田村　小室村　廣地村
江添村　大西村　貝田村　田中村
和田村　今田村　八幡村　八幡座主村
飯室村　中泉村　(遊師)相坂村　(同)里本郷村

草江村　稻敷村　栢木村　大鳥居村
(鹽師)大福寺村　酒見村　相神村　領家町村
地頭町村　町本郷村　七海村　中濱村
給分村

熊野方郷　草木村　日下田村　谷神村
豐後名村　荒屋村　中山村　町居村
日用村　領家七海村　生神村　福浦村
三明村　中畠村　長田村　牛下村
稗造庄　尊保村　阿川村　楚和村
灯村　鵜野屋村　地保村　切留村
入釜村
藤懸郷　深谷村　前濱村　笹波村
鹿頭村　小窪村　赤崎村　千浦村
風戸村　風無村
堀松庄　田原村　大笹村　米町村
小室村　直海村　釋迦堂村

鹿島郡七組

中島村組三十九ヶ村

鉈打郷　藤瀨村　河内村　西谷村
鳥越村　古江村　大平村　町屋村
上島村　免田村　此九ヶ村は羽咋郡なり
熊木院　中島村　瀨嵐村　小牧村
横見村　長浦村　濱田村　上野村
宮前村　横田村　谷内村　別所村
外原村　深浦村　外村　田岸村
山戸田村
萬行保　舟尾村　奥原村　和倉村
祖濱村　新保村　石崎村　松百村
赤浦村　直津村
三階良川保　盤若野村　池崎村　滿仁村
矢田郷　津向村　小島村

但此組は兩郡入交りあり

能登部下村組十二ヶ村

良川院　良川村　上村　德丸村
淺井庄　西馬場村　東馬場村　最勝講村

能登部下村

金丸保　金丸村　金丸出村　鹿島路村
長澤保　曾禰村　下曾禰村

鰀目村組三十四ヶ村

島八箇庄　日出ヶ島村（鹽師）　二穴村（同）　佐波村（同）
須曾村（同）　半浦村（同）　通村（同）　無關村（同）
田尻村（同）　閏村（同）　南村（同）　長崎村（同）
曲村（同）　向田村（同）　祖母浦村（同）　八ヶ崎村（同）
鰀目村（同）　久木村（同）　野崎村（同）　小浦村（同）
別所村　右二十ヶ村島の路なり

中山郷　岡村　上湯川村　鵜浦村
三室村
矢田郷　太田村　佐味村　府中村
後畠村　所口村　天神川原村　藤橋村
江曾郷　國分村　細口村
三階良川保　白馬村

芹川村組十六ヶ村

淺井庄　德前村　淺井村　芹川村
井田村　尾崎村　小竹村　水白村
久江村
小田中保　小田中村　藤井村　福田村
高畠村　小金森村
四柳庄　四柳村
酒井保　酒井村
大町保　大町村

笠師村組十五ヶ村

豊田保　豊田町村　河崎村　土川村
荻屋村　豊田村　奥吉田村
笠師保　笠師村　鹽津村　筆染村
大津村
三引保　三引村　深見村　白濱村
吉田保　吉田村　七原村

武部村組三十六ヶ村

淺井庄　蟻ヶ原村　二宮村　武部村
一青庄　石塚村　久乃木村　坪川村
西村　今羽坂村　新庄村　在江村
廿九日村

三階良川保　川田村　三階村
飯川保　江曾村　若林村　飯川村
八田郷　中挾村　八田村　千野村
國下村
石動山院内　多根村
矢田郷　古府村　藤野村　小池川原村
古城村　古屋敷村　竹町村　矢田村
萬行保　萬行村　佐野村
崎山澤野郷　澤野村
南三郷　麻生村　須能村　菅澤村
黑崎（鹽師）村
中山郷　殿村

高田村組十九ヶ村

高田保　田鶴濱村　川尻村　新屋村
垣吉村　高田村　杉森村　下村
三階良川保　温井村　町屋村　三階村
瀬戸村　伊久留村
一青庄　一青村　大槻村　春木村
羽坂村　末坂村　黑氏村　花見月村
町奉行支配
所口町

羽咋郡杉野屋村組に有之土方氏領分

太田村　四町村

鹿島郡武部村組に有之土方氏領分

小栗村　槇山村　清水平村　柑子山村
外林村

〆七ヶ村土方氏領分高八百六十八石餘庄屋四人

羽咋郡御預地

敷波村　針山村　原村　神子原村
福水村　四町村　白瀬村　千路村
中山村　上棚村　二所宮村　安津見村
町村　安部屋村　佛木村　松木村
豐後名村

〆十七ヶ村

鹿島郡御預地

川田村　下村　八幡村　山崎村
熊淵村　花園村　東濱村　佐々波村

大泊村　庵村　横見村　田岸村
江泊村　外村　深浦村　大野木村
別所村　谷内村　石崎村　瀬嵐村
祖濱村

〆二十一ヶ村

鳳至郡八組

大澤村組三十八ヶ村

七浦庄　大澤村　上大澤村　赤崎村
下山村
大屋庄　小池村　鵜入村　蕨野村
光浦村　堀村　釜屋谷村　水守村
中段村　稲屋村　長井村　山本村
房田村　下黑川村　上黑川村　縄又村
二又村　別所谷村　瀧又村　吼木村
空熊村
三井郷　長澤村　漆原村　新保村
細屋村　内屋村　小泉村
本郷　二又川村　貝吹村　別所村
嶺村　俊兼村　四位村　瀧上村
本内村

稲舟村組三十九ヶ村

河原田郷　久手川村　塚師田村　同稲舟村
大野村　惣領村　谷内村　熊野村
西脇村　市瀬村　山上村　北谷村
中尾村　石休場村　横地村　杉平村
山岸村　宅田村　二ッ屋村
南志見郷　白米師村　同野田村　同名舟村
尊利地村　小田屋村　同里村　同澁田村
忍村
中町野郷　大箱村　當目村
三井郷　與呂見村　仁行村　中村
本江村　渡合師村　興德寺村　打越村
大屋庄　小伊勢師村　輪島村　輪島崎村
輪島海士村

馬場村組五十三ヶ村

仁岸郷　馬場村　館分村　劔地村
大泊村　腰細村　赤神村　上代村

黑岩村　入山村　清澤村　瀧町村
大釜村　木原月村　神明原村　馬渡村
窕村　久川村　中谷村　切挾村
飯川谷村　渡瀬村
阿岸郷　池田村　藤濱村　北川村
是清村　南村　鍛冶屋村　中田村
椎木村　小山村　大切村　山是清村
二又村　江崎村　白禿村　猿橋村
小瀧村　千代村　新町分村
櫛比庄　小石村　上河内村　中尾村
廣岡村　舘村　本市村　内保村
大角間村　上中村　越渡村　桂谷村
堀腰村　鑓川村　百成村

走出村組五十四ヶ村

櫛比庄　走出村　清水村　勝田村
道下村　宮古場村　八幡村　浦上村
中野屋村　淺生田村　安代原村　高根尾村
和田村　鬼屋村　日野尾村　廣瀬村
深田村　田村　栃木村
七浦郷　鹿磯村　深見村　六郎木村
小杉村　矢德荻平村　吉浦村　五十洲村
大瀧畠中村　中谷内村　鵜山村　餅田村
皆月村　百成大角間村　暮坂村　薄野村
樽見村　西二又村　小町村　上村
新保村　黑杉村　雜座村　池田村
本郷　谷口村　能納屋村　平村
大町村　荒屋村　長井坂村　地原村
定廣村　原村
大屋庄　圓山村
櫛比庄　山邊村　井守上坂村　門前村

中居村組三十三ヶ村

南北郷　中居村　中居南村　川尻村
乙ヶ崎村　新崎村　内浦村　志ヶ浦村
根木村　平野村　曾福村　宇留地村
鹿路村　河内村　汁谷村　比良村
小又村　挾石村　此木村　上野村

麥浦村　七海村　波志借村　地藏坊村
三井郷　市坂村　洲衛村
山田郷　大田原村　柏木村　樟谷村
木戸村　伊久留村　菅谷村　木原村
曾山村

宇出津村組二十三ヶ村

上町野郷　合鹿村　久田村　桐畑村
鈴ヶ嶺村　笹川村　寺分村　中齋村
十郎原村　五郎左衛門分村　神和住村　藤瀨村
本江村　久龜屋村　天坂村
中町野郷　鴨川村　國光村　小間生村
石井村　柳田村　五十里村
諸橋郷　宇出津村　宇出津分村　藤波村

鵜川村組三十四ヶ村

諸橋郷　小垣村　古君村　山中村
矢波村　太田川村　竹原村　明泉寺村
宇加川村　甲村　前波村　沖波村
七海村　鵜川村　波並村

山田郷　谷屋村　神道村　吉谷村
本江村　俎倉村　木住村　三田村
山口村　武連村　西安寺村　魚地村
坂尻村　龍村　宮谷村　下代村
八田村　番頭谷村
上町野郷　宇加塚村　曾又村　鶴町村

粟藏村組四十ヶ村

下町野郷　粟藏村　鈴屋村　寺山村
時國村　大川村　敷戸村　廣江村
牛尾村　桶戸村　川西村　佐野村
眞久村　舞谷村　金藏村　西山村
西院内村　東印内村　東山村　圓山村
寺地村
中町野郷　東村　德成谷内村　麥生野村
長尾村　德成村

是より末十五ヶ村は、珠洲郡の内裁許

若山郷　洲卷村　白瀧村　南山村
上山村　宗末村　二子村　上正力村

吉ヶ池村　北山村
西海郷　黑丸村　長橋村（鑛師）　片岩村（同）
仁江村（同）　眞浦村　清水村（同）

鳳至郡御預地

鹿島村　黑島村　下唐川村　上唐川村
天神谷村　川島村　大町村　七海村
梶村　藤卷村　岩車村　鹿波村
曾良村　中谷村　院内村　黑川村
伏戸村　井面村　時國村　大野村
河内村　鵜島村　〆二十二ヶ村

珠洲郡三組

松波村組四十ヶ所

木郎郷　秋吉村　河ヶ谷村　上村
瀧ノ坊村　松波村（鑛師）　布浦村（同）　九里川尻村（同）
四方山村（同）　白丸村（同）　長尾村（同）　新保村（同）
越坂村（同）　市瀨村（同）　小木村（同）　眞脇村（同）
小浦村（同）　大澤村（同）　羽根村（同）　國重村（同）
宮犬村（同）　清眞村（同）　戀路村（同）　山中村（同）
田代村　滿泉寺村（鑛師）　駒渡村（同）　立壁村（同）
時長村　行延村　不動寺村
直郷　馬渡村　廣國村（鑛師）　法住寺村（同）
堂谷村（同）　下鳥越村（同）　黑丸村　鵜島村（同）
宗立村（同）　西方寺村　大町泥木村

飯田村組二十二ヶ村

直郷　鳥越村（鑛師）　鵜飼村（同）　金峰寺村（同）
南方村（同）　寺社村　北方村（同）
飯田郷　鹿野村（鑛師）　本江寺村（同）　飯田村（同）
正院郷　熊谷村（鑛師）　小路村（同）　正院村（同）
川尻村（同）　雲津村　小泊新村（同）　竹澤村（同）
伏見村（同）　蛸島村（同）　小泊村（同）
三崎郷　引砂村（鑛師）　高波村（同）　宇治村（同）

折戸村組三十四ヶ村

西海郷　馬縅村（鑛師）　笹波村（同）　高屋村（同）
大谷村（同）
三崎郷　狼煙村（鑛師）　狼煙新村（同）　寺家村（同）
粟津村（同）　森越村（同）　大屋村　小谷村

鹽師 杉山村 同本村
正院郷 折戸村 川浦村 細屋村
岩坂村 唐笠村 鈴内村 飯塚村
山中村 岡田村
飯田郷 廣栗村 出田村
若山郷 經念村 古藏村 國兼村
延武村 内山村 大坊村 火宮村
中田村 中村 向村
珠洲郡御預地
眞脇村 都合四郡にて御預地六十一ヶ村

古代は郡方役人宿禰・刀禰・公文・目代・代官・又郡司・庄司・庄屋抔と申來るなり。御當代は十村肝煎番人と申來也。此國は今も家名に刀禰抔と呼申者多し、又知行所も昔何町何十段と知行有。又何十貫何千貫とも呼り。今百石・千石・萬石に同事なり。凡長さ三十歩廣さ十二歩を一段とす。十段を一町といふ。上田は十段に五百束公田有。一束は米五斗、尤中田・下田の差別あり。貫知行は右五段を一貫とする也。古は永樂の錢十文に米四合八勺賣ゆゑに、永樂一貫文は四斗八升、百貫は四十八石なり。今知行草高百石に平均免四つ八歩として、高百石米高は四十八石なり。寺領・社領・御扶持田にて知るべし。

能州利家公より、御扶持頂戴の百姓

十六石餘 相神村 彌五郎 十五石 粟藏村 丈藏
七石五斗 鹿野村 恒方 七石五斗 大谷村 賴兼
七石五斗 大澤村 内記 七石五斗 上戸村 眞賴
七石五斗 木住村八郎左衛門 七石五斗 若山村 延武
七石五斗 道下村 孫三郎 七石五斗 荒屋村三郎左衛門
七石五斗 皆月村 彦 七石五斗 菅原村 行長
七石五斗 中居村三右衛門 七石五斗 鹿磯村藤次右衛門
七石五斗 中島村太右衛門 七石五斗 中川村太郎右衛門
七石五斗 諸橋村次郎兵衛 七石五斗 小山村 高左近
十五石 土橋村 新兵衛 四石五斗所口町氷見屋助左衛門

能州寺領・社領御修覆所之事

四百石 櫛比 惣持寺 文祿二年利長公御再興、有慶長六年芳春院殿山門御建立。其後は修覆は寺にて仕候。

百二十一石一斗一升 瀧谷 妙成寺 諸堂不殘、寛永十年より御修覆。
百五十石 石動山 天平寺 權現本社、承應二年より御修覆。
三十俵 吼木山 法住寺 講堂、白山宮、其外庫裏、山門、慶安三年より御修覆。
二十石 富木 大福寺 權現社頭天正十三年より御修覆。
田地五町 三崎 高勝寺 高直七十五石、内二十五石、御修覆料除知。寛永十六年より御修覆あり。
三百五十石 一宮 氣多神社 承應四年より社頭永代御修覆。
九十俵 菅原 天滿宮 萬治三年より御社頭、右の内五十俵を以御修覆仕る。
二十石 酒井 永光寺 三十俵 太田 海門寺
二十俵 鵜飼 金峰寺 十四石五斗 輪島 蓮江寺
十俵 道下 寶泉寺 十二石五斗 德田 安養寺
十五石七斗五升 所口 靈泉寺 外に七百八十二歩畠地、高に直し三石二斗五升八合
八石六斗四升 松波 松岡寺 二十五俵 鵜飼 妙嚴寺
十二石 所口 氣多本宮

能登一國延喜式内之神社四十三社

羽咋郡十四座

氣多神社 一ノ宮 羽咋神社 羽咋村
志乎神社 子浦村 瀨戸比古神社 直海村
藤津比古神社 藤瀨村 神代神社 神代村
相見神社 麥生村 手速比咩神社 寶達山
椎葉圓比咩神社 宿女村 諸岡比咩神社 二所宮村
百沼比古神社 末吉村 阿良加志比古神社梨谷小山村
大穴持像石神社 一ノ宮 奈豆美比咩神社 阿津見村

鹿島郡十七座

伊須流岐比古神社 石動山 能登生國玉神社 所口
餘喜比古神社 能登部村 能登比咩神社 能登部下村
天日陰日咩神社 二宮村 鳥屋比古神社 羽坂村
久氐比古神社 久江村 御門主神社 山崎村
少彦像石神社 山崎村 伊夜比咩神社 二穴村
菅忍比咩神社 笠師村 藤原比古神社 高階村
荒石比古神社 豐田村 白比古神社 白濱村
久志伊奈太伎比咩神社德田村 美麻奈比古神社 赤倉村
久麻加夫都阿良加志比古神社 熊木村

鳳至郡九座

鳳至比古神社 輪島村 石瀨比古神社 東村
石倉比古神社 時國村 邊津比咩神社 穴水村

奥津比咩神社　中屋村　神杉伊豆牟比咩神社本郷村
美麻奈比古神社　岩車村　加夫刀比古神社　甲村
神目伊豆伎比古神社　藤波村

珠洲郡三座

須々神社　寺家村　古麻志比古神社　經念村
加志波良比古神社　廣國村

當國三十三所順禮觀音札所

一番　諸橋　明泉寺　二番　諸橋　上田寺
三番　山崎　鵜目嶽寺なし　四番　鵜浦　神道寺寺なし
五番　太田　海門寺　六番　矢駄　清水寺寺なし
七番　小嶋　妙觀院　八番　江曾　練ヶ谷寺なし
九番　石動山　十番　小田中初瀬寺寺なし
十一番　高畠　常樂寺いせやに木尊あり　十二番　四柳　四柳寺寺なし
十三番　酒井　圓通院寺なし　十四番　若部　專福寺寺なし
十五番　羽咋　松岡寺寺なし　十六番　一宮　寺家鼓中に堂あり
十七番　柳田　光全寺寺なし　十八番　金丸　澤野寺寺なし
十九番　能登部長樂寺　二十番　良川　山田寺
廿一番　高畠　橋爪寺寺なし　廿二番田鶴濱浦ヶ嶽寺なし今牛ヶ端と云
廿三番　熊木　妙法寺　廿四番　富木　虫ヶ嶽但鉈打のこと
廿五番　酒見　龍護寺　廿六番　大福寺高爪
廿七番　道下　鋏川　廿八番　寺口　高尾山
廿九番　和田　長樂寺　三十番　輪島　住吉
卅一番　横地　粉川寺　卅二番　時國　岩倉寺
卅三番　三崎　高勝寺

能州一國神主付

羽咋郡

一ノ宮　櫻井大宮司
下社家二十人　内十一人　櫻井氏　五人　橘氏
二人　藤井氏　一人　山氏　一人　神子

櫻井大宮司觸下

大嶋大明神　岩尾氏　神代明神　水野氏
末吉山王　宮谷氏　堀松八幡宮　吉井氏
直海白山宮　師石氏　鉈打熊野宮　尾澤氏
富木八幡宮　曾原氏　源谷八幡宮　宮谷氏

飯山明神　渡邊氏　矢駄加茂宮　田中氏
東間村明神　山田大藏　堀内氏　山田八幡宮　中川氏

鹿島郡能登部村清水氏・一宮櫻井氏觸下

石動山　大森氏　清水氏　本江神杉　山崎氏　寺口　四柳氏
所口本宮　舟木氏　舟木氏　道下住吉　四柳氏　平野明神　大森氏
府中山王　大森氏　向田八幡宮　舟木氏　甲村　大橋氏
笠師　井田氏　豐田
矢田八幡　大森氏　二宮明神　舟木氏
飯川八幡宮　野村氏

鳳至郡觸頭同斷

十藏宮　能登氏　鳳至住吉　淺井氏
輪島崎天滿宮　中村氏　鷲嶽　四柳氏
名舟　南志見　中川氏
岩倉白山宮　瀨尾氏　岩瀨八幡宮　大瀧氏
中居山王　四柳氏　中居六所　神杉氏
宇出津棚木　棚木氏　宇出津酒垂　加藤氏
鵜川天滿宮　梅田氏　妙泉寺　杉山氏
前波稻荷　堀川氏　沖波諏訪　四柳氏

三崎大宮司　猿目氏　松波八幡宮　立花氏
眞脇藤原宮　高原氏　飯田春日社　葛原氏
正院八幡社　櫻井氏　寺社一宮　水嶋氏
南方柳田明神　櫻井氏　鹿野天滿宮　森井氏
長橋神明宮　龜山氏　小長谷　青木氏

名所舊跡

羽咋郡名所舊跡

一、越知野　邑知院　一、大路潟　邑知院
一、押水中ノ庄　一、陰陽瀧　寶達山
一、羽咋の海　邑知院　一、瀧ノ津　邑知院
一、荒木富來　一、尼崎藤懸
一、產神熊野方　一、長手島　土田庄

一、鉈打山　熊野方　一、戰場ヶ端　飯山
一、跡野　笹波　一、かん〳〵石　安部屋
一、福野潟　堀松庄　一、美女山（柳田邊より白瀧迄）

鹿島郡名所舊跡

一、能登ノ島山　八箇庄　一、机島　八箇庄
一、松尾山　本七尾　一、角島　鵜浦
一、鵜ノ浦　中山郷　一、瀬嵐　熊木
一、熊木ノ里　熊木　一、親王塚　小田中
一、知盛塚　水白　一、岩屋清水　所口
一、屏風崎　半浦　一、石動山　二宮より
一、氣多本宮　所口　一、實盛塚　國下
一、永光寺　酒井　一、菱脇濱　四柳庄
一、長曾川　金丸保　一、いかけ山崎山澤野郷
一、國分寺跡　國分村　一、種ヶ島　瀬嵐村
一、佛谷　佐々波村　一、布引の瀧　熊淵村
一、小嶋　所口より　一、松尾の浦　本七尾
一、井田ノ瀧　井田村　一、涌浦　所口より

鳳至郡名所舊跡

一、錦川劍地　一、香島　南北郷
一、高淵山　大野村　一、跡繼山　熊野村
一、高尾山　寺口　一、惣持寺　寺口
一、寶泉寺　道下　一、宮城山　中町野
一、岩瀬渡　中町野　一、岩倉山　時國村
一、重藏宮　輪島　一、七ツ島　名舟領
一、舳倉島　名舟領　一、光浦　大屋庄
一、親ノ湊　大屋庄　一、奥津宮　中居
一、明泉寺　諸橋郷　一、沖波　諸橋郷
一、一本木　諸橋郷　一、八重櫻　藤波
一、來迎寺　穴水　一、鷲嶽　河原田郷
一、龍大明神　山田郷　一、石佛山　山田郷
一、八重一重櫻　豐田保

珠洲郡名所舊跡

一、長濱浦（松波より三崎まで）　一、日ノ見殿　羽根村
一、不動寺　木郎郷　一、戀路里　木郎郷
一、佛穴布浦　一、吼木櫻　法住寺村
一、地藏杉堂ヶ谷村　一、吼木山　直郷

一、一本杉　上戸　一、寶嶺山　若山
一、雲津里　三崎　一、駒ノ尾　三崎
一、山伏山　三崎　一、鈴ノ御崎　三崎

能州所々名物

羽咋郡名物

一、寶達山（藥草並蕨、獨活、薯蕷）　一、二ッ屋村　銀鮎
一、同樽見村　砥石　一、羽咋潟　鱣・鯉・鮒・蜆
一、瀧村（釣餌並鮑、白蓙）　一、福野村　干瓢
一、富木村　歌仙貝　一、福浦村　海苔
一、羽咋川　白魚　一、風戸村　平索麪
一、栗山村　紙　一、甘田保　四ヶ布

鹿島郡名物

一、所口町（豆飴、清水米、羽衣酒）　一、澤野村　牛蒡
一、島ノ路　芋　一、角島　水石
一、松百村　蛇ノ鮓並蛇ノ子　一、黑崎村　火打石
一、飯川村　大根　一、熊木村　九萬疋
一、瀬嵐村　海鼠　一、能登部　桃
一、崎山　たばこ　一、本七尾　玉虫
一、瀬戸村　梨　一、石動山　天狗爪

鳳至郡名物

一、劍地村　針金　一、輪島村（素麺並朱家具、庖丁、小刀）
一、七浦村　刺鯖　一、舳倉嶋　蚫類
一、皆月村　鹽辛　一、長尾村　たばこ
一、光浦村　五色石　一、久田村　紙
一、宇出津村（鰹筋並鰯、鰤、墨作り）　一、中居村（釜並串海鼠、海鼠腸）
一、鵜川村　鱚　一、谷内村　蕪
一、神道村　柿　一、大池村　根深
一、甲村　王餘魚　一、赤崎村　赤根

珠洲郡名物

一、三崎（和布、經ノ紐苔）　一、飯田村　小刀
一、折戸村　海雲　一、鵜飼村　蠣
一、金峰寺村　唐竹　一、吹上村　榧の實
一、吼木山　千年草　一、小木村　鱈
一、川浦村　火打石　一、馬縲村　木葉石

能登十二藥師

一、湯の藥師　和倉村
一、熊木藥師　中島村
一、奥津藥師　中居村
一、甲山藥師　甲村
一、白瀧藥師　南山村
一、濱田藥師　大川村
一、櫻木藥師　鵜川村
一、九里藥師　布浦村
一、宗末藥師　若山村
一、米山藥師　石井村
一、高洲藥師　大野村
一、高爪藥師　富木村

同作物名藥師

一、所口町　豆腐町藥師
一、木郎鄉　滿泉寺藥師
一、廣國村　あんの藥師
一、木郎鄉　不動寺藥師
一、穴水村　川島藥師
一、木郎鄉　願成寺藥師
一、輪島村　濱藥師
一、上村　笠主藥師
一、藤波村　灘濱藥師
一、穴水村　大町藥師
一、柳田村　法華寺藥師
一、正院村　館の藥師
一、鵜飼村　金峰寺藥師
一、眞浦村　濱上藥師
一、輪島村　常田藥師
一、一宮村　藥師寺藥師
一、粟津村　十二森藥師

右靈場順禮於有之者、いかなる難病にも平治なきといふことなし。

能州御收納藏・御鹽藏外浦之分

一、二筋　御收納藏　四間・二十間　今濱村
一、二筋　同　斷　四間・二十間　塵濱村
一、二筋　同　斷　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十六間　同村
一、二筋　同　斷　四間・二十間　金丸村
一、二筋　同　斷　四間・二十五間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十間　大島村
一、二筋　同　斷　四間・二十間　神代川尻村
一、二筋　同　斷　四間・十間　富木村
一、一筋　同　斷　四間・二十間　同村
一、二筋　同　斷　四間・十五間　劍地村
一、一筋　同　斷　四間・十間　道下村
一、三筋　同　斷　四間・二十間　同村
一、一筋　同　斷　三間・八間　皆月村

一、一筋　同　斷　四間・六間　大澤村
一、一筋　同　斷　四間・十四間　輪島村
一、一筋　同　斷　四間・七間　同村
一、二筋　同　斷　四間・二十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・九間　同村
一、一筋　御鹽藏　四間・七間　同村
一、一筋　御收納藏　四間・十三間　小田屋村
一、一筋　御鹽藏　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　三間・五間　白米村
一、一筋　同　斷　三間・八間　大川村
一、一筋　同　斷　四間・十間　時國村
一、一筋　御收納藏　四間・二十間　同村
一、一筋　同　斷　三間・七間　同村
一、一筋　御鹽藏　四間・五間　眞浦村
一、一筋　同　斷　四間・七間　仁江村
一、一筋　同　斷　四間・八間　清水村
一、一筋　同　斷　三間・六間　片岩村
一、一筋　御收納藏　四間・八間　同村
一、一筋　同　斷　三間・七間　大谷村
一、一筋　御鹽藏　四間・十二間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十間　長橋村
一、一筋　同　斷　四間・十五間　馬緤村
一、二筋　同　斷　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十間　笹波村
一、一筋　同　斷　四間・二十間　高屋村
一、一筋　同　斷　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・七間　折戸村
一、一筋　同　斷　三間・十間　川浦村
一、一筋　同　斷　四間・十間　狼煙村

內浦分

一、一筋　御鹽藏　四間・十間　寺家村
一、一筋　同　斷　四間・八間　粟津村
一、一筋　同　斷　四間・十間　森越村
一、一筋　同　斷　四間・十間　引砂村
一、一筋　同　斷　四間・八間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十間　伏見村

一、一筋　同　斷　四間・十間　雲津村
一、一筋　同　斷　四間・十間　本村
一、一筋　同　斷　四間・十間　杉山村
一、一筋　御收納藏　四間・十間　蛸嶋村
一、一筋　同　斷　四間・二十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・七間　正院村
一、一筋　御鹽藏　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十間　正院川尻村
一、一筋　同　斷　四間・十間　熊谷村
一、二筋　同　斷　四間・十間　鹿野村
一、一筋　御收納藏　四間・二十間　飯田村
一、一筋　同　斷　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　三間・十六間　同村
一、一筋　御鹽藏　四間・十間　北方村
一、一筋　同　斷　四間・二十間　同村
一、二筋　同　斷　四間・十間　南方村
一、二筋　同　斷　四間・十間　寺社村
一、一筋　御收納藏　四間・十間　鵜飼村
一、二筋　御鹽藏　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・二十間　鵜島村
一、二筋　御收納藏　四間・七間　黑丸村
一、二筋　御鹽藏　四間・二十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十間　宗玄村
一、二筋　同　斷　四間・十間　松波村
一、一筋　御收納藏　四間・二十間　同村
一、一筋　御鹽藏　四間・二十間　布浦村
一、一筋　同　斷　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・六間　立壁村
一、一筋　同　斷　四間・十間　白丸村
一、一筋　同　斷　三間・五間　長尾村
一、一筋　同　斷　三間・六間　新保村
一、一筋　同　斷　三間・六間　越坂村
一、一筋　御收納藏　三間・六間　小木村
一、一筋　御鹽藏　三間・六間　眞脇村
一、一筋　同　斷　三間・四間半　羽根村

一、一筋　御收納藏　四間・二十間　宇出津村
一、一筋　同　斷　四間・十五間　同村
一、一筋　同　斷　三間・十四間　同村
一、一筋　同　斷　四間・八間　同村
一、二筋　同　斷　四間・七間　同村
一、二筋　御鹽藏　四間・七間　同村
一、一筋　御收納藏　四間・十間　鵜川村
一、一筋　同　斷　四間・二十間　同村
一、一筋　御鹽藏　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・六間　藤波村
一、一筋　同　斷　四間・十間　甲村
一、一筋　御收納藏　四間・十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十二間　中居村
一、一筋　同　斷　四間・七間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十間　乙ヶ崎村
一、一筋　御鹽藏　四間・十間　宇加川村
一、二筋　同　斷　四間・十間　新崎村
一、二筋　御收納藏　四間・十間　中嶋村
一、一筋　同　斷　四間・十五間　同村
一、一筋　同　斷　二間・十間　同村
一、一筋　同　斷　四間・八間　同村
一、一筋　同　斷　四間・二十五間　笠師村
一、二筋　同　斷　四間・二十間　田鶴濱村
一、一筋　同　斷　四間・二十五間　同村
一、二筋　同　斷　四間・二十間　大町村
一、二筋　同　斷　四間・十五間　同村
一、二筋　同　斷　四間・十間　野崎村
一、一筋　同　斷　四間・十四間　同村
一、一筋　同　斷　四間・十五間　所口町
一、一筋　同　斷　四間・二十間　同町
一、一筋　同　斷　四間・三十間　同町
一、一筋　同　斷　四間・二十五間　同町
一、一筋　御鹽藏　四間・二十五間　同町

〆百四十一筋内　七十二筋　御收納藏
六十九筋　御鹽藏

加州宮腰浦より能州所々に積米百石に付運賃米御定

一、二石四斗八升五合　宮腰より今濱迄　海上　九　里
一、三石一斗六升六合二勺　同所より塵濱迄　同　十二里
但羽咋村同斷
一、三石一斗六升三合二勺　同所より一宮迄　同十二里半
一、三石三斗一升二合　同所より芝垣迄　同　十三里
但大嶋村同斷
一、三石五斗七升七合二勺　同所より川尻迄　同　十四里
一、四石一斗四升　同所より福浦迄　同　十九里
但富木同斷
一、四石五斗五升四合　宮腰より劔地迄　同二十四里
一、四石八斗一升九合二勺　同所より道下迄　同二十六里
一、四石九斗六升八合　同所より皆月迄　同二十九里
一、五石二斗三升三合二勺　同所より大澤迄同二十九里半
一、五石五斗八升　同所より輪島迄　同三十二里
一、五石九斗二升八合　同所より小田屋迄同三十五里
一、六石二斗一升　同所より時國迄　同三十六里
一、六石一斗九升九合二勺　同所より眞浦迄　同三十八里

一、六石三斗四升二合　同所より片岩迄　同三十九里
一、六石四斗七升五合二勺　同所より大谷迄　同　四十里
一、六石七斗五升五合　宮腰より高屋迄　同四十二里
一、七石二斗二合四勺　同所より狼煙迄　同四十四里
一、六石八斗八升九合二勺　同所より折戸迄　同四十三里
但羽咋村よりは大町村・金丸村潟上二里有、川賃銀積米十石に付六匁七分七厘

能州所口より内浦所々に積米百石に付運賃米

一、一石三斗七升四合　所口より松百迄　海上一里半
一、一石七斗二升二合　所口より野崎迄　同　四　里
但田鶴濱同斷
一、一石七斗八升八合　同所より大津迄　同　五　里
一、一石七斗八升八合　所口より中嶋迄　同　五　里
一、二石二斗六升八合　同所より乙ヶ崎迄　同　八　里
一、二石二斗六升八合　同所より中居迄　同　八　里
但七海同斷
一、一石九斗二升一合二勺　同所より甲村迄　同　六　里
一、二石二斗六升八合　同所より鵜川迄　同　八　里

一、二石七升　同所より新崎迄　同　七　里
一、二石四斗八升四合　同所より波並迄　同　九　里
一、二石七斗四升九合二勺　同所より宇出津迄　同十一里
一、二石八斗九升八合　同所より眞脇迄　同　十二里
一、三石三斗　同所より小木迄　同　十三里
一、三石一斗六升三合二勺　同所より長尾迄　同十二里半
一、三石三斗一升二合　同所より布浦迄　同　十四里
一、三石三斗一升二合　同所より松波迄　同　十四里
一、三石四斗四升　同所より鵜嶋迄　同　十五里
一、三石五斗七升七合二勺　同所より上戸迄　同　十六里
一、三石五斗七升七合二勺　同所より飯田迄　同　十六里
一、三石七斗二升六合　同所より蛸嶋迄　同　十七里
一、三石七斗二升六合　同所より正院迄　同　十七里
一、三石八斗五升八合　同所より雲津迄　同十七里半
一、三石九斗九升一合二勺　所口より引砂迄　同十八里半
一、四石一斗四升　同所より寺家迄　同　十九里
一、四石八斗一升九合　同所より越中魚津迄同二十六里

能州一國所々道程

金澤より所口道程

一、三里十三町餘　金澤より津幡迄
一、二里二十四町　津幡より高松迄
一、二里餘　高松より今濱迄
一、一里十五町　今濱より子浦迄
一、一里十三町餘　子浦より飯山迄
一、一里十八町　飯山より高畠迄
一、一里二十四町　高畠より二宮迄
一、二里十七町　二宮より所口迄
〆十六里十六町餘

今濱より輪島道程

一、二里二十五町　今濱より一宮迄
一、二里二十五町　一宮より川尻迄
一、四里二十九町　川尻より富木迄
一、三里二町餘　富木より劔地迄
一、一里三十一町　劔地より道下迄
一、一里二十町餘　道下より浦上迄

一、一里十四町餘　浦上より丸山迄
一、三十四町餘　丸山より繩又迄
一、一里四十間　繩又より長井迄
一、三十町　長井より輪島迄

〆

鈴屋越道程

一、一里五町　鈴屋より丸山迄
一、一里二十三町餘　丸山より久田迄
一、二十四町　久田より久龜屋迄

〆

鈴屋より飯田道程　八太郎越と云

一、二里三十町　鈴屋より黑丸迄
一、一里八町　黑丸より大坊迄
一、一里十六町餘　大坊より飯田迄

〆

飯山より田鶴濱道程　能登部海道

一、一里二十町餘　飯山より金丸迄
一、三十三町　金丸より德丸迄
一、二十町　德丸より良川迄
一、二里二十九町餘　良川より田鶴濱迄

〆

道下より輪島道程

一、二里五町半　道下より皆月迄
一、三十町三十間　皆月より樽見迄
一、八町四間　樽見より上大澤迄
一、十九町十間　上大澤より赤崎迄
一、二十五町二十間　赤崎より下山迄
一、十九町二十間　下山より鵜入迄
一、二十九町　鵜入より光浦迄
一、十町　光浦より輪島迄

〆

鵜川より輪島道程

一、三十二町　鵜川より八田迄
一、一里二十町　八田より下代迄
一、一里　下代より柏木迄
一、一里　柏木より與呂見迄

一、一里　與呂見より仁行迄
一、一里十町　仁行より輪島迄

〆

宇出津より輪島道程

一、一里三町餘　宇出津より宇加塚迄
一、三十一町　宇加塚より曾又迄
一、一里二十一町　曾又より當目迄
一、三里十町　當目より稻舟迄
一、十五町　稻舟より輪島迄

〆

中居より寺口道程

一、一里一町三十間　中居より七海迄
一、二十七町二十間　七海より地藏坊迄
一、二十三町五十間　地藏坊より小又迄
一、一里七町五十間　小又より荒屋迄
一、一里二十六町四十間　荒屋より本市迄
一、十三町二十間　本市より門前迄

〆

穴水より輪島道程

一、十三町　穴水より乙崎迄
一、二十七町　乙崎より地藏坊迄
一、三十一町　地藏坊より平野迄
一、一里十六町　平野より市坂迄
一、十八町　市坂より小泉迄
一、一里十八町　小泉より市瀨迄
一、一里十町　市瀨より輪島迄

〆

富木より所々道程

一、一里三十五町餘　福浦迄　一、一里二十五町餘　中嶋迄
一、四里二十九町　川尻迄　一、四里二十六町餘　堀松迄
一、七里十八町　一宮迄

堀松より所々道程

一、二里十一町餘　川尻迄　一、二里八町　大津迄
一、二里十八町　矢駄迄　一、三里二十一町餘　一宮迄

〆

一宮より所々道程

一、一里一町　瀧谷迄　一、二十五町　塵濱迄
一、一里二十九町餘　金丸迄　一、一里三十二町　子浦迄
一、二里八町餘　飯山迄　一、二里二十五町　今濱迄
一、二里二十五町　川尻迄

一宮より中島道程

一、十八町　一宮より柳田迄
一、十四町三十間　柳田より千路迄
一、十五町四十間　千路より鹿島路迄
一、十七町三十間　鹿島路より金丸迄
一、二十六町三十間　金丸より能登部迄
一、六町三十間　能登部より德丸迄
一、四町三十間　德丸より上村迄
一、五町　上村より西馬場迄
一、十一町　西馬場より良川迄
一、二十町　良川より末坂迄
一、三町　末坂より羽坂迄
一、十六町三十間　羽坂より大槻迄
一、十三町三十間　大槻より三階迄
一、十二町三十間　三階より町屋迄
一、十二町　町家より下村迄
一、十五町　下村より高田迄
一、八町四十間　高田より田鶴濱迄
一、二十二町　田鶴濱より白濱迄
一、二十二町　白濱より大津迄
一、十五町四十間　大津より鹽津迄
一、十五町　鹽津より笠師迄
一、十五町　笠師より奥吉田迄
一、六町二十間　奥吉田より川崎迄
一、二十六町　川崎より中島迄

子浦より所々道程

一、一里二十町　羽咋迄　一、二十六町二十間　杉野屋迄
一、一里六町半　塵濱御藏迄　一、一里九町餘　塵濱海際迄
一、七里二十間　所口迄　一、九里十三町　金澤迄
一、四里三十二町餘　武部迄

公儀役人廻り道程

一、九里十四町餘　金澤より子浦迄
〃
一、十里二十七町　金澤より飯山迄
一、五町七間半　飯山より白瀨迄
〃
一、二十一町　飯山より福水迄
一、一里八町　福水より神子原迄
一、二里八町四十間　神子原より一宮迄
一、二里二十五町　一宮より川尻迄
一、二里十町　川尻より谷屋迄
一、六町　谷屋より佛木迄
〃
一、一里五町　谷屋より大津迄
一、三里十町餘　大津より所口迄
一、二十一町　所口より古府迄
一、二十町　古府より八幡迄
〃
一、十五里三十町餘　古府より金澤迄

〃
一、三里　川田より高畠迄
〃

谷内・上棚灘筋御普請所之分道程

一、二里六町　一宮より上棚迄
一、一里三十三町　上棚より堀松迄
一、四里十五町　堀松より中嶋迄
一、十五町　中嶋より谷内迄
〃
一、三里二十五町　所口より黑崎迄
〃
一、三里　所口より江泊迄
〃
一、十八町　江泊より大野木迄
〃

歩刈道程

一、三里十三町餘　金澤より津幡迄
〃

一、二里二十四町　高松より今濱迄
一、四里三十五町　今濱より德丸迄
一、七里九町　德丸より曾濱迄
〃
一、五里十四町半　田鶴濱より谷内迄
〃
一、三里十町餘　中島より曾福迄
〃
一、四里二十七町三十間　中居より曾良迄
〃
一、四里三十五町　甲村より宇出津迄
一、二里十三町　宇出津より眞脇迄
一、二　里　眞脇より國重迄
一、一里八町　國重より合鹿迄
一、二里五町　合鹿より久田迄
一、五里三町餘　久田より小田屋迄
一、三里十町　小田屋より輪島迄
〃
一、七　町　敷戸より時國迄
一、八　町　時國より伏戸迄
一、八　町　伏戸より大野迄
一、十五町　大野より井面迄
一、十一町　井面より川西迄
一、一里十六町　川西より小田屋迄
〃
一、三十五町餘　宇出津より本江迄
一、三十五町　本江より久田迄
一、一里二十四町　久田より丸山迄
一、一　里　丸山より鈴屋迄
一、十七町餘　鈴屋より川西迄
〃
一、十二町五十間　川尻より安部屋迄
一、二里二十九町餘　安部屋より福浦迄
一、一里三十五町　福浦より富木迄
〃
一、十三町二十間　門前より本市迄

一、一里二十六町　本市より荒屋迄
一、十九町四十間　荒屋より貝吹迄
一、二十四町　貝吹より内屋迄
一、十町四十間　内屋より細屋迄
一、九町二十間　細屋より新保迄
一、五　町　新保より小泉迄
一、三　町　小泉より中村迄
一、一　里　中村より與呂見迄
一、一　里　與呂見より當目迄
一、一里二十一町　當目より中齋迄
一、三十三町　中齋より曾又迄
一、三十一町　曾又より宇加塚迄
一、一里三町餘　宇加塚より宇出津迄
〃
一、三十三町五十間　門前より安代原迄
一、二十一町　安代原より小町迄
一、二十七町餘　小町より上大澤迄
〃
一、一里二十一町　安代原より道下迄
一、二十四町　道下より門前迄
一、三十二町餘　門前より浦上迄
一、一里十五町　浦上より小町迄
一、二十七町餘　小町より大澤迄
〃
一、二十四町　上大澤より大澤迄
一、十九町餘　大澤より赤崎迄
一、二十五町二十間　赤崎より下山迄
〃
一、三町三十間　門前より和田迄
一、一里十二町餘　和田より中谷内迄
一、二十町餘　中谷内より皆月迄
〃
一、三十町三十間　道下より六郎木迄
一、十五町二十間　六郎木より小杉迄
一、十六町四十間　小杉より五十洲迄
一、十　五　町　五十洲より皆月迄

一、一里十四町　大澤より上黑川迄
一、二十一町餘　上黑川より縄又迄
一、十六町　縄又より二俣迄
一、十七町餘　二俣より別所谷迄
一、二十一町餘　別所谷より瀧又迄
一、二里六町　瀧又より小泉迄
一、三十一町餘　小泉より洲衛迄

高畠より所々道程

一、六町　小田中迄　一、四里十二町　田鶴濱迄
一、三十町　大町迄　一、四里十六町　神代川尻迄
一、三十一町　能登部下村迄　一、四里三十三町　一宮迄
一、一里一町三十間　德丸迄　一、一里二十一町　良川迄
一、四里五町　所口迄　一、二里十六町　羽咋迄
一、四里十六町三十間　越中氷見迄

二宮より所々道程

一、一里二町　飯川迄　一、一里六町　御領下村迄（能登國）
一、一里十七町　德丸迄　一、一里一町　良川迄

一、二里三十二町　金丸迄　一、四里六町餘　瀧谷迄
一、四里三十一町餘　川尻迄　一、三里一町　田鶴濱迄
一、一里十四町餘　石動山迄　一、五里　山崎迄
一、十三里三十三町　金澤迄　一、六町三十間　德前迄

神代川尻より越中氷見道程

一、二　里　川尻より佛木迄
一、一　里　佛木より大津迄
一、一里八町　大津より田鶴濱迄
一、二　里　田鶴濱より所口迄
一、一里五町　所口より八幡餘
一、一里五町　八幡より二宮迄
一、五　里　二宮より氷見迄

神代川尻より所々道程

一、二十三町五間　杉野屋迄　一、十四町三十間　中川迄
一、一里二十町餘　今濱迄　一、二里二十四町　川尻迄
一、五里　越中氷見迄

所口より所々道程

一、二里二町餘　田鶴濱迄　一、三里二十町　石動山迄
一、五里十九町　堀松迄　一、八里七町　富木迄
一、三里　鵜浦迄　一、四里　野崎迄
一、八里　中居迄　一、七里　穴水迄
一、十里　宇出津迄　一、十七町　矢田迄
一、二十九町　万行迄　一、一里二町　殿村迄
一、二里　澤野迄　一、二里二十五町　麻生迄
一、二里五町　須能迄　一、二里六町　菅澤迄
一、三里一町　黑崎迄　一、二十六町三十間　竹町迄
一、二十七町三十間古屋敷迄　一、三十二町　古城迄
一、三十三町　小池河原迄　一、二十二町　藤野迄
一、二里十五町　多根村迄　一、一里十町　千野迄
一、一里十二町　八田迄　一、一里十六町　中挾迄
一、一里二十四町　江曾迄　一、二里二十町　飯川迄
一、一里二十三町　若林迄　一、二里二町　久乃木迄
一、二里六町　西村迄　一、二里八町　坪川迄
一、二里二十町　今羽坂迄　一、二里十三町　新庄迄
一、二里十町　在江迄　一、二里　二十九日村迄

一、一里十町　三階迄　一、一里二十町　川田迄
一、三里十八町　蟻ヶ原迄

所口より口渡り道程

一、三里十八町　所口より三室迄
一、二里餘　三室より日出ヶ島迄　海上口渡り
一、二十町餘　日出ヶ嶋より鰈目迄
一、一　里　姥ヶ浦より甲迄　海上口渡り
一、一里十町　甲より前波迄
一、一里五町　前波より鵜川迄

御公領道程

一、二里六町　敷波より針山迄
一、十八町　針山より原村迄
一、　原より白瀬迄
一、十六町　白瀬より福水迄
一、二十五町　福水より神子原迄
一、　神子原より四町迄
一、二十五町　四町より千路迄

一、一　里　千路より中山迄
一、二十町　中山より上棚迄
一、十　町　上棚より二所宮迄
一、一里十八町　二所宮より安津見迄
一、二　里　安津見より安部屋迄
一、一里十八町　安部屋より佛木迄
一、二十町　佛木より松木迄
一、三十町　松木より豊後名迄
〃
一、一　里　小牧より谷内迄
一、一　里　谷内より別所迄
一、一里十一町　別所より瀬嵐迄
一、三十町　瀬嵐より深浦迄
一、二十五町　深浦より外村迄
一、十　町　外村より田岸迄
一、五　町　田岸より横見迄
一、三十町　横見より鹿島迄
一、一里十町　鹿島より鵜島迄

一、八　町　鵜嶋より大町迄
〃
一、十五町
一、一　里　川島より天神谷迄
一、二　町　天神谷より下唐川迄
一、三十町　下唐川より七海迄
一、一　里　七海より梶村迄
一、一里十八町　梶村より藤巻迄
一、一　里　藤巻より岩車迄
一、一　里　岩車より鹿波迄
一、一里二十三町　鹿波より曾良迄
〃
一、二　里　曾良より中谷迄
〃
一、二　里　院内より眞脇迄
一、六里十五町　眞脇より時國迄
一、十五町　時國より伏戸迄
一、十三町　伏戸より大野迄

一、二十町　大野より井面迄
一、二　里　井面より黑川迄
一、一　里　黑川より河内迄
一、十里十八町　河内より黑島迄
〃
一、一里八町　武部より川田迄
一、一　里　川田より下村迄
一、八　町　下村より八幡迄
一、二　里　八幡より熊淵迄
一、一　里　熊淵より山崎迄
一、二十町　山崎より大泊迄
一、十　町　大泊より東濱迄
一、二十町　東濱より佐々波迄
一、二十町　佐々波より虫崎迄
一、十一町　虫崎より庵村迄
一、八　町　庵村より百海迄
一、十一町　百海より白鳥迄
一、十一町　白鳥より江泊迄

〃
一、三十一町　庵村より江泊迄
一、十三町　江泊より大野木迄
一、三十町　大野木より鵜浦迄
〃
一、三　里　大野木より所口迄
〃
一、二　町　大泊より柳浦迄
一、三　町　柳浦より脇村迄
〃
一、四　里　吉野間より黑崎迄
〃
一、二　里　下村より祖濱迄
一、五　町　祖濱より石崎迄
〃
一、一里三十一町餘　洲衛より中居迄
〃
一、一里三町餘　飯田より鈴内迄

一、一里一町餘　鈴内より笹波迄
一、二十七町　笹波より高屋迄
〃
一、十五町五十間　正院より蛸島迄
一、三十一町二十間　蛸島より小泊迄
一、十九町　小泊より伏見迄
〃

門前より所々道程

一、五里四町餘　輪島迄　一、五里二十一町餘　富木迄
一、五里二十八町餘　中居迄　一、十里十九町　鵜川迄
一、十三里二町　宇出津迄　一、十里六町餘　粟藏迄
一、十七里五町　松波迄　一、十五里餘　飯田迄
一、十六里四町餘　折戸迄　一、十八里十町餘　三崎迄
一、十二里餘　七尾迄
一、二十三里二十七町四十間　金澤迄
〃

能登名跡志解說

能登名跡志には種々の外題があり、內容も亦隨つて同一ではない。能登巡り・能登名跡志・雜能登路記・能登路記・能登名跡集・能登名跡誌・能登一國名跡志・能登名海志・能登鏡の九種が、校訂者の今日まで見た所のものであり、それ等に就いて編纂せられた次第から先づ考へて見たい。

原著者の最初に書いたのは能登巡りであつたが、次に訂正加除して能登名跡志とし、更に精を加へて雜能登路記としたのが、この書の進展の大體の順序であつたのである。そのことは雜能登路記の奧書を見ると能くわかる。校訂者は曾て之を鳳至郡輪島町の住吉神社藏本で見たことがあつて、その文を書き拔いておいたことがある。

右たる雜書は、此國の秀雅所謂國語を書擧んと欲すれども、短才にして分明ならず。明和丙戌の年或眞人此國巡りの折所望あるに默止がたくて、見聞せしことを始て書つゞりまゐらせしを、能登巡りとなんありしに、其後安永丁酉の年我友此國を一見の時し懇望、據なく書て送りけるを、能登名跡志と題號ありしもうしろめたく侍りしに、今將親しき人々是非に一編せよとあるを、いなむといへどもふせぎがたくて、有增を書加へ雜能登路記と號して、乾坤の二冊となしぬ。兎に角野老村童の愚かなる物語を、拙き筆に書き集めたる事たのみがたければ、見る人あやまるを正し、たがへるをたすけ、おちたるをおぎなひ給はゞ我幸甚ならん而已。

安永庚子　月　日

之によつて見ると、明和丙戌本・安永丁酉本・安永庚子本と次第に改纂せられたことになる。その後原著者は、更に雜能登路記後編と題した雜錄を頭書に加へて、それには寬政八辰の中秋日と記してをり、多年に亙る努力は之を以て略々終局とする。この雜能登路記を寬政十一年に京都で板行の計畫があつたことは、亦左記の奧書のある本があつてわかるけれども、實際剞劂に附する運びには至らなかつたらしい。

寬政未のとし、京都畫工師禮といへる人、此國の圖繪の

興板の志し有て、予が能登路記を所望あるにもだしがたく送る折から、友人集り、殘りなきことをあはれみ、とりぶ〳〵寫し給はりしを集て、老の忘れ草となんはべれば、御覽の後はやく御かへし希ふもの也。

上記の外題以外に就いては、今一々之を比較研究する隙をもたぬことを遺憾とする。しかし能登誌は藤井鵄峰氏藏本によつて見た記憶があり、それは文章の極めて粗笨なものであつたから、恐らくは能登巡りと同一なのであらう。能登名跡集も能登名海志も、能登鏡も大體に於いて能登名跡志と同一で、『安永六年酉立春日加陽金府太田氏何某』の序文のあるものである。但し能登巡りの外題でありながら、明和丙戌本ではなく、『安永六年丁酉、孟春日加陽金府住文豐齋』の自序の載せられたものもある。雜能登路記は能登名跡志よりも鼇頭の多いものであり、能登路記は雜能登路記後編を加へたものである。

こゝに注意すべきは、同じく能登名跡志でも頭書が非常に多く、行文も頗る綺麗になつたものがある。それは、原著者のなしたことではなく、後に能文の士が改刪を加へたものであつて、校訂者はそれを松田本と稱してゐる、この本には『寛政十戊午天狹冬月皆成、松田恭義書』の奥書があり、是によつて、原著書の生前既に他人の加筆した別種の能登名跡志が出來たことがわかる。而も事實上最も多く世に行はれてゐるのがこの松田本であり、內容も極めて整頓してゐて、原著者最後の勞作たる雜能登路記よりも遙にいゝ點がある。かうした理由から、今次の刊本の底本をこの松田本能登名跡志とすることに決した。但し開卷劈頭の『金澤御城下より云々』の一節と、能登名跡志卷下の次に挿んだ能登名跡志後編とだけは、雜能登路記から取つたものである。實際原著者は、雪り好きな俳句が一向巧妙でないのみならず、假名遣ひも滅茶苦茶であり。文章も亦拙劣過ぎるので、原著の儘採ることのできなかつたことは、聊か殘念なやうにも感じられた。

能登名跡志の原著者が誰であるかに就いては太田氏何某と書いたり、太田道謙源賴資と書いたり、(道謙の文字に就いては校訂者に異議はあるが) 如松軒文聾と書いたりしたものがあつて、その名前だけは知られてゐたが、人物閲歴は

一向わかつてゐなかつた。それを森田柿園の考證に、楠肇の跋文なるものを擧げて詳かに說いてゐることは、世にも大なる驚きであつた。實際校訂者は能登名跡志の數十本を見て居たことはいへるが、未だ曾て楠肇の跋文なるものを見たことがなかつたからである。それで結局この跋文は森田本にのみあつたものであらうことを推測して、柿園手澤のそれが現にごこにあるかを檢究する爲に、圖書館協會の活動を求めた所、意外にも大坂の藏書家高木利太氏の文庫に存することが知られて、間もなくそれを借覽することができた。高木本は原著者最後の訂正が加へられたものであり、能登路記の外題あるものであつた。その鼇頭には寛政八年の雜能登路記後編が書き入れられ、寛政十一年開板の計畫のあつたことも記されてゐた。さうしてこの本を書き上げる爲に雜能登路記の奥書までが多少改められて、

右たる雜書は、この國の詩景所謂風色を枚擧せんと欲すれども、短才にして分明ならず、唯彼を聞是を見て書記し懷にせしを、明和丙戌の年或眞人此國巡りの折所望あるに默止がたくて云々。

となつてをり、最後に問題の跋文が添へられてゐた。それを讀み行くことの滿悅さは、まだ見ぬ親に會うたもかくやと思はれるばかりであつた。いでその全文を寫さう。

往んじ年予が友素標なるをのこ、能登に遊ぶの日、世に謂はゆるのこめぐりなる小冊を懷にして輪島にいたり、ひとりの老醫にあへり。因にかの書をとり出で、猶もその所在こゝかしこと尋問ふに、老醫莞爾として曰、此書やもとあがわかゝりし時心覺え迄にそこはかとなくしたがきして置しを、いつしか世に洩出て、今や傳へもて寫しぬるやうになりけるもいとおこがまし。是まさに初稿の物にして遺漏甚し。やつがれ此擧にかゝりて凡三たび裘葛をかへ、今はた甚くはしきをあつめたり。しかはあれど始末章句のまち〳〵もわかたず、ひたすらおもひ出るにまかせてかいつけたれば、猶かうがへを經ざるには、おのがこゝろにもいまだ足れりとせざるまゝ、又もや世に洩なん事をおそるゝゆゑ、人に見することをせずと語れるよし。強て請ひ見まほしとおもへども、旅のつかれも重りて一夜の宿りなるまゝ、見盡さんずべきやうも

あらざれば、請はで止ぬこそ。予おくれて此事を聞しより、せちに其人をおもひ慕ふあまり、いかにもして一たび見まほしきなゞ、人づてもていひやりけるに、ことし文化四のとし春の末つかた、はからずも予が家に訪ひ來りて、名を申し通ぜるまゝ、いとうれしくあひ迎へ、初て逢しことながら、互に舊相識の心地してかたらひける時、翁此冊子を袖よりとり出て、こや此とし月かく迄つどりてもこし來ぬれゞ、ことの葉つたなく世にはぢがはしき事多かめれば、人にも得見せで過ぬれゞ、願くばこれを正してよきに雌黄を加へてん事を請へり。予や共にさへつたなけれゞ、もとより此書を見まくほしと、年頃おもひ重ぬる事、まして我をおもひ、遠くもち越せる志を感ずるまゝ、敢ていなみもすべきにあらず。其まゝ手にとりて、先熟々よみてこそといらへたるに、翁ほゝえみて、あなかしこ人にもらし給ふなといひつゝまかりぬ。爾後ふたゝび舊土をおもへるにや、金澤の城下に住んとて、輪島に行つゝ、そこ〳〵のいとまごひし立さらんとしける其日、聊風の心地して終に空しくなれりとか。

時はことしの五月の半ば頃なりけらし。予これを聞てむねうちおどろき、さるにてもかりそめにいとまごひして、宮のこしの浦より福浦をさして乘り出し其船かげの、つひのわかれと成にたる事、いといとう悲しく、いたはしさ限りなきあまり、先此冊子のするに、忘れざるさきにと筆もて始末を書じるしぬ。翁姓は源、苗氏は太田といへり。諱は賴寛、稱は道謙、號を文聾をいふ。又如松軒ともいへり。其むかしは金澤城中作事所の屬吏にして、官用によりて能登・越中を巡れる事しば〳〵也。翁性賓文雅風韵をしたひ、就中俳歌に耽り、遂に業を更へて醫となり、山水勝區を樂み、一世を弄觀す。髮にして能登巡の稿成れり。後輪島に移居して年月を送る。猶そのくはしきを温故(タヅネ)んが爲なりとぞ。嗚呼翁の此書に於ける、其心志を盡せる事かくのごとし。いひつべし其功偉なりと。若夫ことのはの鄙俚なるは、潤色を經ざる璞玉なればなり。予願くは後年これを校正して、往々梓にのぼせ、翁に九原のもとにして、其遺言をふまんとす。讀む人それまではこれを恕せよといふ事爾り。

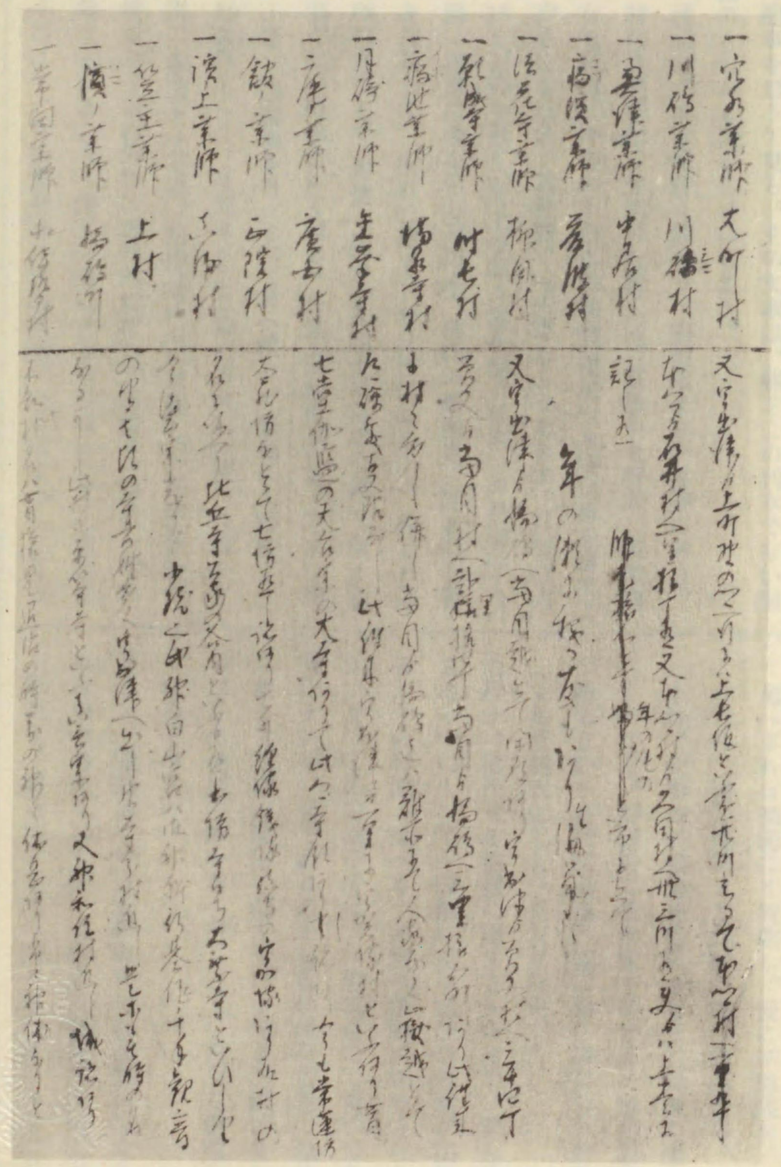
文化丁卯季夏の日　　芸臺　楠　肇　識

楠肇は俗稱楠部屋金五郎、芸臺はその號。當時能書を以て盛名を顯してゐたから、賴資は芸臺が能登名跡志を見んと申込めるかゞもあり、それを幸に訂正を求めるべく訪問したものと思はれる。而してこの二人の會合は、最初にして最終のものとなつたのであるが、賴資の閲歴がかばかり今に傳へられたことは、一に芸臺の跋があつたのが爲であるを思へば、深き宿世の因緣があつたのかも知れぬ。芸臺の文によつて見ると、賴資は殆どその全生命を能登の爲に捧げた恩人であつて、芸臺はその志に報いるため彼の遺著を上梓せんと欲したが、遂に目的を達しなかつたのである。それを百二十年後の今日鉛槧に附して世に頒つことの機會を得たのは、我等の悅びであり、同時に賴資・芸臺二人の悅びでもあらうと考へられる。

上述の如くにして高木本の研究が一通り終つた後に、又重大なる一事件が起つた。といふのは、鹿島郡能登部神社の神職清水一布氏がその藏本の閲覽を許されたことである。この本こそは芸臺の所藏であつたものであり、その本文は恐らく賴資の自書であり、跋文も亦芸臺の自筆と認められるものである。第一この本の表紙の見返しには、方九分弱の『楠肇之印』があり、裏表紙の内側には楠部屋金五郎を略した楠金の二字が記されてゐるのみならず、跋文の初めに難讀の關防が捺され、その終りに方三分の『楠肇』『子春』の印影を見ることができる。賴資の跋文にも、關防があり、終りに太田道兼源賴資とあつて花押と印がすゑられてゐる。是によつて世に道謙と傳へる彼の醫者としての通稱は道兼の誤りであると定めてよい。それよりも上卷の中に賴資の肖像を二葉まで描いて自賛をしてゐるのは何よりも奇觀である。それをこの刊本には寫眞版にして載せることにした。又芸臺は跋文中に『諱は賴寛、稱は道謙』と書いて居るが、これは深い交際もなかつたからの誤謬で、賴資自身が序文の終りに印影を模して朱で描いたものは、確かに賴資であり、又道謙の道兼であらねばならぬことは前に言つた通りである。殊に面白いのは、芸臺が賴資との舊約を重んじて、賴資の序文にも本文にも、所々に雌黄を加へたことであり、賴資の爲に出來得べくんば京洛の書林にで

も交渉して板行させやうとした用意が充分に窺はれる。この清水本こそは、賴資がその物故數ヶ月前に懷中して芸臺を訪問したものに相違なく、たゞ〳〵しい老筆を驅使して、書損の上へ切紙を貼つたり、塗抹して傍書したりした、苦心慘澹たる跡の痛ましくも亦尊いものである。芸臺は、この本を預つたまゝ、程なく賴資に逝かれたので、彼が生前の事を思ひ出しながら、卷末の半紙二葉に跋文を走り書きにしたものであらう。それがその後如何なる經路を辿つて清水氏の藏架に納められたかは今探ぬるに由もないが、卷末に附牒がしるされてゐるから、一たび書林の手を潛つたことは推察できる。かくして森田本の行衛が追跡せられたことゝいひ、又清水本が現はれたことゝいひ、今次の刊行が神明加護のうちに進捗しつゝあることを、つく〴〵考へさせられたことである。

本書の内容は、その外題の示す通り、能登一國の名蹟に就いて細大漏らす所なく記したもので、この刊本の如く二冊に分けたものでは、その上卷に加賀河北郡の盡端高松に筆を起して、直に能登羽咋郡今濱に入り、半島の西岸即ち所謂外浦廻りをして、珠洲郡狼煙に至るまでのことを擧げ、下卷には珠洲郡三崎から半島の東岸即ち内浦巡りをして七尾附近に着し、それから邑知潟の岸に添ふ東街道を、羽咋郡宿に來り、こゝに往路の今濱と環狀に一周したことになるのである。外浦及び内浦からかけ離れて山入りになつた所は、中通りといふのであるが、その諸村のことは兩海岸の向寄りに附載してゐて、實に巧妙な編纂振りを示してゐる。記述の方法が强ひて文獻の穿鑿に墮することなく、村翁野嫗の口碑傳說を如實に取り入れてゐることは、自序の中に『予いさゝか公務にかられて、此北濱を巡ること久し。折にふれ邑人の物語或は雜見するにまかせて、文蒙のをかしきをも知らず、たゞ此儘に書記して集たる』ものといふ通りであり、本書の眞價亦係つてこゝに存するのである。しかもこの書に記載された傳說は、今や既に地方人の記憶に存せざる所となつたのもあり、著者の名跡として擧げたものも、亦桑滄の變に遭うて知り難くなつたのが鮮くない。言はゞ讀者は本書によつて、能登の古い寫眞を見る如く感じさせられるものである。



清水一布氏所藏本

一例として、今は能登第一の繁華郷になつてゐる和倉温泉の記事を拾うて見る。その文章は、態とこの刊本でない別種のものから採ることにしよう。

涌浦村、或は和倉共書けり。田鶴濱より一里灘にあり。村續き奥原村、舟尾村を經て行。家數十七軒許、甚淺間なる村也。沖中の小島に温泉有。潮滿つる時は島を越す。汐干になれば、湯坪熱くして寄ることならず。石傳ひ或はそだ抔を敷て、其上を歩み湯を汲。日本一の熱湯にて、湯一杯水三盃を和して用ふ。稀代の熱湯也。湯を司る者を湯番とて、所口に住す。和倉屋何某とて、昔より御印物頂戴して、湯賃一廻り一人四十文宛取に廻る。渚より湯坪迄一町餘舟にて渡る。舟賃・湯桶代不レ定。思々に拂ふ也。扨湯桶を舟に入、島へ渡り、其桶に入湯治す。日蓋(ヒオヒ)等もなく、淺間なること言ん方なし。被(ネマキ)一つ賃十二文、蒲團十一文也。甚麁品にして用難し。夏は蚤・蚊に責られ、只村方等の者は此に宿して湯治す。所口より陸地二里に不レ足、海上は纔に一里餘なれども、淺間なる村にて、食物類萬端不自由至極、迚も宿することなり難し。所口に居て取湯にして用ふべし。取寄せても水を加へざれば熱湯にて用難し。爰に不思議有。かゝる熱湯なるに、湯の藥師とて此村の後に藥師堂有。湯坪普請する時、此藥師の佛像を横臥させば、湯忽ち潮と成て熱きことなし。普請終て彼佛像を直せば、熱湯涌出して元の如しといへり。又湯島の脇に別に辨天の小島有。風景甚よし。無病にても一見有度所也。

湯坪が、櫛比せる浴樓に圍まるゝのみか、辨天島までも埋立地の中に入つて、棧橋に能奥通ひの汽船が横付けにせらるゝ今の有樣と比べて、非常の懸隔が認められるではないか。更にこの安永中では、一町餘舟にて渡つてゐた所を、文化十三年の著である金子鶴邨の能登遊記で見ると、陸から島まで板橋を架し、湯ざやに小屋まで設けられてゐるから、その進展の跡を考へ得られて、大なる興味を感じないではゐられない。

更に又、能登島に於ける蝦夷穴の條を繙いて見る。そこには古墳の壙穴である筈の土窟に、蝦夷人が住んでゐたといふ傳説と、能登島が秦澄の門下臥行者の出生地であつたと

604
539

いふ口碑とを結びつけて、次のやうに語られてゐる。

須曾村に衣川とてあり。鮭の魚多く登りしを、蝦夷の大男是を取て喰ふ。或時臥行者來りて鮭魚を吳れといひしに、大男是を惜みて得させざりければ、其時臥行者の詠める。

昨日きつ、今日もきて見る衣川。すそほころびてさけもあがらず。

かくありければ、其後鮭一疋も不レ登。彼大男食物に飢ゑて、蝦夷島へ行きしとなん。

これは併し奥南盛風記に、陸中國衣川の事を記して、『天正十九年秋冬の比、糠部の夫のもの催されて、衣川に來りけるによめる。きのふきつけふきて見れば衣川裾ほころびてさけのほるかな。』とあるのと出自を一にし、衣川又は須曾の地名を解釋するが爲のものであること、恰も金澤・金沼・金山澤などゝ名づけられる所に、芋掘藤五郎の傳説が伴隨する如く、所謂地名傳説の性質を説明してくれる一つの資料である。

能登に關する和歌の萬葉集に載せられたものは數首ある。その和歌の中にあらはれた地名に就いては、從來隨分研究した人もあるやうであるが、香島津と机島は今だに判然してゐない。就中七尾西灣に浮んで種ヶ島に隣る小さなものを机島だと決めることは、種々の點から妥當でないやうに思はれるのであつた。果然この能登名跡志は、他の萬葉歌に就いて記してゐるが、所聞多禰机之島（カシマ　オノツクエノシマ）のことは全く沈默を守つてゐる。さうして今いふ机島と種ヶ島とのことを、猿島・田根ヶ島と書いてゐることから見ると、この名勝の揑造が能登名跡志以後の最近代から初まつたと斷じていゝやうである。

瀨嵐村より島の路通り村まで纔六七町有。高茂の渡とて舟渡あり。又此磯に猿島・田根ヶ島とて有。中にも猿島は廻り二十町有、甚だ勝景なり。

こゝに猿島の周圍を特に擧げてゐるのは、それが大きいからであるらしい。して見ると田根ヶ島は小さい方になる。しかし、これでは今日の實際と全く合致しない。何故なら、今は面積も高さも勝れたのが種ヶ島であるからである。念の爲にこの刊本にしたものゝ方がごう書いてゐるかを取調べて見よう。

瀨嵐村とて公領あり。風景の小島二つあり。一つは猿島といふ。今畑に成りてあり。一つは種ヶ島とて宮森に成りてあり。惣じて陸より向の島の路へ、中にも近き所にて、渡しあり。島の路通り村より、此小牧・瀨嵐へ五・六町あり。則高茂の渡しといへり。

これも前文と同じい趣を言つてゐる。畑に成つてゐるのは今の種ヶ島で、美しい松林なのが今の机島である。机島では地質と地形との關係上、どうしても畑の耕作ができない。然らば則ち机島を揑造する際、その實名であつた種ヶ島の稱が猿島に移り、その結果として猿島の名は全然消滅に歸したと考ふべきではあるまいか。鹿島郡誌に、今の種ヶ島が、もとは宮森であつたけれども、次第に畑に變じたのだと書いてゐるのは、この能登名跡志の文の解釋に苦しんだ結果で、正鵠に中つた判斷だとは思はれない。尙能登名跡志の附翼には、机島の位置を八ヶ庄と書いたのもあるが、これは能登島方面とするものであるから、全然別問題である。

能登名跡志が種々の點から見ていゝ本であることは言ふまでもない。だがそこには良くない第二の部分がある。それは鼇頭に書かれてゐるのが普通であるけれども、それだけを首卷にしたのもあり、或は後編に纏めたのもあり、無題であることもあり、或は能登名跡志附翼と題したのもある。記事の内容は、十村組別・御扶持頂戴百姓・寺領社領・式内神社・神主付・諸宗寺號・觀音札所・十二藥師・作佛藥師尊・名所舊跡・名物・收納藏鹽藏・海上運賃・所々修理橋梁などであつて、これらは何れの本にも悉く載せられてゐる譯ではなく、又道程の如きは多く書かれたのと少いのとがある。これは雜能登路記時代から原著者によつて書かれたのであるが、後次第に補足せられたもので、正しくない點の多いものである。校訂者は初めこの部分を全く棄てようかとも考へたが、それでは原本の姿を損ふから、最も誤の多い諸宗寺號と、多くの本に載せて居ない御修理橋梁とだけを省いて、その他は少々の修正を加へて保存することにした。併し村名の鄕庄別などは、之を富田景周の越登賀三州志に比べて非常の差違があり、この本の良くないことがわかる。

604
539

式内神社の所在も一向信用の置けないものだらうし、收納藏・御鹽藏の數が合計百四十一とあるのに符合せぬのも、どこかに誤謬があるのだと思はれる。隨つてこの刊本が、流布本より良くなつてゐることは保証できるが、本來の缺點を如何ともしようがない。この用意を以て見るべきものであることを、幾重にもこゝに斷はつて置く。

昭和六年五月

校訂者　日置謙

昭和六年八月一日印刷
昭和六年八月三日發行

三百三十部發行

金澤市兼六園
石川縣立圖書館內
發行者　石川縣圖書館協會
代表者　中田邦造

金澤市博勞町七四
印刷者　向井伊三郎

金澤市博勞町七四
印刷所　經業堂印刷所

604
539

604
539

NO.

PATENTED NO. 119016

"F-M"

PAMPHLET BINDERS

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thick
851(菊倍)	30. cm. x	22.5cm. x	1cm.
852(四六倍)	26. „ x	18.5 „ x	1 „
853(菊)	22.5 „ x	15. „ x	1 „
854(四六)	18.5 „ x	12.5 „ x	1 „
855(特)	24. „ x	15. „ x	1 „

Special sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES IN ALL KINDS

F. MAMIYA & CO.

OSAKA-TOKYO-FUKUOKA